
二度目の勇者

ひろね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一度目の勇者

【NZコード】

N8281M

【作者名】

ひろね

【あらすじ】

相沢花梨^{あいざわ かれいん}は高校入学前に怪我をしたため、休学していた。怪我が治り高校に通うが、クラスに馴染めなかつた。

そんなとき、仲もよくないクラスメイト数人と王道パターン（魔王を倒すための勇者召喚）の異世界召喚にあつてしまふ。

運よく（？）勇者は免れただけど、勇者の従者にされました。

仲間意識もほとんどなく関係もギクシャク… これで本当に魔王が倒せるのか？

主人公一人称で、時々別の人代わります。多少残酷な描写有り

ます。

01 セツカグ戻った日常は…?

私は課題を担任に提出し終わり、カバンを取りに教室に戻った。開け放れたれた廊下の窓から入つてくる風は、まだ少し熱気を含んでいる。九月の終わりならこんなものか、とその風を受けながら歩く。

普通の学校、普通の生活。すれ違う子もこの日常的な平和が崩れるなんてこと、露ほどにも思ひてないふ、とあることを思い出し、そんなことを考える。

けれどすぐにその考えは捨てた。もう 考えても仕方ないことだ。頭を軽く振つて現実に戻る。

階段を上つて二クラス分歩いて教室の戸を開けようとしたら、タイミングが悪かつた と後悔した。

中において楽しそうに話をしていたのは、クラスでも人気のある男子、蒼井隼人（あおい はやと）と、その隣にその親友の大野洋一（おおの ようじち）と女子、篠原愛美（しのはら まなみ）、堤恵理（つつみ えり） の四人だった。（つて、説明が長いわ）あまりお近づきになりたくないけど、不幸なことに私の席は件の蒼井くんの隣だった。

ふう、と分からぬ程度にため息をついて、それからなるべく気にしないように近づく。それを蒼井くんは田ぞとく見つけ、

「あ、花梨（かりん）ちゃん、ビニコつてたの？」

と、気安くのたまつた。

ちゃんと付けられて軽くムカつくのと同時に、篠原さんが軽く睨みつける。本当に分かりやすい顔で と心の中で苦笑する。

「課題を提出するの、遅れていただけ。先生に渡してきたから帰る

の。それじゃあね」

近づいて自分の席にあるかばんに手を伸ばした。
かばんを手にとつて、一応声をかけられたので、軽く挨拶をする。

「相沢さん、大丈夫?」

今度声をかけてきたのは、大野くん。

大丈夫、というのは、私は今高校一年生なんだけど、入学するちょっと前に大怪我をして、三ヶ月以上休んでいたから。

入学前はもう少し明るい性格をしてたしね。クラスメイトはその辺知らないし、怪我の後遺症で辛いんじゃないのかな、って思っているみたい。

でも本当に辛いのは体じゃない。心のほうがあとまでしつこく残つてる。

すでに夏休みも終わって二学期になつてているけど、だからこそ、その頃にはもう仲のいいグループは決まつていて、私のに入る隙間はなかつた。まあ、別に一人でも平気だからかまわないけど。

ただ、隣の席（あいうえお順）になつた蒼井くんはそれを気にしているのか、何かと話しかけてくるんだけど、いかんせん自分がもてるのだと自覚してほしい。近寄つてくる女の子はかなりいるけど、今のところ蒼井くんから声をかけるのは私だけ、というはた迷惑なことになつていて。

なにより、体の痛みより心の痛みのほうがきついんだけど……それは別の話なので割愛。

とりあえず、大野くんに「大丈夫」と短く返す。
すると、それが気に入らないのか、篠原さんが「怪我をするとみんなが大事してくれるのでね」などとのたまう。

失礼な。先ほど心の痛みのほうがきついといつたけど、体だつて全治三ヶ月の大怪我だったのよ。初めの頃は寝たきりで体力は落ちるし、よくなつてくれればリハビリとかでまた苦労するし。そんな気持ちを少しば味わつてみてよ！

……まあ、蒼井くんたちに声をかけられることに対するやつかみというのは分かつてゐるんだけど。本人を目の前に言わないでほしい。もつぱら身についた鉄面皮から、さらに取り繕つた表情も消えていく。こうなるともうどうでもよくなつて、カバンを持ち直してその場から立ち去ろうとすした。

が、急に床が発光して、足を出すのをやめてしまった。

「なつ！？」

「なにこれえ！？」

「うわ！」

異常現象にそれぞれ叫びながら輝きを増した床を見ている。それは、光がある程度広まると、円を描き始める。

えーと、これってもしかして……？

私個人にするところいう不思議なことにあまり心を動かされたりしない。なんというか、靈感というものがあるらしく、影のない人たちとか、一階なのに普通に歩いている人とか　　そういうのを見慣れているせいで、靈現象は結構平気なんだけど。

でもこれは靈現象じゃない。

そう思つてゐる間に、光が室内に満ちて一瞬にして視界が真っ白になつた。いきなり無重力になる浮遊感、そしてものすごい勢いで引っ張られる。

光が収まつたあと、一番最初に目にはしたのは、どうみても外人サンな　　というより、ありえない色をした（ふわふわピンク色の天然の髪に、紫色の瞳）、白一色を身にまとつた女性。

その姿を見て、私は氣を落ち着かせようとして、私と彼女以外の人を探そうとして、すぐ近くになんか嬉しそうにしている蒼井くん、大野くんと、驚いた顔をした篠原さんと堤さんがいた。

「はじめまして、勇者様　いえ、勇者様と従者の方々」

彼女は少しどまじつたあと、さりとて言つてくれました。
視線の先は蒼井くん。どうやら彼が勇者決定らしい。
そして、残る私たちは蒼井くんのお付き　ってことか。

お決まりのパターン　異世界召喚。

王道パターン　魔王を倒すための勇者。

百歩譲つて、一人じゃなかつたことと、メインが自分じゃなかつたつてことだけはマシなのかもしれない。
でも、なにもかも出来すぎていて、私は苦笑するしかなかつた。

01 セツカグ戻つた日常は…？（後書き）

読んでいると刺激されて書いてみたくなりました。
王道だけど外れてる…そんなのを書いてみたいですね。

私たちが呼ばれたところは、エーアストという世界の中にあるツヴェルフという国だという。

そして案の定、『魔王』を倒すための強い『勇者』が必要で、その勇者を探してこうして、召喚魔法を行ったという。

これらの話はすべて先ほどの女性 ディリアさん。この国最高位の巫女さんらしい。持つて生まれた力は強いけど、基本的に癒しとかそういう系統のほうが強いため、巫女になったという。

ちなみにこの世界は『魔法』というより純粹に『力』というらし。持つて生まれた力によって、細かく分類すると火、風、水、地、光、闇などの属性に別れている。その中でも攻撃系か癒し系など別れるみたい。

さらにこの国はだいたい一百年前に同じように『勇者』を呼び出したことがあるとか。そのときは『魔王』を封印して、『勇者』は亡くなってしまったというが

普通の部屋に通されて、椅子に座つてお茶を頂きながら聞いた話だ。

で、説明が終わつたあと机の上に載せられたのが、普通の大きさの剣と、それよりも細身の剣、そして緑色の大きな橢円形の石がはじめ込まれているペンドント、タイガーアイのような茶色い球が連なつたブレスレット。

「なんですか、これ？」

「あなた達の『力』を引き出すためのものです。こちらはヨーライチさんに。攻撃力の高い剣です。これをもつていると水系の力も使えます。

そして、こちらの首飾りはマナミさんに。どうやらマナミさんは癒しや護りの力が強いので、それを増幅するためのものです。

エリさんは地の力を引き出してくれるもので、主に防御系などですね。あと、道を示すものもあります。道中ではエリさんに頼ること多多そうですね。

そして「

どうやらそれぞれの力にあつたものを持ってきたようだ、普通の大きさの剣を大野くんに、ペンダントを篠原さんに、ブレスレットは堤さんに渡した。

となると、残りは細身の剣なんだけど……」**これは勇者の剣に相応しくないような気がする。でもそうなると蒼井くんが持つものがな**いし……あ、私は必要ないってことね。

などと思つていると、「そしてこれはカリンさんに」と、細身の剣を私に差し出す。

えーと……もしかしなくとも、コレを私に使え、と? その前に**勇者**一行様なんてご遠慮したいんだけど。

まあ、そう思つても相手が言つことを聞いてくれるなんて思つてはいけない。**ディリアさんは私の気持ちなんてまったく考へず、剣の説明をする。**

「この剣は、持つものの力に見合う力で敵を倒してくれるものです」「は?」

意味が分からなかつたのか、蒼井くんが間抜けた声を出す。
なんとなく想像がついたんで、仕方なく。

「要するに、その人にあつた実力くらいで勝手に動いてくれて、剣を扱う人の実力っていうか、剣技がなくても大丈夫つてことじやないの?」

「ええ、そのとおり敵意を持ったものを斬るのを手伝ってくれる剣です。その……カリントだけは力の系統がよく分からなかつたので……」

困つた顔をしながら説明するティリアさん。

それつて、分からなかつた=使えない、って判断したのかな?

なら私は遠慮を……などと思っていると、蒼井くんがそんな気持ちをさくつと無視して。

「分かつたから……その、俺のはは?」

「あの、ハヤト様のは王血ひとのことです。さすがに勇者様ですか

「あ、そう?」

とたんに嬉しそうになる蒼井くん。そして、蒼井くんだけしつかり様付けで呼んでいるティリアさん。

それにしても喜んで勇者やりそうで怖い。大野くんも同じような感じだし。篠原さんはそれでも抵抗があるのか、ペンドントをつけたわけでもなくじつと見つめている。

堤さんは蒼井くんたちに近いのかな、面白そうな顔してブレスレットを右腕にはめていた。ちょっと意外だった。

ティリアさんは蒼井くんに「そういうことなので、もう少しお待ちください」と答えた後、私が剣を受け取っていないことに気づく。

「では、カリンさん」

「お断りします」

「……」

「おい、相沢?」

あ、蒼井くん、私の呼び方が作つたような『花梨ちゃん』じゃな

くて、『相沢』になつてゐる。

やっぱり、浮いていた私に氣を遣つてくれていたんだろうか？
といつても余計に浮いて（一部女子を敵にして）しまつていただけど。
と、それはおいといて、困つた顔をしながらも、ずすずいつと私の前に剣を出すティリアさんに。

「私の力の系統が分からないつてことは、みんなと比べたら微弱なものだと判断しました。なら、剣のおかげでなんとか戦えるようなのが一人いると足手まとい。それなら私はここでみんなを待つていたほうがいいと判断して、魔王討伐の参加はお断りします」

反論されないために一気に切り込む。

だいたい力の系統がよく分からないけど、一応、力があるから使おうなんていう考えが透け透けでうんざりする。「ですが…」などと困つたように咳いても知らない。

つてか、『勇者』一人を呼び出したのに、都合のいいのがさらには三人もついているんだから十分じゃない。一人くらい、城の中で悠々自適に生活させてくれたってバチは当たらないと思つ。が、ここで異世界召喚、勇者と聞いて俄然やる気なつている三人が問題だった。

「そんなこと言わないので、一緒にここに来た仲だろ？」

「そうそう、一緒にいたほうが、相沢さんも心強いんじゃないかな？」

楽しそうに言う男性陣に、「思い切り心配だから」と思わず返してしまつほど。

それを聞いて顔を顰める一人に、堤さんは「怪我をしたばかりだから怖いんじゃないの？」と少しからかう口調で言つ。

でも、それならそれを利用させてもらおう。それに黙つていろると、

そのまま勇者』一行様のメンバーになりそうなので、『Jリは一つけん制の意味もこめて嫌味つたらしいことを言いまくることにした。

どうせ一緒にいて、『魔王』を倒すなんてのを目的にしていれば、思い切り鬱憤がたまつていくんだらうじ。

「嫌よ。蒼井くんも大野くんも喜んでいるみたいだけど、私は嫌」「だからどうして?」

「ねえ……相沢さんも一緒にいよ!?. いくらなんでも一人じゃ寂しくない?」

「ちよ……どうして篠原さんまでそんなこというの? 『Jリ』などばかりに蒼井くんと一気に仲を深めるチャンスじゃない。がんばって戦うのと、それを癒すのと……ちようどいい関係じやないの!?.
……まあ、いきなり訳の分からないとこひにきて、不安のは分かるけど。

脱線しかけた思考を戻して、私は嫌な記憶を掘り起し出す。

「あのね、蒼井くんと大野くん。私は少し前に全治三ヶ月の大怪我をしてるの。そんな痛い思いをしてるのが、『一緒に戦いマス!』なんていうと思う?」

怪我のことを出すと、一人は口上もある。そこにさらに畳み掛けるようになる。

「だいたいね、いくら勇者だ、強いつて言つても、聞けば相手は魔族の中でも規格外の強さの『魔王』よ? そこまでたどり着くまで大変だわ!?. 怪我だつてある。とか、しないと思つているの?」

「?

私の問いに黙り込む一人。

結局、この一人はいきなり広がったゲームのような世界の主人公に目がいって、そこで起こりうる現実を考えていなかつたようだ。

「私は戦つて怪我をしたらどういう思いをするか　今だったら容易に想像できるよ。大怪我した後だもの。私はもう痛いのは嫌なのさあ、どうだ、とばかりに現実を突きつけた。

ちなみに魔族と魔王のことなんだけど、魔族とは人と違つて下つ端でもかなり強い力を持つモノのこと。そして、魔王とは、その中でもたまに現れる、桁違いに力を持つたモノのこと。

逆に人は一般庶民はほとんどそういう力を使わない今まで終わる。それに力を出すのに、媒体となる物アイテムがなければうまく使えないのだ。渡された剣やペンダント、ブレスレットがそれにあたるけど、結構貴重品で、一般庶民が身につけるほど数がないらしい。

さらにいえば、魔族、魔王は力に加えて瘴気を纏う。その瘴気が人にとって害悪なのだという。そして、魔王が存在するだけで魔族の力は増し、人にとっては死活問題になるので、それを倒せる人が必要とされる。

ということだ。

それならこの世界の中でやつて欲しい。はた迷惑な。

「蒼井くん、大野くん、堤さん、篠原さん。それにディリアさん。私は、私たちがこの世界のために力を尽くす義務なんて、これっぽつちもないって思つてる。自分の世界ならともかく…ね」

まあ、元の世界で一介の女子高生ができる」となんてほとんどのな
いけど。

肩を竦めていい迷惑だ、といつ表情をディリアさんに向ける。

「相沢、お前ひー。」

ガタンと椅子を倒しながら勢いよく立ち上がり、私の胸倉を掴んで持ち上げる蒼井くん。本当に熱血漢で勇者といつ役柄に合っている。

と、そのことはおいといって。

「蒼井くん、現実見てる？ 私たちはここの人でも困るような強いのと戦わなきやいけないんだよ？ それに還ることができるかどうかも分からぬんだし」

ねえ、ディリアさん？ とばかりに、蒼井くんから視線を逸らしてディリアさんのほうへ向ける。

ディリアさんは私の視線を受けて怯み、その後「それについては…」と呟いた。

泣きそうな顔をして説明しようとするとディリアさんを見て、大野くんと篠原さん、堤さんは宥めて、蒼井くんは私をさらに睨みつけた。

「おまつ…」

「だつてそつでしょ？ この世界のためにがんばつて、拳句に元の世界にも戻れない？ 自分の人生台無しにされているのに、こちらの世界の勝手な望みに付き合つ義理なんてどこにあるの？」

冷たく言い放つと、蒼井くんは私から手を放し、「くわつ」と小さく毒づいた。

「だけど、なんで相沢さんは還せないって分かつたんだ？」

「そうよね。呼び出すくらいだもの。そういうたのだつて考えていそうだしそうだし……相沢さんの思い込みなんじやない？」

大野くんは私の考えに驚いて、堤さんは還れないかもしねないと「いつ」を仮定したくて尋ねる。

「だつて、前の勇者は死亡したんでしょう？」

「ええ

短く返すディリ亞さん。
でも…と付け足すよつこ、「返還するための陣もちゃんどあるんです！」と付け足す。

「それ、使われなかつたのよね？」

「はい。でも、こうして勇者様を呼び出すことはできたんですし、返すことも可能だと思います。これは呪喚の陣と逆に造つてありますから」

「どうして可能だと分かるの？」

「ですから、勇者様が呼び出されたとこいつ」とは、返還の陣を使つて

「いなくなれば、元の世界に還つた」と?」

ディリ亞さんの言葉を遮るように続ける。

「せりやせりうだろ？　だから、ディリ亞さんがこうして返す方法があるつていつているんだから大丈夫だつて。相沢は心配性すぎないか？」

私の出した問ひは少なからずみんなを動搖させていた。だから、私がとてもない心配性で、ディリ亞さんの言葉が正しいように思い込もうとしている。

けど、やる気でいることに水を差すのは気が引けるけど、現実

を知つてから、それでもやる気があつたひまつてほしこ……と思つから。

「蒼井くん、それってこいつの世界から見た結果だよ。現実にその返還の陣から人がいなくなつたとしても、本当にもとの場所に戻つたかどうかは、返還された人しか分からんじやないかな？」

「……」

「いなくなつた＝元に戻つてるって思つてる？ でも違うかもしないよ。対象者がいなくなつたとしても、返還の陣は使うことができるとしても、それが必ずしもちゃんと元の世界に返つたってことは証明されていないんだもの」

どうやら、それぞれ想像して理解したようで、一気に真剣な表情に変わつたのを見ていた。

02 異世界事情（後書き）

一人空氣読めない主人公なのです。
現実的…といえば現実的なのですが。

勇者として呼び出された私たち五人。

勇者は蒼井くん、それをサポートする大野くん、篠原さん、堤さん、そして私。

けど、私のせいで、早くもその足並みは見事にそろつていなかつた。

それでも話はどんどん進んでいく。

蒼井くんは『勇者』としてツヴァルフ国王と謁見。勇者の剣を直接譲渡される。

蒼井くんが得意げに見せてているので見ると、少し大きめの、でも装飾ゴテゴテの飾りモノ?と疑うようなデザインだった。でも、一応力の増幅と、蒼井くんは風の属性が強いとかで、その辺の力を使えるようになつていてるらしい。

本格的に魔王討伐の旅に出る前に、ある程度腕試しというか体を鍛えるとかで、その剣を使ってみたらしいけど、装飾ゴテゴテの鞘と柄はともかく、剣はかなりの力を加えても刃こぼれしないほどしつかりしていた。

蒼井くんに合わせて、大野くんも剣の特訓。蒼井くんと違つて剣なんて扱つたことがないようなので(蒼井くんは剣道部)、この城の隊長さんに一から鍛えられている。

堤さんは主に力の発動について、篠原さんは実地も兼ねて救護室(?)にて怪我人とかを治療中。

それで、私はといふと。

「じゃあ、次はカリンもやつてみようか?」

と声をかけたのは、大野くんにレクチャーしている隊長さん

ヴァイスさんだつた。若いのにいくつがある隊の隊長を務めている。ヴァイスさんは割と爽やか青年といった感じで、赤みの強い癖のある金髪に空色の瞳、なにより目がいくのは、日に焼けた筋肉のしつかりした体だつた。あ、あとにこやかな笑みはポイントが高いかな。

「はい？」

「いや、カリンも剣を使うんだろ？ なら見てないでやつたほうがいいよ」

「せうだね、一緒にがんばるわ」

大野くんはさすがに疲れたのか、仲間がほしょうでヴァイスさんに同意している。
だからいやだつての。

「ヴァイスさん、済みませんがお断りします」

なげなしの笑みをなんとか浮かべて、一言で拒否すると、大野くんは「えー？」と不満そうだし、ヴァイスさんも残念そうな顔をした。

「相沢さん、本当にやる気ないのね」

近くでイメージトレーニング（？）をしていた堤さんにまで言われてしまつた。でも即答。

「ない」

それに対して割と大きなリアクションをする堤さん。あれ、結構面白い人？

「でも、私たちと行くなら、少しほは使えるないと足手まといだなんだ
けど」

いや、間違い。基本的なところは変わつてない。

「別に何も考へてないわけじゃないけど。私が持たされたのは、『敵
とみなしたものを勝手に斬る剣』でしょ」

「そうだったつけ」

「そう」

ちやんと聞いていてよ、堤さん。と思つていて、ヴァイスさんのほうが「へえ、あの剣か……」と呟いた。

なんだ、知つているんだ。あの剣。まあ、力を使うためのアイテムだからある程度の人なら知つてそう。

「まあ、たぶんヴァイスさんの思つていておりのものだと思いま
す」

「ああ、なるほど。だからか

「ええ

ヴァイスさんは割りと簡単に理解したのか、頭を上下に振つて「うんうん、なら必要ないかー」と呟いてくる。すぐに理解してくれる人は楽でいい。

堤さんはそれが気に入らないのか、少し怒つたような口調で「だから、なんで『なるほど』になるのー?」と問いつ。それに対してもうとしたところ。

「いや、あれは力さえあれば、どちらかといつと剣を知らないほう
がいいモノなんだよ」

と代わりに答えてくれた。

「どうしても自分のやり方を覚えちやうと、勝手に動く剣との差異が出る。使っている間に自分の動きと剣の動きが一致しないと、短い間だけど、それが“隙”になる。だから、剣に任せておくなら知らないほうがいいんだ。よく分かつたね、カリン」

懇切丁寧な説明に、私は素直に頷いた。

「知り合いにそういうのをやっている人がいて。太刀筋とかそういうのって、流派ごとにあるけど、ある程度は自分がやりやすいように自己流になっちゃうって聞いていたから」「なるほどね」

ヴァイスさんは納得。大野くんも堤さんもそれなりに納得したようだった。

「おかげで楽ですよ。そんなわけで、私はちょっと書庫とか拝見したいんですけど。ヴァイスさん、いいですかね？」

「いいと思うけど……なにするの？」

「一応、この世界について自分なりに調べてみたいですし、前に召喚された勇者のことでも知りたいと思ったから」

人から聞くだけじゃ情報が偏りそうだものね。

文献とからかでも偏りは出るけど、それでも今いる人たちのよう有利権を考えなくて済む点では楽だと思うから。

なんせ、蒼井くん。勇者で一番がんばって剣を使えるようにならないくらいだし。

「普通の書庫なら閲覧できると思うよ。禁書の類は許可が必要だと思うけど」

「それだけでも十分です。最初から難しいのを見ても分からないだろ？から」

「なら、あっちの塔のほうにあるよ」

「ありがとうございます」

ヴァイスさんからして右側のほうを指差して簡単な説明。

これだけじゃ分からぬから、後は会った人に適当に聞けばいいか。勇者ご一行様は城の中では有名なので、腰を低くして教えてくれるし。今もすれ違った人に会釈されたので、軽く頭を下げておいた。

歩いてヴァイスさんの言つた塔までたどり着いたけど、この中でどこなのか分からぬので、誰かに聞かなきやいけないかな、と思つていて、「どうしたんですか？」と後ろから声をかけられた。振り向くと、背の高い男の人。その人を見て少しほっとした。

だって、この人、着ている服がこう…一般庶民が着るような簡素なものだったから。城のあちこちにいる人、特に擦り寄つてくる人は豪華な服を着ていて気後れしそうな感じだったけど、この人は普通つて感じだつた。

蜂蜜のような明るい　　この場合金色というのだろうか　瞳は好奇心はあつても、そこに利権がらみはなさそうだった。

「書庫に行きたいんですけど、分かりますか？」

普通に話ができる人だったので、スルーしないで尋ねてみる。

「書庫？」

「ええ、ちょっと調べ物をしたいんで」

「書庫なら分かるから案内するよ。ちょっと複雑だから、一緒に行つたほうが早いし」

「じゃあ、お願ひします」

話しかけてくれた人はレー・レンと名乗った。名前を教えてくれた以上、私も名乗らなくて、ってことで、「花梨カラインです」と答えた。すると、レー・レンさんはちよつと考えてから、「ああ…」となんか納得した声を上げた。

「どうしたんですか?」

階段をちまちま上がりながら、レー・レンさんを見ると、私を指差して。

「勇者様ヨウザム」一行の中の変わり者

ええ、確かにそうだけね。それ、本人前にいつとじやないから。

といふことだ、ついこちりも同じようなことを返してしまう。

「その勇者様ヨウザム」一行の変わり者にケンカでも売るなんて、あなたのほうが勇者ですね

「いやいや、違うつて。普通なら嫌がるのは当然だと思ひつ。……つて、カリんつて結構この気配に敏感だつたりしない?」

「はい?」

話がどんどん流れている気がするけど、レー・レンは(も)うさん付けはやめた)空を指差して。

「なんていうかなー、ほら、魔王誕生でここでも瘴気が濃くなつてるんだよね。嫌な感じ…しない？」

「まあ、多少は。皆さんピリピリしますし」「そうだね」

「うんうん、やつぱり　などと勝手に納得しているレーレン。ヴァイスさんといいレーレンといい、結構私たちのこと見てるんだな、って思う。」

とりあえずどうしてそう思ったのか聞いてみると、レーレンは。

「えーと、王様との謁見あつたじゃない？」

「ええ」

「あのときさ、みんな緊張してたけど、カリンだけなんか別の緊張

じやないな、警戒しているっぽかったから」

「それがどうして？」

「元の世界では普通の人だつたつて聞いていたし、だからああいう大勢のところで、王様とか大臣とかいかにも偉そうな感じのがいれば、緊張するなつてほうが無理だよね。みんなまだ子どもだし」

「まあ、元の世界でも私たちはまだ未成年ですから」

確かにあれだけ大勢の中に立つて、期待とか利用しようかとか考
えている人たち相手に緊張するなつるのは無理だ。私だつて多少
は緊張していた。そう答えると、レーレンはちょっと意外そうな顔
で。

「でも、カリンはそういうた緊張より警戒しているほうが強かつた
感じがしたんだよね。実際、魔族も人の姿になれるのなんかが人の中に入り込んだりして、時たま揉め事引き起こしてるし。もしかしてそういうのを感じてるのかと思って」

ああ、なるほど。そういう警戒にとったのか。

でもあそこには瘴気は感じなかつた。今、外から感じているの瘴氣だとすれば。元の世界でたとえるなら、あまり良くない靈が近くにいて、鳥肌がたつような感じに似ている。

「私はどちらかといつて、あそこに出て前に嫌味言つちやつたんで、警戒していた　って感じなんですね。あそこには瘴気は感じなかつたし」

嘘は言つていない。あの場に瘴気は感じられなかつた。
それを言つとレーレンは私の顔をじつと見つめた。

「うん、やっぱり。力がないわけじゃないんだね」

「はあ、まあ、属性が分からないとは言われましたけどね」

なんで、あの剣を持たれる羽田になつたし　と心の中で毒づいていると、レーレンはあつさつと爆弾的発言をしてくれた。

「もしかして、属性が分からんじゃなくて、全部の属性持つてるんじゃない?」

えー… 全部の属性つてなんですか?

03 旅にでぬまで（後書き）

実は強かつたんですよー、な展開で。

レーレンの「ひつ」とが理解できず、「は？」と間抜け面で首を傾げた。

その様子がおかしかったのか、レーレンは小さく噴出す。

「レーレン…」

「ごめんごめん。勇者」一行様の中の変わり者、カリンは表情もあまりなくて人間っぽくないって聞いてたもんで」

失礼にもほどがある。私は元の世界では普通の人だつたんだから。……あ、いや、普通というのはちょっと語弊があるかな。靈感……は、すべての人人が持っているとは言いがたいし。でも紛れもなく普通の人間なんだけど。

「私が人間じゃないならなんですか、まったく」

「なんだろうねえ。まあ、僕には感情を表に出すのがちょっと苦手な普通の女の子に見えるけど」

「見えるもなにも、紛れもなく普通の女の子です」

「言い切るね。結構珍しいのに。全部の属性持つた人間って」

あ、さつきってきたのだ。なら話を戻して、それを聞かなくちゃ。

「そういえば、全部の属性を持っているって？ 人が持つ力は属性が決まってるって聞きましたけど。あつても似た属性ふたつとか」「あ、うん。その通り。で、ほとんどの人は力 자체が小さくて役に立たないし、まったく力がないから属性もないってのもいるんだけど、逆もいるらしいんだよ、本当に稀にね。さつき言ったようにすべての属性を持つ人ってのが。あんまり文献にもないんだけどね」

なるほど。それにしても、レーレンは普通の格好をしているので、書庫までの案内でいいやと思っていたけど、なかなかの知識人らしい。

レーレンってナーモノ？

「えーと、それ詳しく聞きたいけど、その前にレーレンっていったい何者なの？」

「え？ 僕？」

うん、といへりと頷く。

「いや…何者って言われるほどたゞそなもんじやないんだけれどねえ。ほら、見たまんまで」

「見たまんまじやないでしょ？ だつて、文献にもほとんどないことを見つているんだもの」

「ああ、それで…ね。うん、僕は王室御用達の品まで扱う隊商の人なんだ。親父がその頭領だから、まあ、あちこち行くし、いろんな情報が結構手に入るから、カリソにはそう見えたのかも。あ、さつき言つたのは旅先で聞きかじつた話だよ」

「そう、なんだ」

微妙に敬語とタメ口が混じりつつ、レーレンがどういった立場の人なのかを把握した。

「でね…」

レーレンがちょっと言ことにくそつこ、元氣にしていていた。

「ん？ なに？」

「だからね、僕は今回勇者様ご一行のメンバーの一人なもんで、よろしくって言いたかったんだ」

「はい？」

「あちこち行つてゐるもんで道詳しいから。いくら、地の属性を持つ導き手がいても、細かいところまでは分からぬから、僕がある程度道案内をつて頼まれた」

「……なるほど。」

堤さんの力がどれほどかは分からぬけど、確かに彼女を頼つてばかりはいられないだろう。魔族の本拠地に行くまでは普通に行けばいいのだし。

「じゃあ、よろしくお願ひします」

と右手を出して、改めて言ひついで、レーーンは實に意外そうな顔をした。

あ、そういうば、ここでは挨拶に握手をするようなのはないのかな…？ 思わず手を引っ込めようとしたとき。

「……よろしく、カリン」

と、右手を握り返してきた。

でも、その間はいつたいなに？

「ごめん、カリンが笑つたからびっくりした」

あ、そうですか。それほどまでに私の笑みは珍しいんですか。ちよつと頬がひくついても仕方ないよね。でもって握っている手に力がこもつても仕方ないよね？

レーレンの手を思い切り握ってみるもの、逆にもつと強い力握り返されてしまつて痛かった。

失敗。男女の差があるから握力勝負は無理でした。手がものすごく痛いです。

そんなのを察したのか、レーレンは面白そつに笑った。

「笑わないでよ」

「だつて……カリンのそんな顔見てるのは、こじこじは僕くらいだろうから、ね？」

「一応……感情だつて表情だつてあるんです。ただ、いろいろあって、あまり表に出さなくなつただけで」

「うん、それは分かつた氣がする。他の子たちと比べても、カリンは大人びてるし」

「うんまあそれなりに大変な思いはしたし。でも、『他の子』って……レーレンつていくつなんだろう？」

「レーレン、年いくつ？」

「僕？ 僕は十八だよ。まだ若いから、親父に勇者の手伝いして少しほは男を磨いてこいつて、この仕事を押し付けられた」

「十八……すみません、年上だつたんですね、敬語に戻します」

「別にかまわないよ。気軽に話して」

「そう？ ならそうする。普通に戻つたのを敬語で話すのもなんか変だし。レーレンといふほづがほづとするから、少しは気を抜きた

い

「うん、いいよ」

蒼井くんは私の態度に怒つてゐるし、大野くんはまあともかく、堤さんと篠原さんとの関係も微妙だし……ディアリアさんにもケンカ売つちやつたしなあ。

聞けばディリアさんも一緒に行くって言うじ。まあ、この辺も私のせいなんだけど。自分たちで何もせず、他の世界の人に押し付けるなと言つたら、意地になつたのか一国の最高位の巫女という立場を放り出して一緒に行くと言つ出して。

そんな理由で魔王討伐勇者様ご一行のメンバーは、私にとつて気の置けない人がいない。このままいけば道中でぜつたいストレスで胃潰瘍になる、と思えるくらいに。

だからレーレンが一緒にいてくれるなら嬉しい。

レーレンは気軽に話ができる気持ちが軽くなるし、レーレンも私のことをそれなりに認めてくれているみたいだから、レーレンと一緒にいることにしよう。

「って、そうだ。属性の話に戻らなくちゃ。」

すでに書庫にたどり着いたんだけど、今は書庫よりレーレンの話のほうが気になる。だって、ほとんど文献にもないって言つから、そういう本が見つかる可能性は低そつなんだもの。

「レーレン、話戻つて、さつきの属性の話を聞きたい」

「あ、いいよ。でも、話をするなら場所変える？　書庫で話していふとよく響くし」

「そうする。図書室つて言えば、私語禁止だものね。話してたら田立つちやう。でもちよつと待つて」

レーレンにそう答えてから、胸ポケットに入っていたボールペンと手帳にこここの場所を簡単な地図として記す。次に一人でも来れるようにな、と。

さらさらと書き終えると、レーレンにお待たせ、というが、レーレンは私の持っていたものに興味を示していたようだった。

「レーレン？」

「あ？　ああ、『じめん。はじめて見るものだつたから』

「そう？」

「じゃあ行こうか。庭に椅子とかあるから、その辺で話をしよう」

そういって下へと逆戻りしていった。

「この辺は人が少ないみたいで、廊下で三人すれ違つただけで、この庭園には誰もいなかつた。

少し日差しが強いので、木陰になるような場所を選んで座つた。

「はい、どうぞ」

座つて話を切り出そうとしたところが、田の前に差し出されたものに驚いた。

見たら飲み物だつた。どうも水筒のようなものに入れて持ち歩いていたらしく、カップがそれっぽい。

「ありがとうございます」といつて受け取ると、少し温めのお茶だつた。保温効果はあまりないようだ。

「いつも持ち歩いているの？」

「うん、癖でね。基本的に必要最低限な持つてゐるよ。移動中で仲間とはぐれたりすると困るから」

「用意周到。」

「うん、旅をしていくとそれなりにね」

「なら、旅に出たらレーレンの側にいる」とさする。なんでも持つて便利屋さん

「はは…はつきつぱりね」

苦笑しながらもレー・レンは嫌な顔をしない。

「僕もカリンに興味あるから、別にいいよ」

その言葉はある意味爆弾発言です　　と言おうとする。

「さつき言つたように、全部の属性を持つ人間みたいだし。でも誰も気づいていないみたいだしねー。ほんと、気づいたらどうなるのかな？　ある意味、勇者として見られているハヤトって子より強いんじゃない？」

矢継ぎ早に言われて、口を挟む隙がなかつた。

「それ知ってるの、僕だけみたいだし、カリンはなんか知られたくないみたいだし……そう思うと楽しいな」

私はオモチャか。

レー・レンはかなりいい性格で、でも、人が嫌がることをペラペラ喋るわけでもないようだ。個人的な密かな楽しみにするタイプらしい。

でもまあその方が私もいいんで、そのあたりに対しても突っ込むのはやめておこう。

でも、もうつたお茶をすすつて喉を潤した後、少しだけ訂正しておく。

「蒼井くんと私のどっちが強いか　　つてのははっきり言つて不明だよ。すべての属性を持っているつてのは、まだ可能性の一つだし、元の世界では私は剣とかそういうのを使つたことないから、やり方があつても慣れているほうが強いと思つ」

現に五人いたのに、ディリアさんが勇者だと認めたのは蒼井くん
だつたし。

「んー…現段階ではそなかもしれないけど、力の使い方に慣れてき
たら変わりそうだと思つけど。 と、そうだ。カリン、これをつ
けてみて」

そういうてレーレンが「」と袋から取り出したのは、十セン
チ程度の小箱だった。

「なにこれ？」

「すべての属性が入つた特性の指輪」

と、箱を開けて見せるレーレン。

中にはカラフルな石がついたものが一つ、それと乳白色の石が付
いたものと、黒い石が付いたものが一つずつの、計三つが並んでい
た。ちなみにリングの部分は透明で、これは増幅するためのクリス
タルっぽい。

「これが火、風、土、水の属性の指輪。後は光と闇。こつちは強い
からまとめられないんだよ。さ、はめてみて」

と言われても、ここでそれが分かつてしまふのもなあ……いや、
ないかもいしれないし。

などと思つていると、レーレンは私の右手をとり、四つの属性を
持つ指輪を中指に、光と闇の指輪は左手の中指と小指に勝手にはめ
る。

つてか、これじゃあ私、成金趣味というか、無類のアクセサリー
好きのようじやないか　と三つの指輪をはめた手を見る。

すると、指輪は淡く光、それぞれ共鳴するかのように、互いに点
滅し始めた。

えーと……これって、私の力に反応してこのトランジスタなん
なんでしょうかね？

知りたくもなかつたけど、ルーレンは興奮しながら「やっぱりだ」と呟いたのを見ると、やっぱりなんだね。

「で、レーレンはそれを知つてどうするの？」
「ん？ ただ単に本当にいるのか知りたかっただけ」
「なら、もういいね。これ、ありがとう」

一応お礼を言つてから、指輪を引き抜こうとする。
力を使うためのアイテムは馬鹿高いお値段なので、いくら属性が
分かつても簡単に買える物ではない。

かといって馬鹿正直に説明して、勇者経費でレーレンから購入し
てもらう気もない。明らかに面倒」ことが増えるだけだ。

「待つて待つて。カリン、気が早すぎるって
「レーレン？」
「全部属性がないんだつたら返してもらつたけど、あるからあげる」「…………レーレン、気前良すぎ。アイテムの値段、聞いたことあるよ」

しかも指輪。

なんていうか……『結婚していく下さい』的なときに渡す婚約指輪
のお値段より、はるかに上回ると思うんだけどね、これ。

しかもこんなの持つてたら、いくら私と距離を置いている人だつ
て、あれこれ詮索してきそうだし と、指にはめられたままの指
輪をマジマジと見つめた。

「別にタダつて言つてないけど？」

僕は駆け出しでも商人だしね、と付け足すレーレン。

「……異世界の人がこの世界のお金持つてると思う?」「ぜんぜん。そうじやなくて、僕が田に付けたのは

そういうて私の胸元を指差したとき、レーレンは陽気な青年じゃなく、商人の顔になつていた。

間違いかないように書いておくが、胸元といつても、左胸
ポケットのところを刺している。

そこには先ほど使ったシャープペンとボールペンが一つになつた
シャーボと手帳。

「……………」

「そう、インクをつけなくても使えるペンなんて見たことないからね。ぜひともそれを手にして作れるかどうか調べてみたいんだ」「なるほど、商人だ……」

別にシャーボくらいあげたって別に問題ないけど。

あるとしたら やつは「これが身に付いていたこと」なんですよ。属性が分からぬから、今のところついでに呼ばれたおまけ状態だけど、レーレンの言うように属性すべてを使い切れたら、また話は変わつてくる。

でも、こういう便利なアイテムがあれば怪我とかも少なくなりそうだしつつ……あーなんかジレンマだ。知られたくないのと、身の保全とどちらのほうが重いだろうか。

「あ、悩んでる?」

一 憤り

「は？」
「なら、その指輪をしていぬのを隠せはいんじやなし？」

先生、すみません。初心者にも分かりやすいように教えてください

い。

「どうもレーレンは私の間抜けた顔を見るのを楽しんでいるようだ、情報を小出しに、こちらが思わず『は？』と思つてしまつようなどころで止める。

にやついてるのが分かるから、レーレン。結構、性格悪いね。

「その指輪には『光』の属性もあるから。田ぐらましみたいなをしておけば見えなくなると思うよ。そういうのは比較的力を使わないけど、常に使つていると力に慣れる練習にもなるし」

「なるほど。でも、同じように力を持つている人には分かっちゃうんじやない？」

「うーん…どうだろうね。それほど大きな力を使うわけじゃないし」

まあ、大々的なマジックショー！ってわけじゃないけど。

「カリンの場合は全部あるから……なんていうかな、属性が相乗効果しあつてるんじやなくて、けん制し合つていい感じで……だから、ディリア様も分からなかつたんじやないかな。あ、あと、カリン自体が無意識に押されてない？」

「…レンケツこう鋭い。

靈感があるせいか、変なところで幽霊なんかを見ても驚かないようだ、いつの間にか身についた平常心を保とうという心。それが、今は自分の力を抑えているのは、無意識に感じていた。

だつて、私、ここにきてもすぐ自分を落ち着かせてたし。嬉しそうなのとか驚いているみんなと違つて。厄介ごとに関わりたくないつて、瞬間的に悟つたんだよ、うん。

とりあえず、隠すこともできるみたいだし、シャーボと比較するなら高価なアイテムのほうがいい。

といふことで、あつさりと商談成立した。

その後、レーレンの指導の下、田ぐらましをかける。すると、指輪は見えなくなつて普通の手に戻つた。

「一回でできるとは……なかなか優秀だね、カリン。その調子でどんどん覚える?」

「いやそこまでは…って、いろんなことに詳しいレーレンのほうがすこじよ。レーレンはどんな力を持つてるの?」

持つていないと分からぬよな、この感覚。

「うーん…Hリット子と同じようなもの…?」「なんで疑問系なの?」

「一応地の属性のアイテムも持つてるけど、使わないといつか…ね。仕事上、力で道を探すより、地図を頭に叩き込んで道どおりに行つたほうが正確だし、それほど使えるわけじゃないし」「なるほど、理解した」

一般人は力があつても小さい。王族は、力の強い者が礎になつてゐるし、血を重ねることにより更なる力をその身に宿す といつていたつけ。

それが正しいなら、レーレンは商人だから、力があつても自由自在に使えるほどあるわけじゃない、ってことか。

でも、あちこちで仕入れる知識により、レクチャーするくらいはできるという。実際、力を使うのは感覚的なものが一番みたいだし。魔法じやないから、呪文や基礎とか関係ないみたい。

「だから、無意識に力を抑えることを知つていいカリンのほうがあつても使い方を知らない勇者、ハヤトより、今は一步先に行つていると思うよ」

「そうかな? なら、すぐに抜かされるね」

「うーん。でも抜かされる可能性は低いと思うけどなあ。持たされた『剣』に、すべての属性の指輪　　それらを上手く使えば、かなりのものになると思うけどね」

「いやいや、そんな力要らないから。できれば後ろのほうで見守っているほうが楽でいいよ」

実際、敵とみなしたものを斬る剣を持たれている以上、前線に出されるんだろうけどね。私以外の女性陣は基本的に後方支援の人が多いし。

なんだかんだ言いながらも、レーレンは簡単な説明をしてくれた。力を使うにはとにかくイメージ。だってそうだよね、魔法みたいに呪文とか決まっているわけじゃない。アイテムを通して、いかに自分の思うとおりに力を使うか　　ってことだから。

でも、聞けば呪文じゃないけど、言葉にもアイテムになるような力を含んだ言葉があるだつて。言靈つて言うのかな？　日本にも似たようなのがあるよ、って言って説明したら、「そんな感じかな」と返ってきた。

本来の力に、イメージとアイテムと、そして、思いのこもった言葉　これらを総合すれば、かなりのものになるといひ。

「まあ、カリンの属性は全部あるけど、僕にはそれが他の人より強いのか弱いのかってことまでは分からないから」

「私も分からないよ」

「でも、一つに集中すればかなりのものだと思うし、場合によつては組み合わせることも可能だと思うんだ」

「あ、そっか」

今使っているのは『光』。科学がある程度発達していた世界にいた私には分かるけど、目に見えるものは光の屈折によつて見えている。その角度を『光』の力で見えないように変えた　　というわけ

だ。

ただし、すべての角度から見えないようここでことを考えると、結構面倒くさい方法なんだよね。慣れれば力の使い方をマスターできるんだろうけど。

「たとえば……蜃氣楼みたいのは、『火』と『水』があつてできる。『水』と『闇』で氷を作るとか

「なるほど、勉強になるわ」

「でも、実際できる人ってほとんどいないんだけどね」

「じゃあ、駄目じやん。使つたらばれちゃうもの」

「そこはカリンの腕の見せ所じゃない？ ばれたくなかったら上手く隠すことを覚えそうだしね」

「他人事みたいに」

ぼやくように言つと、レーレンは「所詮他人事、楽しむもの」と笑つた。

「イツ……あとで覚えとけ……。

その後もレーレンに簡単な力の使い方のよつなものを聞いて、それから再び書庫へ向かつた。

05 商談成立。（後書き）

とりあえず次の話で一区切りなので、続けて更新。
その後はストックためつつのんびり予定。

人から聞く情報もいいけど、古い書物から得られる情報も必要だからってことで書庫へ。

書庫へはすんなり入れてもらえて、受付のおじさん（おねーさんじゃなかつた）に魔族と歴史に関する書物がどのあたりにあるか尋ねる。

左側の奥のほうだといわれて、そちらへ足を向けた。

古臭いにおいが充満する中を歩いていると、だんだん背表紙は破れたりしてると、手に取ると黄ばんだ紙が目に入る。これだけでも年季が入ったものだと分かる。

その中で、勇者という単語が入ったが見えたので、とりあえずそれを手に取つてみた。

出だしは人間と魔族との関係について書かれていた。

だいたい説明どおり、魔族は力が強く、存在するだけで放つ瘴気というものが、人の精神を蝕むため、人から恐れられていた。

そして、魔族からの被害を食い止めるためにできたのが『勇者制度』。

制度なんて笑っちゃうと思つものの、書かれている内容はいたつて真面目なものだった。

この世界に存在する『力』を強く持つ者を探すため、武術大会のようなものをはじめた。そこで優勝した者が『勇者』になる。

この大会は勇者を生み出すためのものだつたけど、人は希望と、そして娯楽の二面から大会を楽しんだという。

確かに、暗い世の中、こういったものは一大イベントで盛り上がるだろう。そして最後に残つた強い者が、『勇者』として希望を与えてくれる。

優勝者には多額の賞金が与えられるが、次の大会で新たな勝者が出来るまで、勇者として魔族討伐の任につかなければならない。それ

は一年毎繰り返され、勇者の数は一桁まで書っていたといつ。

「ここまで読んで、ふと『勇者を召喚する』ところどがないのに気づいた。

書かれている内容は、すべてこの世界でのことばかり。異世界から呼び出すというところがなかつた。

仕方なく別の本を探した。すると、薄めの本が目に入った。背表紙にタイトルは見られないのに、手にとつて見る。

タイトルは『魔王考察』。なんとも分かりやすい題名だ。見ると、歴代『魔王』と呼ばれた者たちについて書かれていた。

『『魔王』とは、魔族の中で桁違の力を持つて生まれるもの。』

うん、これは一番最初に聞いた。

『『魔王』とは、力が他のものより強いというだけで、人のように寿命というものがある。勇者によつて倒されなくても、寿命で亡くなるものは多数存在した。

いや、寿命で死んだもののほうが多いだろう。その力ゆえに、短命のものが多い。

『魔王』とは、『魔を統べるもの』ではない。

『魔王』とは、あくまで力の強いものである。』

これは初めて聞いたよ。

寿命があるなら、放つておけばいいのに。しかも短命なら。

『しかし、ショーン暦七百九十九年に変わる。

今までにない強さを持つた『魔王』の誕生によつて。』

えつと、ショーン暦というのはこの世界の年号で、今は千二年年

だけ。

つてことは、大体一百年前で、初めて異世界から召喚された勇者のときの魔王だ。

頭で整理しつつ、ページを捲る。

『人間と魔族　種族が違うのだから仕方ないだろう。共存とはいひないが住み分けはできていたはずだつた。

だが強力な魔王のせいで、瘴気は増し、人は精神が侵されていった。勇者を出しても、その瘴気の強さに魔王の居城までたどり着けなかつた。再び勇者を選定したが、その者は途中で放棄した。

人々はより魔族を恐れ、恐慌状態に陥つた。

そして最後に残つた案は、力と力を持つた言葉によつて、勇者に勝るもの呼び出す『召喚陣』なるものを造り上げた。誰でもいい、助けて欲しいと願つて。

そして呼び出されたのは異世界の子どもだつたといふ。しかし、見た目は子どもでも、その力は強く、魔王の居城までたどり着き、そして殺せぬものの、封印するという偉業を成し遂げた。

だが、惜しいことに、その子どもは封印が限界で亡くなつたものとされている。』

強ければなんでもいい、か。

でも、強いのを呼び出したら、魔王が出ましたーなんてことはないのかな?

魔王を倒せるほどの強い者　　つてのがいない場合、強さだけ求めたらどんのがでてくるか分かつたものじゃないと思うんだけど……うーん。

そこまで深く考えてなかつたんだろうなあ。精神的にきてたみたいだし。

そんな感想を抱きつつ、さらにページを捲つた。

『魔王の封印のせいか、それから百年経つた今も、新たな魔王の出現は見られない。

魔族も人の住むところにまで出てきて、蛮行をしない。百年前と比べたら、まさに平和と言えるだろ？

今では勇者も魔族討伐という危険な仕事が少なくなっている。二年に一度の大会も、人々にとつて娯楽になりつつある。』

おいこら、娯楽つて……思わず手に取った本を破り捨てたくなつたわ。

んー……でも、封印されていても『魔王』が存在すれば、新たな『魔王』は誕生しないのかな？ 一代に付きお一人様限定？ あ、でも二百年経つて新たな魔王が現れたんだし……その辺どうなんだろう？

『封印されていても、魔王はこの世界に居るからなのだろうか？ 百年経つた今、新たな魔王の出現は見られない。』

あ、やつぱり同じこと考えていた。

『だとしたら『魔王』とは、ある意味この世界にとつて必要な要素なのだろうか。

人はそれまで魔族の脅威に晒され、平和を願っていた。

そして、それが叶つたのに、今では人々の中で争いが生じている。それを元に考えてみよう。

共通の敵がいるため、人間の間で大きな諍いは起こらない。国同士が戦うということがまずなかつたのだ、と。』

あれ、この世界つて大きな戦争はないんだ。

まあ、魔族に襲われていたらおいそれと戦争なんかで戦力を削れないんだろうし。

そういう意味では役に立つてる？

……まあ、それも微妙だけど。

『だが、百年経つた今、人と魔族の間での大きな問題はないが、人の国同士で国境沿いの小競り合いが始まっている。

魔族という脅威がなければ、人は欲が出るのだろうか？
だとしたら 私は『魔族』とは、『魔王』とは、人が一つにまとまるためにある、必要悪であるように思えてならない。』

うわー言い切ったよ、この人。『必要悪』だつて。

『人が魔族に襲われるは心苦しいと思う。できればそのような光景などあつてほしくない。

けれど、人々が争うのは、それよりもはるかに見苦しいと思えてならない。

百年前の強すぎる魔王では困るが、その前に存在したとい歴代の魔王がいてくれれば と、馬鹿なことを考えてしまつほどに。』

確かにそれは危険思想だ。

でも、こういうのを知ってる。『仮想敵国』だつて？ あれと似ている気がする。

そういうのがいるから、一つにまとまつって感じが。

この場合は人と魔族との一つだけど。

『けれども、百年前のように異世界の人間を犠牲にするようなことが、あつてほしくないとも思う。

勇者にされた異世界の子どもは、その軀を残していないほど凄惨な最後を迎えたと聞く。

このまま、人々が『魔王』の恐怖を忘れてしまい、そして突如それが出現したとき、再び愚かな選択をしないことを切に願う。

ツヨーン暦九百一十年 マロー著

薄い本だったのすぐに読み終えた。
伝える文面は少ないものの、それでもなんともいえない気持ちを
与える本だった。

それに最後の文面『再び愚かな選択を』つてのは、召喚陣があるから、強いやつ呼んで、そいつに倒してもらえばいいや、という考え方じゃないだろうか？

前の魔王のときは最後の苦肉の策のように感じられた。

でも今度は？

新たな魔王が現れたというだけで、大きな被害はあまり聞かない。
人が魔族に襲われているというだけで、国が滅ぼされるほどの脅威
はない。

魔王がいて恐ろしいため、それを倒して欲しい。倒せる強い『勇者』を、という感じだ。

しかも、蒼井くんはじめ私たちが召喚される前に、別の勇者を魔王討伐に出したというのも聞いていない。

だから魔王がどれだけ強いのかとか、魔族の数とかそういう具體的な情報はほとんどない。

そう考えると、不安だけが心の中に広がつていった。

06 古い本「魔王考叢」（後書き）

とりあえず一区切り。

次から力の使い方と、主人公ケンカ売りまくりな話になる…かも（汗）

複雑な気持ちで書庫から出たあと、部屋に戻らずそのまま塔の上に上った。

「……いつとこなら、たいてい屋上とか、バルコニーとかに出られる場所があるはずだ。階段を上りながら、人気のない適当なところを探した。

三階分くらい上った後、光が見えたのでそちらへ向かった。人もいなかつたのでちょうどいい。そのまま外に出ると、物見のための場所なんだろうか、小さな面積でバルコニーという印象を受けなかつた。

そこから下を見ても人の姿は見えない。うん、ちょうどいい。

元の世界では第六感とか、第三の眼とかいう靈などを見ることができる超感覚と呼べるもの。靈を見るのが嫌で、いつも抑えていた。ここに来てからも同じように抑えていた。でも今、抑えていたそれを開放する。感覚だけのことなのに、いつもより視界が明瞭になつた気がした。

……いや、間違いない。

遠くにはどうぞしたようなモノは前よりはつきり見えるし、なにより 空中にふわふわ飛んでいる小さなイキモノたち。

「……妖精？」

ふわふわと飛んでいたそれらは、私が呟いたのに気づいたのか、いつせいにこっちを見る。こういう世界ならいるかなと思つて“見てみたら、やっぱりというか……いた。

小さくてどちらかといふとかわいいと思えるんだけど、いつせいに見られると、ちょっと驚くって。思わず後ずさるけど、それらは

一向に風に会する気はない。

“あら、わたしたちの「」と、みえてる？”

“みえてるみたい？”

風に乗つて声のよつた、音のよつたものが風く。

「風の精霊…？」

“うん、そう”

“みえるひと、ひねじぶつ”

“やつぱつ、ゆうじゅは、つよこひと、おおこね”

なんてこりか……子どもが拙い言葉で話しかけてくれるよつた、そんな感じ。

でも、風の精霊つて肯定したよね。となると、やつぱり風の精霊なんだ。

「見える人いないの？」

“いない”

“いないね”

“すうぐ、ひねじぶり”

やつぱり拙い言葉で返つてくれる。

まあ、一応田の前の小町のけ風の精霊。やつぱり風の精霊。やつぱり風の精霊。

のかな？

「精霊つてひとは、風のせかにもこるもの？」

“いる”

“いるよ、したをみて”

「下？」

精靈たちに促されるまま、下を見ると、畠をへりつとする。やうこや、高こじいひはあまり好きじゃないんだつけ。

“ね、いるでしょ？”

“あなたの、めなら、みえるよ”

私の田つて……普通の視力じゃないんだろうね。もう少し感覚を研ぎ澄ますと、庭のあちこちにもやもやと動くものが見える。たぶん、これって……

「土の精靈？」

“そう”

“あたり”

風の精靈たちが楽しそうに答える。あとで見に行つてみよう。所詮好奇心には勝てないのだ。

あ、そうだ。

「ねえ、頼み」としてもいい?」

“いいよ”

尋ねると風の精靈は楽しそうに答えた。

あ、その前に、精靈について少し聞いておこう。力との関係も知りたいし。

つてことで、尋ねてみると、風の精靈たちは言葉遊びのように答える。要約するとこんな感じかな。

力つてのは人や魔族が持つていてる自身の力で、別に精靈たちを使役するものではないようだ。

ただ、相性が合つとその精霊たちが手助けしてくれるから、属性というものが出てくるみたい。自分の気性などが絡んでくる相性みたいなものらしい。風と相性がいいのは、気まぐれ、おしゃべり好き。でも突風のようにまっすぐな性格の場合もある。

まっすぐといえば、火の精霊もすぐ熱くなるまっすぐな人を好むらしい。

と、まあ、あまりこういう性格だからこの属性と一括りにできないみたいだった。血液型占いみたいだ。

と、軌道修正して精霊と zwar ても、風の精霊なら世界を巡つて風を作つてゐるという（しかも超適当に）。

さつき見た土の精霊なら地盤強化かな。土の精霊がいなくなると、地盤が緩んだりするらしい。でもそれも適当。定住するのもいれば、移動するのもいる。

で、一番驚いたのがこれ。精霊の中で特に序列はないってこと。一番上の精霊王に始まって、高位から下位まで と思っていたけど、精霊とはみんな目の前にいるのしかいないんだって。

精霊王つてのを見てみたいと思つたから、ちょっとと残念だつた。……つて、ここまで聞き出すのに、すごく時間がかかつて、もう空が赤く染まりだしていた。

「いろいろありがとう。で、お願ひなんだけど……」

“ なに ”

“ なんでもいつて ”

「じゃあ、魔族の様子を知りたいの。できる？」

なんたつてぜんぜん情報ありませんか？ つてことで、世界を巡る風の精霊たちに聞くことにした。

でも、聞いてたら夜になりそつ……でも聞かなければ始まらないし。

“わからない”

“わたしたち、あまり、そこへはいけないの”

「どうして？」

“わたしたちでも、こわいから”

魔族の瘴気は精霊たちにも有効なんですか、と思いつつ、はあとため息をつく。

でもまあ、それなら力と精霊を使いつてのと分けて考えることができるのか。要するに、アイテムを媒体にするけど、超能力のようなもんなんだろ？

“ごめんね”

“やくに、たてなかつた……”

ちょっと残念がつている精霊たちに、そんなことないよと答える。

「なら、人の近くでの魔族の被害状況なら分かる？」

“それなら”

“わかるよー”

という、意氣のいい返事をもらつたので、またもや長々と聞く羽田に。気づくと早くしないと夕食に間に合わない時間になっていた。土の精霊にも話を聞いてみたかつたんだけど、それは明日かな。どうせ、私はすることないし、調べものと称してあちこち調べますか。

……と、第三の田を閉じてしまつと、精霊たちは見えなくなつちやうのかな？ この田なら見えるつて言つてたし。

「ねえ、話しかける前みたいになると、あなたたちと話ができなく

なつちやう? 「

“たぶん”

“だつて、今まで、きづかれなかつたもん”

ちょっと拗ねた感情と一緒に返事が返つてくる。そんなに氣づいたことが嬉しかったのかな。

でも情報は逐一欲しい。今の状態を維持しなければいけない。これも『力』に入るのかな。だとしたらこのまま戻つたらヤバイよねえ?

“やみを、つかえば”

“ひかり、じやなくて、やみ、よ”

“まく、を、はるの”

「膜?」

闇の膜

うつすらと、闇を纏つて見る側の視界を鈍らせん……つて感じかな。それを使えば、私自身の存在も希薄な感じになりそう。人にあまり気づかれないようにしたいたいっていうならいいかもしない。

闇、闇……暗闇で視界がよく見えない状態を思い浮かべながら、周囲に薄い闇を作る。そしてそのまま、肌ギリギリまで近づけて、固定するようにイメージした。

うつすらと、肌に触れる闇のひんやりとした空氣。

「こんなもんかな?」

“すごい”

“かわつた”

“でも、わたしたちのこゝ、きこえる? みえる?”

「うん、見えるし聞こえるよ、大丈夫」

精靈たちに向かつて答えるけど、心のうちは複雑だつた。

だつて、なるべく面倒じとに巻き込まれず、力もばれないようこしながら つて思ったのに、氣づいたらアイテム手に入れ、光、闇と強い二属性の力をあつせりと使ってしまつた。

どうして嫌だと思つているぼつへと行く羽田になるのか。

もしかしたら、あそこでヴァイスさん相手に剣の稽古でもしてたほうが無難だつたかもしれない。

いやちよつと待つて。下手に剣を覚えてしまつと、持たされた剣との動きの違いが出て、下手すりや怪我をする羽田になる。

……どうもどうちだ。

まったく、どうして私の人生つてこんななんだろうか。せつかく怪我が治つて学校に行き始めたつてのに、馴染めない（これは自分の性格だから仕方ない）し、拳銃にこの世界におまけで呼ばれて、戦うという選択肢しかない。

いやまあ逃げるつて手もあるけど、逃げても元の世界に戻るチャンスは少なくなる。見たことはないけど、この城にあるとこう返還の陣 それが一番楽な方法だつ。

でも逃げ出せば、それを使うことはできないといづれレンハム。で、結局、なるべく怪我をしなことつ、生き残れるよつと、こうやつてあれこれする羽田になるのだ。ああ、蒼井くんのようなお氣楽な性格が羨ましい。

“どうしたの”

“なにかあつた？”

「いや、なんでもないよ。あ、もうこねば名前聞いてもいい？ さすがに『精靈さん』つて呼んでたり怪しまれるから」

空中向かつて「それでね、風の精靈さん」などとやつていたら、この世界なら頭がおかしいとは思われないだろうけど、新たな力つ

てことで、やうに面倒が増えるに違いない。

“ なまえ、ないよ”

「 え?」

“ すきに、よんで”

「 いいの? 名前を付けたら主従になるなんてことはない?」

“ いいよ、わたしたち、まあくじや、ないから”

話の中である名前を『』える、もしくは知られることによって、主従関係のようになつてしまつのが思い浮かんだので、念のため確認した。

でもその辺は大丈夫みたい。精霊王がいないのに続いて、名前に関しての主従関係もないのに驚いた。精霊たちについては王道パターンから外れた。

あ、でも。

「 魔族はあるの?」

“ うん”

“ だから、きをつけ”

“ とくに、まあう、の、なまえは”

「 うん、氣をつける。……と、そうだ。あなたたちのこと、 “ リー

ト” って呼んでいい?」

楽しそうに歌うように話をするので、自分の中の語録からそれらしいものを考えた。一応これなら名前っぽく聞こえるよね。

“ それが、なまえ?”

“ そう、わたしたち、リート、つていつのね”

“ いいね”

“ ありがとう”

あ、なんか喜んでる。楽しそうにぐるぐる回りながら、互いに『リート』『リート』と呼び合っている。この雰囲気は和むわ。

風の精霊たちは比較的おしゃべりで、拙いながらもいろいろ話をする。しかも小さくていかにも妖精って感じで、私にとつて癒しになってくれそり。

……と、和んでいる場合じゃない。もう田が落ちて夜に近い時間だ。書庫に行くとつてあるけど、夕食に遅れて何をしていたのか詮索されるのは嫌だ。

「じゃあ、わしきこつたことお願ひね

“うん”

“まかせて”

「あ、あと、なるべくその報告は人のいないところでお願い

“わかつたわ”

「じゃあ、みんなのところに戻るから、またね

“ええ”

“また”

楽しそうに答えるリートたちに背を向けて、暗い階段を下りていった。

夕食にはギリギリ間に合った。一番ビリだつたけど、ずっと書庫にいて時間を忘れたといつことで通したら、それ以上言われなかつた。

夕食は召喚された五人にディリアさんの六人で食べる。そのときにこの世界の話を少しずつ聞くのだ。あまり人が多いと疲れるだろうという配慮から。

けど、今日はその席にレーレンとヴァイスさんがいた。
レーレンは私を見ると軽い笑みを浮かべる。人懐こそうな彼の笑みは、人の心に入りやすいだらう。異性として意識するというより、警戒心が薄れるんだよね。

席に座ると、ディリアさんが口を開いた。

「明後日出立の旅に同行してくれる、ヴァイスさんと道案内のレーレンさんです。ヴァイスさんは皆さんもご存知ですかね？」

そりやそうでしょ。剣の手ほどきされてるんだから。説明しているディリアさんに蒼井くんたちは素直に頷いた。

レーレンのことは知らないのか、「はじめまして」と挨拶している。

「ヴァイスさんはハヤト様たちの指南と、魔王討伐の手伝いのため、レーレンさんはあちこち旅をする商人なので、道案内にと頼みました。それと、私を入れて八人での旅になります」

「うん、はつきり言う。しょぼい。

魔族でさえ手を焼くのに、魔王討伐だよ。それなのにたつた八人。しかも、そのうち半分は戦力にならない後方支援。これでどうやつ

て魔王のいる居城まで行くといふのか。

大群率いてつてのも嫌だけど、これはこれでどうかと思つ。

とにかくこの人数で、なるべく死人が出ないよう気につけなければならぬわけだ。

そうなるとやつぱり情報なんだらうな。とりあえず魔族相手は最低限にとどめて、被害の少ないところを通りて魔王の居城に行くのが一番手つ取り早いでしょ。

この世界は人と魔族の二種族で成り立っているんだから、魔族全滅が目的じやないのだから。

「ディリアさん、今のところの魔族による被害状況と、魔王が現れてからの魔族の固体数や強さの変化はどうなつてるんですか？」

魔王がどれだけ魔族に影響を及ぼしているのか。また、その魔族がどれほどの被害を人に与えていいのか。とりあえずその二点の確認を取る。

が、またもや蒼井くん、「仲間が増えたつてのに喜ぶんじゃなくて、またそんな心配かよ」とぼやく。しつかり聞こえてるから。顔が引きつりそうになるけど、無視してディリアさんに催促。

「あの、そこまで細かいことは……」

「どうして？ 切迫していたからあの召喚の陣で勇者を呼び出したんだよね？ 書庫で昔の勇者についての文献を見たけど、一年に一度勇者を選んで、それで魔族討伐してたんでしょう？ わ…蒼井くんが召喚される前にいた勇者は？ 今、ビニで何をしているの？」

矢継ぎ早に尋ねると、ディリアさんはおろおろした。

ディリアさんが知らないはずがないんだ。魔族の被害状況はともかく、この世界で選ばれた勇者については。

でもこのうろたえ具合から、選ばれた勇者は魔王を討ちに行つて

いないようだった。

「相沢、お前、巻き込まれた腹いせにって『ティリアさんをいじめるなよ!』

あー出たよ、蒼井くんお得意の正義感。

悪いことじやないんだけどね。正しいことは正しこ、悪いことは悪いってちゃんと言えるのは、とてもいいことだと思つ。それに誰にでも声をかけることができるのは、見習いたいと思うし、最初に学校に来たときは、隣の席だからといつだけで話しかけてくれて嬉しかったよ。

でも正義感や優しさだけで、すべて通るわけじゃない世界じゃないよ、こには。少しこただけで分かる。元の世界の平凡といえる日常とはまったく違う世界なんだ。

そして一番大変なことを押し付けられようとしているんだよ、蒼井くんは。

やうこいつのをやめて、あえて挑発するようなことを言つ。

「蒼井くんのいじめるの定義が分からぬけど、私は別にいじめているとは思つてない。正しい情報の把握は必要なこと。それを聞くのに一番適しているのは『ティリアさんしかいない』。できなら他の人を呼んで説明して」

蒼井くんが睨んでいるのをさらりとかわして、もう一度『ティリアさん』に向きなおした。ティリアさんは返答に窮しているといった感じが見える。

どうやら、あの本の著者が懸念した通りになつたんだろう。長い間不在だった魔王。それが突如現れて、冷静に対応する前にとにかく強いものをとつて、まず召喚の陣が使われた。この世界で、魔王に立ち向かう勇者を選ぶ前に。

ディリアさん以外のこの世界の人 レーレンは苦笑しているし、ヴァイスさんは顔を顰めている。その様子を見れば、だいたい予想通りなんだろう。

なら、誰を呼んでもあいまいな答えしか返つてこない。ふう、と深いため息を吐いた。嫌な予想ほどよく当たる とはよく言ったものだ。当たつてほしくはないの?」

呆れてものが言えないでいると、蒼井くんと堤さんがキレた。

「相沢! お前、いつもいつも…」

「本当ね。私、相沢さんと一緒に行きたくないな。いつも人のこと探つて……はつきり言つて不愉快」

別に痛くも痒くもないけどね、怪我を負つことや死ぬことに比べたら。

クラスでは馴染めなくておとなしく思われていたけど、言われたら言ひ返す。私はこうこう性格なのだ。黙つて見過ごすほど大人じやない。

「別に堤さんに嫌われても結構。一緒にいたくないは私も同じ。それより」

あつさりかわされたのが気に入らないのか、堤さんが睨みつける。が、それも無視して蒼井くんのほうを向く。勇者としてもう少ししつかりしてもらわなければ困るんだから。

「問題は蒼井くんだよ。勇者としての直覚あるの?」

「な…?」

「勇者として、どんなことを望まれているのか本当に分かつているの?」

「そ…そりゃ、魔王を倒すことだらうー。んなこたあ、分かってる！ それまでの間、仲良くなれりつてこいつちが手を出してるの、元のね、ケンカ売ってる相沢のほうが問題だろーー？」

蒼井くん、マジギレしたよ……。

手を出してる その一言で、自分は相手より上にいると思つていることに気づかないんだろうか。そしてそれが一方的なものだということも。

そんな心情は出すはずい。

「私はただ情報収集してるだけ。あるとないとだつたらあるほうがあ絶対いいから。そもそもティリアさん自体の説明がなさ過ぎる。突然現れたから魔王を倒すために勇者を、つてのは聞いてる。でも、勇者に魔王を倒して欲しいなら、それなりの協力が必要でしょう？ それをないがしろにしてるのに、おろおろしているティリアさんを見てもかわいそうなんて思わないよ」

嫌われるなら徹底的に つてことで、思い切り鬱憤を吐き出した。

そう…嫌われてしまつまうがいい。時と場合によつては、自分の身を守るために、この仲の誰かが代わりに傷つくことがあるかもしれないのだから。下手な罪悪感なんて感じなくなるほど、相手のほうから嫌つて、自分も嫌いだと思えるようなものが欲しかった。

裏切られるという行為には、何度あっても心が傷つくことには変わりない。でも、傷の深さは相手への気持ちで変わるから。

「だいたいね 」

返答に窮しているみんなに向かつて、さらば辛らつな言葉を重ねる。

「書庫で『勇者』とは一年に一度の大会で優勝したものに与えられる称号みたいなものらしいけど、蒼井くんにはそれに見合う力がある？」

「カリン、言いますぎ……」

私の性格と力を多少なりとも知つていいレーレンが、それ以上はヤバイといった雰囲気で止めに入る。
でも私はやめる気はない。

言葉とこいつのせ、ある意味凶器だ。それをふるつて蒼井くんを傷つけっこむ。

「ディリアさんだつて、旅についていくつていつたけど、なにがで
きる？ 確かに後方支援ならできるだろうけど、でも前線に立つの
は蒼井くんなんだよ。みんなを護れる自信……ある？」

しん……と、室内が静まり返った。そして暗い雰囲気に包まれる、あ、暗いといえば、闇をまとつた」ととか、第二の田の「ことか誰も気づかなかつたつけ。

思つたより隠すのは簡単なのかな？

「なら、相沢。俺と勝負しちよ。俺のこと信じられないなら、戦つてみれば分かるだろ?」

はい？ ビジットそんな話になるわけ？

「いや、カリィの持った剣は試合には向かないものだからやめておいたほうがいい。勇者が旅に出る前に怪我をした、なんて噂にはしたくないからな」

きょとんとしているトウェイイスさんが蒼井くんにやめるより」と説得していた。

けど、なんとなくその言い方が蒼井くんのほつが怪我をする前提っぽくて、それが余計に蒼井くんを刺激した。

「そんなこと分からねえだろ！ 相沢だつて俺の実力をしりや少しば黙るだろつ！」

「なら、明日の稽古中に互いの力を確認する ところがビジットですか？ 私も、少しそういったものが必要だと思います」

蒼井くんはやる気満々みたいだし。含みのある内容をひらりと向いて話すティリアさんもいるし。

「別にいいよ、好きにすれば」

投げやりに答えて、私は席を立つた。食事は中途半端に残つているけど、これ以上彼らと顔を合わせていたくなかった。

立ち上がった私に誰も言なかつたため、そのまま一人部屋から出た。

そしてため息をつく。自分の時いた種とはいえ、出るのはため息だけだ。

本当に嫌なら静観していればいい。適当なところについて、適当に力を使って。でも、それができるほど、私はまだ達観できないん

だ。

08 不協和音（後書き）

傍観者でいたいけど、傍観者になりきれないという状態。
次は幕間で別の人一人称の予定です。

08・5 短いひとこと見えないもの（前書き）

8月の幕間で、
篠原愛美視点の話です。

08・5 知りとしないと見えないもの

私は篠原愛美。高校一年生。

高校入学したてで気になる人ができる。蒼井隼人くん 頭もいいけど、明るくて誰とも気軽に話ができる、たまたま好きなアーティストが同じだったことから、他の子より少しだけ話をするのが多くなるようになった。

同じ中学出身の友だち、恵理は私の気持ちに気づいたのか、協力してくれた。恵理はさっぱりとした性格で、男友達も多い。だから私を引っ張つて、蒼井くんたちに話しかけてくれた。すごく嬉しかった。

でも、普通に話をするというそんな些細なことでも嬉しくなる気持ちは、ずっと休学していた相沢花梨^{あいざわ かれん}が出てきたことで終わった。はじめて見たとき、あ、嫌だなって思った。だって彼女は可愛いといつより綺麗といえる顔立ちに、高校一年生とは思えない落ち着きを持つていて、教室にいるだけでも存在感があった。

賑やかに話をして人を惹きつける蒼井くんとは別の存在感。一人でも大丈夫なしつかりとした“自分”というものを持つている人。

無口な相沢さんを蒼井くんは心配して、よく声をかけていた。「花梨ちゃん」って。

そのたびに嫌な気持ちになつて、気づくと嫌味を言つたりしていつた。しまつた、と思つても、口に出した言葉は消えず、きっと相沢さんを傷つけていたと思つ。

でも相沢さんは一瞬表情を変えた後、すぐに氣にしてないような風で嫌味を流してしまつ。それが余裕に感じさせて、また相沢さんに対して理不尽な気持ちを抱く。

それが元の世界での日常で、はつきりいって私は相沢さんが苦手

だつた。

相沢さんが出ていった後、蒼井くんと恵理がブツブツと文句を言つていた。

私はといえば、面と向かつてケンカを売つてくる相沢さんに何も言えず、ただ黙つて成り行きを見ているだけだつた。

私は、相沢さんの考えていることは理解できないと思つてた。でも理解できる一面を、今日少しだけ知つた気がした。一日けが人の治療をしていた私には、彼女の心配もなんとなく理解してしまつた。

複雑な心境のまま夕食を終えて、恵理と一緒に部屋に戻つた。恵理と私は仲がいいから相部屋になつた。蒼井くんと大野くんも相部屋。相沢さんだけが一人の部屋。私たちの関係がギクシャクしていることからの配慮から らしい。

最初は安心したけど、知らない世界でただ一人で過ごす世界は、相沢さんにどういう気持ちにさせるんだろう。一人でいるのなら、私たちとの関係も改善なんかされないのに……複雑な気持ちで窓の外を見ていると、恵理がベッドにぼすんと座つて。

「まつたくムカつくよね。そう思わない？ 愛美」

「相沢さんのこと？」

「そうよ、相沢さん！ 自分が中途半端だからつて、蒼井にケンカ売つてばかり。愛美だつてあの子のこと、嫌つてたよね。ムカつかなかつた？」

ベッドに寝転がつて仰向けになりながら大声で文句を言つ恵理。そりや私だつてここに来るまで、相沢さんに嫌味言つた。蒼井くんが構うから。焼いて、馬鹿みたいに。

でも、ここにきて、蒼井くんが声をかけてたのは、ただ単にクラスに馴染めない相沢さんに対して気遣つているだけだつて分かつた。ここに来てからは、相沢さんのことを「花梨ちゃん」と名前で呼ばないで、「相沢」と呼んでいる。

蒼井くんにしたら、前は馴染めない相沢さんに気軽に話をするけど、仲良くしようとしていたんだ。そしてこいつではみんなと同じように苗字で呼んで、仲間として接してる。

それにケンカを売るような言い方をする相沢さんには、女の子に対する接するような態度じやなかつたし。

相沢さんのほうはどう思つていいのかよく分からないけど、本当に嫌だつたら私たちから離れると思つ。一人でもいられる人だもの。でも険悪な雰囲気を作つても一緒にいるつてのは、本当に心配しているからじやないのかな そう思つたら、私は相沢さんに対して、前のような文句とか嫌味を言つ氣になれなかつた。
できれば多少の協調性は持つてほしいとは思うけど。

「聞いてる? 愛美」

「聞いてるよ、恵理。私は」

「分かつてるとて、愛美はあの子のこと嫌つてたもんね。でもあれだけ言われば、口を挟めるスキつてもんがないわ。蒼井くんは頑張つて文句言つたけどさ」

あー、明日が楽しみ。きつと蒼井にコテンパンにされるよ、と恵理は笑う。

「恵理……私は、別に怒つてないよ」

「……え？」

「相沢さんの言ひ方とも一理あると思つから
「なに言つてんの？」

とたんに氣に入らなさそうな顔をする恵理。

「そうだよね。ここへ来るまで、私のほうが相沢さんのこと嫌つて、恵理のほうが宥めるほうだつた。

なのに、あんな台詞を聞いたのに、怒つてないという私に、恵理が変に思つてもおかしくはないと思つ。

「あのね、私、今日一日救護室にいたじゃない？」

「そりや知つてるよ」

「うん、そのときね……怪我するつてホントに怖いなつて思つたんだ。怪我つていつても、消毒して絆創膏貼つてればいいって怪我じやないよ？」

もつと大きな怪我だよ、と念押しして。

「……いや、身を守るために剣とかで稽古してるみたいなんだけど、弱いといじめじゃないけど、的にされるんだつて」

「……は？」

恵理の顔が少し歪んだ。

でも、救護室で同じように手当をしている人と話をしながらしてたから、ある程度私なりに入つた情報つてものがある。

聞いて怖いと思ったのが、魔王が現れたことを恐れて力をつけなきやつて思うものの、すぐにそれが身につくわけじゃない。だから弱い人を相手にして勝つて、強くなつたつて思い込もうとしている人が多いんだつて。

だから救護室に来る人は自然と決まる。弱い人は何度も来る。た

まに戻りたくないと騒ぐ人もいるって、苦い顔をしながら救護室にいたおじさんが教えてくれた。

そのことを恵理にも説明したら、恵理の表情はさつきより複雑になつた。

「だから、相沢さんの言つこと全部に共感はできないけど、怪我をしたくないから自分ができる範囲であれこれ考えているんぢゃないかなつて思ったの。剣の稽古とかしなくていいなら、他にすることといったらやつぱり情報収集じゃないのかなつて」

「ここまで言つと、恵理はしかめつ面をしながらも反論はしなかつた。

「相沢さん……たぶん、転ばぬ先の杖つて感じなんぢゃないのかな？ やる気になつている蒼井くんにしたら鬱陶しつて思うんだろうけど」

怪我が治つて出てきた相沢さんを見たとき、同じ高校一年生なのに、どうして大人びて見えるんだろうって思った。

それは怪我の痛みに耐えて、そして大変なりハビリをして そんな経験をしたんだと思う。その経験が、相沢さんを一人でいられる強さにしているのかもしね。

それに相沢さんが言つたように、この世界のためにがんばる必要なんてどこにもない。でも、そんなこと、私だつたら言えない。反感を買つたら怖いから。役に立たないとつても、ケンカを売るようなことをしたら、どんな扱いされるか分からぬもの。

でも相沢さんはそれをした。

したのに、みんなと離れないで別の方から情報を集めたりしているのは、みんなが気にしないことまで考えて、何かあつたときにすぐに対処できるようにしようとしているから……？ そう思つと、

相沢さんってすうじこつて思つた。

「どうかなあ。どちらにしろ、それならもう少しやり方つてのを考えて欲しいよ」

恵理は稽古中のやり取りも見てているせいか、相沢さんはやる気なしそうしているみたい。代わりに

「蒼井くんはやる気になつたよね」

「そりゃ、あれだけ言わればなるって」

相沢さんに対する反感を持つて怒っている恵理。その気持ちが分からぬわけじゃない。

でも、相沢さんの気持ちが理解できるわけじゃないけど、救護室に一日いて、怪我をするつてことを知つて少しだけ見方が変わったのは確か。

「とりあえず問題は明日だよね」

「まあ、蒼井が勝つでしょ。そつすれば相沢さんも考えを改めるんじゃない」

「そうかな」

「そうあつてほしいねー。私は相沢さんのことよく知らないけど、相当性格悪いんじやない？ ホント、相沢さん一人のせいです」「く險悪だし。でも蒼井に負けたら言つこと聞くしかないんじやない？」

知らないなら、少しは知りうとする気持ちも必要だよ、と言いかけてやめた。そういうた気持ちは、自分から気づかないと意味ないから。

できるならみんなと仲良くやつていきたいんだけどな　と思つて、相沢さんも入つていてることに気づいた。

に来て、少しだけ相沢さんの見方が変わっていたんだ。

08・5 知らうとしないと見えないもの（後書き）

今まで影の薄かつた愛美一人称の話です。

主人公の花梨以外では、彼女の一人称が少しずつ入る予定。

次の日、夕食のときにはいつたように蒼井くんと模擬試合をすることがになった。

名目なんて『稽古』の一言で済む。それを聞いた周りの人は物見高く集まつてくる。

一年に一回の大会ならもとと派手なんださうか、そんなものに出たいとも思はないので、この見世物のような状態に、すでにうんざりしていた。

「おー、相沢。やめてほしきって言つたなら、やめたもいinez」

もひつた勇者の剣を肩でとんとんと呴きながら言つ。蒼井くん、それ、悪役の台帳だから。ツッ 「ハハハ」の満載な気がして、ふーとため息をついた。

嫌味たらしく蒼井さんの台詞を流して、ヴァイスさんとドイリア
さんのほうを向く。

「あの、本当にいいんですか？」
この剣、抜き身にしたら蒼井くんを“敵”とみなしますよ

なんたつて、私に対して敵対心燃やしてますから
と心中で
付け足す。

この剣は抜かないと意味がない。鞘をつけたままでも反応すると厄介だから、抜き身にしたときだけ力と敵に反応する。

そんな劍を抜かされたのだから、互いに抜き身の剣でやりあう以上、大怪我をする可能性もあるのだ。その意味合いをこめて大丈夫かと問う。

ディリアさんは蒼井くんが負けるわけがないと思って「平氣です」とい、ヴァイスさんはなんともいえないのか、あいまいな笑みを浮かべるのみだった。

止める気ないんかつ！？

せめてヴァイスさんには少し期待したんだけどな。ディリアさんのほうが立場は上だから、ディリアさんがオーケー出しているのに対するのは難しいらしい。

私もこの剣がどれだけ使えるか分からぬから、その辺は知りたいし……ま、いいか。

ただ、この剣がかなり優秀だった場合、勝敗は私も分からない。剣を見ながら自棄気味に鞘から抜き放つと、蒼井くんの怒気に剣が反応して小刻みに震えた。

「はじめ！」

ヴァイスさんの声が響く。同時に蒼井くんがこっちに向かって駆け出した。力で風を使っているのか勢いがいい。すぐに私のところまで来て剣を振り下ろす。

その剣に対して、私は体を軽くひねりながらかわした。この剣は大きな動作については、避けるという選択肢も持っているらしい。その後も私の力では劣る場合は、避ける、受け流すなどといった動作であまり動かさず蒼井くんの剣からすり抜ける。たいした動きもない私に対して、蒼井くんは大きな動作と『力』の消耗のため、少しだけど息が上がり始めていた。

それにしてもこの剣　私の意志も伝わっているんだろうか。あまりやる気がないために、流す、かわすといった選択ばかりしている。

無闇に敵を葬る危ない剣かと思いきや、使い手の意思を汲み取つてそれに応じた動きをする。思ったより優れものかもしれない。

そうすると、一瞬で攻めに転じたときどうなるのか気になつてくるわけで。

剣もそれを感じ取つたのか、受けて流して蒼井くんの姿勢が崩れたときを狙つて動く。蒼井くんは慌てて持つてている剣でそれを防いだ。

大剣とまではいかなくとも大振りの剣と、細身の剣とではぶつかり合つたときに長引けば不利になる。蒼井くんが受身になつている間に一度引いて、もう一度チャンスを窺う。

すると蒼井くんは息を整えて剣を構えた。剣道をやつていただけあって構えはしつかりとしている。けれど、いざ斬りあいになつたとき、いちいち構えてなんていられない。

剣は私の意志を汲み取つたのか、前に踏み出し攻撃する形を見せる。蒼井くんはそれを見て、剣を振り上げた。抜き身だということを忘れてるなーと思わないでもなかつたが、そこはとりあえずおいておこう。

三歩目で体を思い切り低くし、蒼井くんの剣をかわして、立ち上がる動作と同時に蒼井くんの懷に飛び込む。そのときに、素早く剣を短刀のように持ち直し、中腰の状態のときにはがら空氣になつた蒼井くんの胴体に剣を横にピタリとつけて、“止めた”。

「待て！ 終わりだ！」

ヴァイスさんが慌てて間に入つて止める。

“敵とみなしたものを斬る剣”だから、蒼井くんが怪我をすると思つたのだろう。でもちゃんと止めていたんだ。蒼井くんの服に触れるかどうかのところで。蒼井くんに向けていた剣を下ろして立ち

上がつてから、剣を鞘に収めた。

蒼井くんはこいつなるとは思わなかつたのか、田を見開いて固まつていた。

そういうや、蒼井くん、剣道やつてるけど、大会で優勝とかまでは聞いてなかつた気が……五人の中では一番剣に慣れてはいるんだろううけど。

でも一番ヤバイ結果になつた。『勇者の従者』が『勇者』に勝つちやつたよ。はー……もつといいや、悪役に徹してやるよ。面倒くさい。

はあ、と大げさにため息をついて。

「 で？ たいした腕だね、蒼井くん。それで『勇者』なんだ？」

嘲のよつよつと、蒼井くんは悔しそつこ歯噛みする。それに追い討ちをかけるよつ。

「 “おまけ”に勝てないようじや、もつ少し頑張つたほうがいいんじやない？」

馬鹿にしたような口調で止めを刺して、ディアリ亞さんの一言「もう、用ないよね」とだけ告げると、私はその場から立ち去つた。

* * *

私は稽古場から立ち去つたあと、昨日レーレンと話をした庭に来ていた。

木々の合間に土の精霊たちがそもそもと動いているのが見える。

れど、やつやつと話しかけようかと考えてこと。

“すじいね”

“やつぱり、ゆうしゃ、は、すじいね”

リートたちが楽しそうに話す。

「いや、私は『勇者』じゃないよ。あ、私の名前は花梨ね」

“かりん？”

“それがなまえ？”

「そうだよ。それに私は勇者についてたおまけだよ」

蒼井くんにだつて『巻き込まれた』と言われたし、蒼井くんに勝つても、自分が勇者になりたいわけじゃない。ただ、身の危険つてのを知つてほしかつただけ。

“おまけ、だつて”

“ゆうしゃより、つよいのに？”

“ちゃんと、ちからを、つかえるのに？”

これらの複雑な心境なんて関係なく、リートたちは楽しそうにしゃべりしている。

…つて、ちゃんと力を使える？ みんなだつて力を使つてゐるのに？ 気になつてリートたちに話しかける。

「ちゃんと使えるつてどうこいつ意味？」

“そのまま”

“ちから、は、ちから”

“それを、ちゃんと、つかえるのは、かりん、だけ”

あまり言葉遊びをしたい心境ではないんだけど、唯一の情報源がリートたちなので、根気よく耳を傾ける。

“ほんとうは、ひとがいつ、ぞくせい、なんてない”

“そうそう。ちゃんと、つかえないから、ひとがつくった、かつてな、おもいこみ”

“けいとう、つてのは、あるてこどあるよ”

“でも、こうさきしきか、ほしゅしきかの、ちがいだけ”

身も蓋もないような話だ。

でも精霊が見える人はいないし、魔法とかで精霊とかを使ってするのじゃないなら、自己の力になる。たとえば、相手を押し出すつもりで「圧力をかけた場合、それが人にとつて『風を操った』と取れるのかな?

そもそも『力』そのものがどういったものなのか、人がよく分かつてないんだろう。

「でも難しい言葉知ってるね」

“ひとのことは、あちこちで、きくから”

“きいてみると、たのしこよ”

好奇心旺盛な風の精霊はくすくすと笑いながらしゃべる。

そんな風の精霊と違って、十の精霊は無口で近寄って来ない。警戒しているのか、見てることに気がついてないのか、どちらか分からなければ、リートたちと話しても自分から口を出さうとしたのなかつた。

“しようがないよ”

“つちのせいれいは、むくちで、ののり”

“そうそう、こうがすと、おもしろい”

なかなか物騒なことを平氣で口にするリートたち。風の精靈、リートは氣まぐれで、楽しいことが大好きらしい。

土の精靈は、あまり動かないで仲間同士ともあまりおしゃべりしない無口な存在らしい。まあ、大地とか地の属性とかいえば、我慢強いとか、しつかりしているとかそんな風に言われるし。その辺はどこへ行つても同じなのだらう。

「いや、それはどうかと思うから……それよりも少し力について聞かせて？」

脱線しかけて話を元に戻すために、私はもう一度リートたちに『力』について尋ねた。

09 模擬試合（後書き）

迷つたけど、結局勝たせてしまつた；
なんか後ろから勇者を育てる存在になりつつある…？ 苦労性な主
人公になりました。

リートたちの会話はイライラしていた気持ちを緩和させた。いや違う。会話はなかなか進まないから疲れるけど、寝っこりーートたちに和まされる。手を出すとその上にちょこんと座る。手の上に重さは感じないけど、存在感は感じる。

今話しているのは力のこと。

この世界でいう『力』が超能力のようなものなら、リートたちが言うように属性なんて関係ない。ってことで、その説明を根気よく聞いている。けど、飲み物でも持つてくれればよかつたな……と、ちよつと後悔している。

“それでね、きづくと、そうなつてたの”
“でも、わたしたちのこえ、だれもきこえないから”
“そのままになっちゃったんだよね”
「そ、そう。でも、昨日私に『闇』を使えばいいって言わなかつた？ つてことは、属性はあるんじゃないの？」

第三の田は闇をまとえば気づかなくなる、と教えてくれたのはリートたちだつた。その前の指輪を見えなくさせるのは光だつたし。それらの説明をすると、リートたちはくすくすと笑う。

“だつて、それは、あたりまえ”
“それを、つかつてるから、あたりまえ”

と、似たような答えが返つてきた。

さて、考えてみよう。闇を纏つとこつのは微妙に違う気がするけど、自分自身を他人から分かりにくくするとこつのは、薄暗い中にいるのに似ている。

それにレー・レンから教わった田くらましは、光の角度を変えることで見えなくなるというもの。どうしたらいいか分からないから、適当に乱反射するようにしたけど。光の屈折によって田は物を認識するから、『光』を使っている。

同じように考えて、相手を吹き飛ばす場合は空気が動く=風を使う。川とかで流れを変えたりとかすれば、水を使いつて感じなかな?

そんな解釈でいい? と尋ねると、リートたちは肯定する。

“でも、それは、こういうふうにしたい、っておもつたけつか
“わたしたちが、ちからをかす、わけじゃないよ”
「なるほど。あ、そいえば治療系は属性なんて関係ないよね。それ
らしい光とかだつて本当の光にはそんな力がないし」

でも力の意味をちゃんと分かつてないから、それを発動させるアイテムが必要になるんだろう。そうすることによって、自分から力の『属性』を狭めてしまうんだろう。

“そう、よくわかつたね”
“かりん、べんきょうねっしん”

夏休み前にはある程度リハビリを終えたものの、学校に通うまでにはならなかつた。でも、担任の先生が親切で、何度も見に来てくれたし、復帰後のテストで及第点を取れば何とかしてくれるよう交渉してくれた。だから、夏休みはほとんど勉強三昧で

「はは…ちょいどっこに来るまで補習やらなにやらでね……つて、あんまりいい記憶じやないから、その話はやめよ」

掘り出した記憶をパタパタと手を振りながら頭から払い出した。

それから椅子から立ち上がって、木の下に向かう。そもそもしている土の精靈に「こんなにほけ」¹と話しかけた。

土の精靈は「ころころ丸っこい」とか、毛糸玉を連想させるようなものもこしたのとか。人を小さくしたようなリートたちとだいぶ違う。

“「…ちは?’”

“‘だれ…?’”

なによつ……反応がのろいし言葉も少ない。

リートたちのことが分かる。でも、丸っこい体にくづくりの田で見られると、撫で回したくなるかわいさだ。思わず掴んでぐりぐりしてしまひ。

“‘なあに～？ なあに～？’”

「やつこひ」と言わると余計かわいいからー」

パニックになつてゐるけど逃げることもしないので、かわいいからぎゅうぎゅう抱きしめてしまひ。するとリートたちが。

“‘つまんなーい’”

“‘かまつて、かまつて’”

と、頭の上にどかどかつとまとまつてくついてきた。なんか…リートたちにはずいぶん懐かれたようだ。「とりあえず待つてね」とだけ伝えて、土の精靈にも魔族による被害の情報収集の協力を頼んだ。

土の精靈たちはあまり動かないのにこじこじする子たちは知らないというけど、近くの土地にいる子と多少の交流があるらしい。その子たちへ伝えてくれると協力を承諾してくれた。

「あらかとこつと無理やり? 士の精靈はリートたちが言つよつてひ無口なので、リートたけに輪をかけて氣長に待たないと話にならない。それが待てなくて、わへつと勝手に決めさせてもうつた。

ついでに土の精靈の呼び名は『エルテ』にした。これまた自分の少ない語録から合いそうなのを。

残るは、火、水、光、闇などだけ、水はともかく他の精靈たちは情報収集には向かない気がする。そもそも、光と闇の精靈つてどうやって話すんだろう。情報収集は水の精靈だけで終わりにすることにしよう。

芝生のように整えられた草の上で座っていると、篠原さんが走つてくるのが見えた。

「ーん……もしかして、文句を言つたために探したのかな。篠原さんはチクチク嫌味を言われたからなあ。でも今回は蒼井くんが『負けた』のが原因だし。

なんて思つていると。

「相沢さん! やつと見つけた」

ん? どうやら文句のためじゃない?

でもこれだけじゃ分からないから、リートとエルテは田に入れないうにして(見ると何か言いたくなるから)、改めて篠原さんのほうを向いた。

「なに?」

「なに、じゃないよ。謝りにこいつー。」

「…………は?」

話の展開についていけず、間抜けた顔で答えるのがやつじだった。

「相沢さんは知らないけど、あのあと大変だつたんだよ。蒼井くんとデイリアさんは恥じかかされたつて思つてゐるし、大野くんとヴァイスさんは一応もつと頑張らうねつて励ましてたけど……」

「いや、別にそれでいいんじゃない？」

負けて悔しがる気持ちがあるなり、もつと強くなるつて思ははず。デイリアさんはともかく、大野くんとヴァイスさんも励ましてくれたんだから、別に問題ないと思つただけど……

「だからー、怒つたデイリアさんが相沢さんのことを仲間として認められないつて！」

「なんか……ツッ」「ハリビリ満載な発言だね。無理やり連れこられたのに、仲間もへつたくれもないし」

馬鹿馬鹿しいにもほどがある、と撫然とした表情で答えたけど、篠原さんの顔はかなり真剣だった。

どうして今になつて心配するんだろう？

「確かにそうかもしれないけど……でも、デイリアさんとヒリは相沢さんのことを助けないつて」

はい？

分からぬいでいると、篠原さんは話を続けて。

「これから旅に出るのに、元の戦力だから連れて行くけど、でも護らないつて言つて。それに私にも、相沢さんが怪我をして治さなくてこいつて……なんか怖くなつて、そんなのおかしいよつて言

つたのに、仲間じゃないから護る必要なんてないって。『ディーリアさん、巫女なのに……平気でそんなこと言うんだよ。怖いよ……』

うん、まあ……篠原さんの話はある程度は予想内のことだった。『ディーリアさん、妙に蒼井くんに肩入れしてるし。堤さんも白黒はつきりさせたいタイプの人だから、こっちの回りくどいやり方にイライラしてると分かる。だからある程度予想してたんだよね。ただ、予想外だったのは篠原さんが心配してくれたことだった。

「なんか、子どものケンカみたいね」「相沢さん？」

心配している篠原さんには悪いけど、私は小馬鹿にするような口調で大げさに肩を竦めて見せる。

篠原さんはそんな態度を見て、緊張していた顔が間抜けた顔になる。

「幼稚、つてこと。馬鹿馬鹿しい。高校生にもなつてガキ過ぎるよね。『ディーリアさんも最高位の巫女つてことで奢つてるみたいだし。別に私、助けてくださいなんて頼んでないよ。あくまでちやんと元の世界に返せとしか言つてないもの。寝言は寝てからにしてほしいわ」

嫌味を長々と語ると、篠原さんは顔を顰めた。うん、これでまた、私は嫌な子に戻ったかな。

「まあ、わざわざ言つてくれたことはありがとう。でも、別に自分が悪いことしてないのに、謝る必要なんてないから」

「そんな単純なことじやないよ！ みんな変だよ！？」

「あー……もしかしたら、魔族の瘴気にやられて頭おかしくなったん

じゃない？」

「なんで……」

「ん？」

「相沢さんだって、なんでそんなケンカ売るよつないじばかり言つてゐるよー。もつ知らないつー！」

泣きそつた顔で叫んだ篠原さんは、それだけ言つて走り去つていつた。

その姿を見て、ふーとため息をつく。

私の心配をしたり助けようとすれば、篠原さんだってやばいんだよ。

わざと篠原さんに言つたのは嘘じやない。第三の田を開いてから、より濃く見えるよつになつた瘴気は、この城の中でもあがけに見かける。

最高位の巫女であるティアリアさんの周りにも、勇者の蒼井くんの周りにも

「だからまともな考え方ができるないんだよね。そんなの餌食になる必要なんかないんだよ、篠原さん……」

呟くよつて言つて、こつも樂しそうにしゃべるコードたちが、少しだけ悲しそうに“かりん”“だこじょひぶ~”と心配そうに声をかけてくれていた。

10 嫌な存在として（後書き）

感想ありがとうございました。今回は精霊のお母さん（笑）です。

精霊の名前。

風の精霊『リート』 歌う から。

土の精霊『エルテ』 土壌、地球 から。

次回はレーレンとの会話で、カリンの態度の理由がちょっとだけ出
てくる予定。

11 ただ単に、守りたいだけ。

ぐるぐると視界が回る。倒れて意識をなくしてしまったほうが楽な気がした。

第三の日を開いてから、周囲に漂う瘴気と、まともな考え方ができなくなつて好戦的になつてている人たちを見て、逃げ出してしまいたいと思った。

でも、篠原さんみたいな人もいるんだ。治療系が得意な彼女の周りには、浄化作用があるのか瘴気がなかつた。だから他の人の変異に気づいて、気になつて来たんだろう。

でも、私が謝つて終わる話じやない。

今ここで適当に話をあわせても、どうせ、またぶつかる日が来る。彼らが瘴気に蝕まれている限り

「あ、ここにいた。大丈夫、カリン？」

頭上から声がする。声の主は……

「レー……レン」

俯いていた顔をゆっくりと上げると、最初に話したときと変わらないレー・レンの顔。

なにより、彼も瘴気に蝕まれていなかつた。

「大丈夫？ カリン、顔色が悪い」「ちょっと田が回るだけ。大丈夫だよ」

頭を押さえながら座りなおすと、レー・レンが隣に座る。

「ずいぶん苛々してるみたいだつたけど、本当に大丈夫？」

「まあ、一応……だいぶ瘴気の濃さにうんざりはしてるけどね。レーレンこそ大丈夫なの？」

「まあ、こっちもなんとか。あ、このせいかな？」

といつてズボンのポケットを『ジル』やつて取り出したのは、携帯のストラップのように何かにつける紐がついた、三センチくらいのクリスタルの玉、その下に小粒のタイガーアイに、ふさふさとした紐のかたまり。たぶん、これがレーレンのアイテムなんだろう。

「でも、なんでクリスタルのほうが大きいの？」

属性なんて関係ないつてリートたちから知ったけど、人が持つている知識でいけば、レーレンは地の属性だと言っていた。だとしたら、玉の大きさは逆だと思うんだけど……

「言つたよね、僕の力は弱いって。使えるほどじゃない。でも、クリスターは力に関係なく、浄化や守護、増幅という力を持つからね。カリンの指輪も土台がクリスタルなのはそのせいなんだ」

「了解」

だからクリスタルのほうが大きいんだ。それを常に身につけてい るから、レーレンは瘴気にやられないんだ。

……ん？

「それなら、クリスタルをみんなに配れば、瘴気でおかしくなることはないんじゃない？」

「まあそれは考えられたよ。でも、アイテムとして使えるほど純度の高いクリスタルってなると、また話は別でね。気休め程度のものならみんな持つてると思つけど」

「やうなんだ」

確かに宝石には内包物や大きさで値段変わるものね。アイテムの場合は特に内包物かな。余分なものがあると、それが邪魔するのかもしれない。

考えていると、レーレンが軽く頷く。一いちらの考えが分かっているみたいに。

「一応、旅に出るときにはみんなに持たせるから、つらも純度の高いのを仕入れたけどね。瘴気にやられちゃっている場合、そのクリタルでどこまで浄化してくれるか……」

「分からぬってことね」

「そう、ディリア様まで……だからね」

「知つてたんだ」

「一応ね」

知つても、何もできないのつて歯がゆいね　　と、レーレンが付け足す。

うん、そうだね。その気持ちは分かるよ。素直に頷くと、レーレンが尋ねる。

「どうして悪役ぶつてまで、カリンはみんなを守りたいの？　頷いたのが理由？」

レーレン……鋭いよ。でも、レーレンから言わせると、普通の人を見ればあからさまに分かるような接し方を、私はしてるらしい。

「さつき来たマナミつて子。あの子を突き放したのも露骨過ぎるよ。まあ、みんな冷静な判断つてのができなくなつているから仕方ないと思つけど」

冷静な判断 確かにそのとおり。篠原さんだって、瘴気にやられてはいないけど、不安を感じているのか、いつになく敏感だし。瘴気に蝕まれている人たちはなおさらだね。

「でも、レーレンはその『冷静な判断』ができるんだよね」

一介の旅の商人 の割りに、物事をきちんと把握し、また瘴気にも蝕まれない精神。それだけで普通じゃないよ、はつきり言つて。そう返すと、レーレンは目を丸くしたあと、くすぐすと笑う。

「レーレン」

「いや……ごめん。確かにそう思われても仕方ないと思つけど……逆に考えてみてよ」

「逆？」

「そう、僕らは旅の商人だ。いつしまえばどこにでも行ける。分かる？ この国が強い『勇者』を他の国より望むのは、魔王の居城が近いから だよ」

「あ……」

一番最初に地図を見せてもらつたとき、魔族が固まつて存在するところがあつた。それがこの国の北西のほう。大きさは小さいけど、魔族にとって国といつていいほどの大きさ。そして、魔族の地にとつて南がここで、東は海、西は他の国に隣接しているけど、魔族を警戒しているため、近くに村はない。北は凍りに閉ざされた地なので、ここも人はほとんどいない。いるのは極寒を好む魔族のみ。いつてしまえば、この国の北西国境付近が一番魔族の住む地に近い。魔族の地のほかにも、あちこち魔族は存在するけど、数の多さや魔王の居城（代々の魔王はそこにいるらしい）などから、一番魔族の脅威を感じるのはこの国だろう。

でも……

「要するに、レーレンは逃げるんだ？」

「まあね。逃げてもいつかは被害に遭うだらうけど。まあやつ思つているほつが気が楽だと思つことにしている」

それじゃあ意味ない そんな私の気持ちを見透かしたよつに、レーレンはため息交じりの笑みを浮かべた。

「言いたいことは分かるよ。それに対して非難されても仕方ない。要するに気持ちのも問題なんだよ」

「なんか複雑な気持ち？」

確かに力がなければ、逃げ回るのも手だよね。それに人と魔族の二種族がいるけど、歴史上どちらか片方が完全に支配されたという記録もなかつた。

魔王が短命なら、その間だけ、逃げるという選択肢もある。ただそれができるのは、レーレンのような自由な人のみなんだろうけど。

「実は今回案内を買つてでたのも、そんな弱腰な自分が嫌だつたのもあるんだ。あと、勇者だつて言われてるのが僕より年下なのに、僕は逃げるんだつていう劣等感とか。カリンのことは正しいから、余計に痛いんだよね」

「……ごめん、ちょっと気をつける」

「いや言われても仕方ないことだから。あ、でも実際の問題は、魔族の地より点在している魔族のほうが活性化していて、他国での被害のほうが大きいから、逃げても意味がないんだけどね」

「……は？」

「うん、実は。だからティリア様も全部把握していないんじゃないかな？」

な？」

なんで魔族の地に近いこの国より、他の国のほうが被害が多いのかな。

魔族の地、魔王の居城、そこが魔族の拠点だらうと、その近くじやなくて遠くの地で、うーん……考えられるのは、点在している魔族が、魔王の誕生によつて活氣付くつてことだけ。

悩んでいると、レーレンが「確かに情報じゃないんだけど……」と前置きしてから話し出す。

「一百年前に封印された魔王ってまだ死んでると思つんだが……」

「う、うん。下手に動かさないほうがいいかつて聞いたけど……それが何か？」

「一百年前の魔王と聞いて、ドキッとした。今の魔王じやなくて、前の魔王のせい？」

「いや、封印しているのはクリスタル。要するに浄化作用があるんだよ。だから一百年もの間封印できるんだろうし……そのクリスタルの影響が、魔族の地にも影響を及ぼしているんじゃないかなって、僕は考えてる」

「浄化作用……ね。でも、完全じゃないよね。魔族はいるし、魔王も誕生した」

私の問いに、レーレンが肯定するよつに頷く。

各地を旅するレーレンはティリアさんよつよほど情報通で、ためになる情報をくれる。

一百年前に魔王が封印されてから、魔族は彼らの地から出て各地に散つたものが多いといつ。で、今暴れているのは、魔王の誕生によって濃くなつた瘴気を取り込み凶暴化した各地の魔族で、一百年

前より各地の被害は大きくなっているらしい。

「…………そうなると、他の国のことだから、本当に把握できてなかつたのかな。ティリアさんを責めるように言つたけど、それならそうと言つてくれればいいのに。」

しかめつ面で考えていると、目の前に前に見たカップが差し出される。「少し休んだほうがいいよ」と、レーレンの声付きで。

「ありがとう」といつてカップを受け取ると、今回のお茶は冷たくて砂糖を入れた麦茶のようなものだった。

「カリソ、疲れてそうだったから、甘いものにしたんだ」

「ありがとう」

少し照れくさくて、レーレンの顔を見ずにカップに口をつける。甘くて冷たい飲み物は、潤いとそして冷静さを取り戻してくれた。

『冷静な判断』を欠いていたのは自分も同じかもしれない。悪役に徹するといいながら、それでも彼らの言葉に傷つかないわけがない。それに苛々していたのは確かだ。

「ね、話は戻るけど、どうしてそこまでするの？」

「うーん……まあ、いろいろ思つところがあつてね……」

気張りすぎて限界近いかもしれない。だから、レーレンには悪いけど、少しだけ愚痴に付き合つてもらおう。

「…………来るちょっと前、怪我をして痛い思いしてゐるつてのもあるんだけど……なんていうかな、人が信じられなかつたの」

「カリソ？」

「見張られて、騙されて……そんな中でも、たつたひとつだけ信じられるものができた。私は……自分の中のそれを守りたいんだと思

「う

怪我からの復帰も、馴染めない学校生活も、それがあるから耐えられた。

「あと、そんな人ばかりじゃないって思いたいから、私は人を騙すよつな」とはしたくないって思つんだよ。隠し事はしても……ね」

レーレンの問いに、ちゃんと答えないなつていないとは分かっている。

でも、今の私に答えられるのはこれが精一杯だ。

「やつ思つて動いた結果が、レーレンの目からやつ見えるだけ。私がそつしているのは、ただの血口満足にすぎなことよ」

レーレンに答えながらも、私はそのときのことを思い出して、自分の胸に手を当てて目を瞑つた。

1.1 ただ単に、守りたいだけ。（後書き）

投稿サイトは初めてなので緊張してるんですが、そんな中でお気に入りに登録していただいたり、感想をいただけて励みになつてます。

とつあえずぱらぱらと伏線いらしきものはばら撒いてきたので、そろそろ旅に出て回収する方向へこく予定です。

レーレンはそれ以上深く聞いてこなかつた。誰の心にだつて触れてほしくないことや、知られたくない大切なことがある。それを察したからだろ？

でも、篠原さんは突き放したけど、レーレンはどうじみつか？ いまさら……な気がするし、レーレンのほうが上手く立ち回つてくれそうな気がする。

……分かつてる。これは甘えだ。悪役に徹する なんて威勢のいいことを言つたつて、本音ではそう思われたくないから。だから、理解してくれるレーレンなら……と、思つてしまつんだ。 扱いのけなくちゃ……いけないのに。

「僕にまで気張る必要ないよ」

「レーレン？」

「カリンがどんなものを抱えているか知らないけど、カリンは一人で抱えすぎてると思う。一緒に持つてあげられるほどカリンのこと を知らないから偉そうなことは言えないけど……でも、一緒にいることくらいはできるよ？」

思わず田を見開いてレーレンを凝視してしまつ。 さつきまでヤバイなら逃げるとか、そういうことを言つていたくせに、なんでそんなこと……

「僕には……先頭に立つて戦う力がない。後方から守る力もない。でも、側にいることくらいできるよ。『めんねカリン、そんなことしかできないけど……』

優しい笑顔とぽんと頭に置かれた手。どこか子供をあやすかの

よつな仕草だった。何か言おうと思つても、どうこうしていいのか分からなくて、軽く頷いたまま、しばらくの間、レーレンの顔が見れなかつた。

しばらくすると落ち着いたのに気づいたのか、レーレンが頭から手を放した。

「あ、そうだ。ひとつ朗報だよ」
「ん？」

レーレンは何事もなかつたのかのように振舞つてくれた。だから私も普通に戻つて尋ねる。

「勇者ハヤトは属性が『風』なのに闘争心をめらめら燃やして、ヴァイス隊長とやりあつてるよ」
「はあ、まあ、蒼井くんは熱血漢なところがあるように見えるから……どちらかというと属性が風つてほつがあつてない気がしてたんだけど、もしかしたら火も扱えるんじゃないかな？」
「なるほど『火』の属性もあるのかもしれないってことだね。一人ひとつとは限らないんだし」

レーレンの口は「全部の属性を持つているのが目の前にいるしね」と語つてゐる。いや、属性なんて本当は関係ないけど。適当に「そうだね」と答える。

でもまあ、見なくてもそのシーンが目に浮かぶよつだよ。やる気になるのはいいことだから、この際揉まれておいで、蒼井くん。帰つたら県大会優勝なんて田じやないよ。
と、その話は終わりにさせようとしたが。

「で、ね。もうひとつおまけがあつて」

「なに?」

「ヴァイス隊長が今まで相手に会わせてきたけど、手を抜かなくなつた」

ヴァイスさん、手を抜いていたのか。まあ当然かな。いくら勇者として呼ばれても、剣道をやっている蒼井くんに何も知らない大野くん相手じゃ、などと分析してるけど、勝手に意思を汲み取つて動いてくれる剣を持つている私が語れることではないけど。

「とりあえず、結果的に良かつたと思うことにするわ。なんか考えるの、面倒くさい」

「あれ、意外な答えだね。もう少し心配するかと思つてた」

「ん? 自分の実力に氣づいてやる気なつたならいいんじやない? ヴァイスさんにやられたらそれだけの実力つて分かるだろうじ。とにかく強くなつてもらわなきゃ始まらないでしょ」

魔王討伐の旅に出ました。魔族にあつてやられました。おしまい
じゃ、お話にならない。

そう思つたから模擬試合と称したものに付き合つたし、剣の力を借りた私にでさえ勝てるような腕だったから、遠慮しないで勝つことにした。そのせいで、やる気になつて強くなつたら、少しばかり心配が減るつてもの。

どうせ最初から仲がいいクラスメイトでもなかつた。だから、帰るまで適度な距離を保つていたほうがいい。

……つて、適度な距離とは言い難いのが現状なんだけど。その辺は置いておいつ。あまり気にすると考え込むだけだ。

「やういえば、レーレンはそれを言いに来たの?」

「あー…まあ、カリンの様子が気になったのと、その報告と……も

うひとつ氣になる」とがあつてね

「氣になること?」

「うん、あ、カリンの剣を見せてくれる?」

「それはいいけど……」

と横においておいた剣を手に取り、レーレンに渡した。するとレーレンは剣を鞘から抜き始めて

「レーレン、抜かないほうがいいよ。」

「大丈夫、抜かないよ」

そういつて鞘を少しづらした後、何かやつてているのは見えたけど
……剣、分解してる一つー??

「レーレン、なにやつて……!?」

「いや、ちょっと確認。…………あ、やつぱりそうだ!」

「なに?」

レーレンの手元を覗いてみると、どうやら剣の柄など余分な部分
を外して銘などが書かれているというのを見ていた。そこ
に書いてあるのは……

「eins? これを作った人の名前?」

でも、eins どつかで聞いたことがあるよつな……どこだ
つけかな? と思っていると、レーレンがいつもより引き締まつた
表情で。

「いや、einsはこの剣の名だよ^{アインス}」

「この剣の?」

「ああ」

私の問いに答えながらも、レーレンは分解した剣と、アイテムと交換した手帳（シャーボだけではなんだつたので、手帳もおまけにつけた）を交互に見ている。長さがどうのだの、細身なのも一致するだの独り言をブツブツと呟きながら。

仕方なく、レーレンが納得いくまで待つことにした。でも、アインス、アインス……どつかで聞いたことがあるんだけどな。どこだつたかな……と考えている間に、レーレンのほうが納得したのか、「やっぱりだ……」と感嘆の声を漏らした。

「レーレン？」

「カリン、す、このよ、この剣！」

「は？」

一人で興奮しているレーレンについていけず、眉を顰めた。

するとレーレンは気づいたのか、手帳を私に見せた。右側のページには手書きの剣の絵が二つ。「デザインなどはぜんぜん違う。そして、左側のページには、細かく書かれた文字。もちろん文字も読めるので、その文字をなぞるよように見て

「勇者の剣……？」

「この剣と見た田が違う剣のことは、最初に呼び出された『勇者』が使っていた剣の詳細で、そこから、私が持つこの剣に行き着くまでの変遷が書かれていた。

「ちよつ、レーレンこれ本当なの！？」

「間違いないよ！ カリンの剣のことが気になつて調べてたんだ。

そしたらどんどん出てくるじゃないか

「

と、さうにヒートアップしていくレーレンは、持っていた袋から何かを取り出した。ガサガサと乾いた音から紙のよつなものだらう。案の定、手の中には少しくしゃつとなつた紙が数枚。

「勇者を呼んだら来たのが五人。とりあえず、勇者と思しき力の持ち主には勇者の剣を、他の人にはどうしよう といつことで、アイテムの管理室で急いで四人に合ひそうのを選んだんだ。で、これがそのアイテムの説明書」

「……いいながら、それを手渡すレーレン。

それにはやはり『敵とみなしたものを斬る剣』と書いてあり、この剣の絵もあつた。詳細には属性不明、敵とみなしたものをするべて斬る。担い手に見合つた力でとあるが、その下の持ち主の履歴の短さを見れば、担い手の力に見合つといふ言葉がいまいち信じられない。

持ち主の履歴を見ると、たいてい死亡して返却が多い。アイテムは貴重だから、国で管理しているらしく、力があり勇者希望の人があれば、登録して貸し出すというシステムらしい。だからアイテムの詳細もあるし、借りた人の履歴もある。

この剣、百年前には頻繁に借りる人がいたけど、だんだん減つて、ここ六十年ほど管理部屋から出したことがないほどの、使つたら死ぬ確立高し、な剣だといつ。

「……つてえ、めちゃくちゃ危ないものを、属性が分からなかつて押し付けるなー あの巫女め!」

あのやつ……やらなければいけないが、いつかソティリ亞さんの前に魔族が立つてもそのままそ知らぬ振りしてやるわ!..

怒り心頭にしている私に、レーレンが落ち着いてとまた甘いお茶を差し出す。それを一気に飲み干して、はーっと深いため息を吐いた。

「カリンの気持ちは分かるけど……話を進めてもいい？」

「あーうん。どうしてこれが前の勇者の剣だつて分かったの？ 見た目だつてぜんぜん違うじゃない」

刀身が細身なのはともかく、柄も鞘もまったく違う。どちらも替えがきくものだけど、ぜんぜん違うものに見えるほど替えられるし、勇者の剣ならもう少し大事に扱つてもいいはずだ。と、ブツブツとこぼす私を他所に。

「あ、もしかして歴代勇者の肖像画を見たの？ 確かにあの絵だとこいつの形になるけど」

と、手帳に描いてある別の形のほうを指差す。それに慌てて頷くと、レーレンは次に進める。

「剣を作ったのは当時有名な刀鍛冶のシュタールという人物で、その中でも精魂こめて作った力作らしいよ、このアインスは」

なんたつて、魔王討伐のためだからね、と付け足す。

「魔王討伐のための勇者の剣……ね」

「うん、剣は残っていたみたいで、後から回収されたみたいだ。でもボロボロで、何度も修理しているうちに今の形になつたみたいだよ。魔王封印という偉業を成し遂げた勇者の剣を使いたいってのが多くて、抽選になるほど勢いで貸し出してたらしいんだよね」

……絶句。何も言葉が出てこない。

「魔王がいなくなつてある程度平和になつたけど、魔族はまだいるから勇者制度はなくなつてないし。そんな中で、勇者の剣を持てるつてのが、自慢だったみたいだね。前の勇者の属性は不明になつているから誰でも借りれたみたいだし」

「……」

なんかもう……馬鹿らしくて聞いていたくないんだけど。

とにかく、勇者が使つていた剣を持つことがステータス、みたいに思われて、自分の力のことなんか無視して、その剣を持てば強くなると思い込んだのか。

あげく、いざ敵と遭遇すると、自信満々に剣を抜くが、剣は力を勝手に引き出し敵と戦う。敵が倒れるまで力が持てばいい。でも持たなかつた場合、また複数を相手にできるような力がなかつた場合、剣の強さ以前の問題だ。

結局、そんなことを繰り返したあと、勇者の剣などとんでもない。自分以外の人間が使うのが気に入らないから、勇者がとり付いているんだ、呪いの剣だといって借りる人がいなくなつたという。

その呪いの剣を押し付けたのは誰かしらねー？ と台詞棒読みな感じで咳き、私の中でもティリアさんは敵とみなした。

あ、でも

「レーレンが言つようになんにそんな風に思えなかつたよ、この剣。私の意志をちゃんと汲み取つて、私が動きやすいようにしてるつて感じだつたし、蒼井くんとやりあつたときも、ぜんぜん疲れなかつたし

まあ、ほとんどかわしたりしてたから、動きも力も最低限。疲れのせいやつてないといえばそれまでだけだ。

「たぶん、カリンの力がそれだけ大きかつたんだと思つたけど
分からぬって言つていたのに……」

「僕には相手の力を図る能力なんてないからね。あ、あと、カリン
つてその剣に対しても自然体だよね。気構えることもないし、かと
いつて呪いの剣だと恐れることないし」

まあ、抜かなければ問題ないし、適当にしてようと思つたから
なんて正直に答える気もなく、「そつ見える?」と適当に返した。

「うん、見える。だから他の人と違つて、その剣が自身の扱い手と
して認たんだと思う。だからカリンの意思に従つてくれてるんじゃ
ないのかな?」

私の意志に沿つてくれるのはありがたいけど……よりもよつて、
勇者の剣ですかい。

そんなのがばれたら、またいらぬ敵が増えそうだな、とため息を
ついた。

12 勇者の剣（後書き）

お休みが終わってしまったので、次からもう少しのんびり更新予定。でも勢いは残つてるから、打ち込みだしたら早いかも。

剣の銘の部分は今回、製作者じゃなくて剣の名前にしました。

蒼井くんの特訓のため、出発は数日延びた。

その間、ディリアさんと堤さんは刺すような視線を感じる。つてか、ディリアさん、あなたは巫女なんだから、そんな私情入りまくりな状態でいいのか、と問いたくなる。

篠原さんはまだ心配しているのか、気になつてちらちらと窺うような視線を感じる。

問題の蒼井くんは、大野くんと一緒にヴァイスさんとしごかれているので、私のことまで気にしてられない　といった感じだつた。それでも裏で着々と旅の準備は始まつているわけで、あれこれと荷物が増えていく。はつきりいつて、最高位の巫女様がいるせいで荷物が増えるばかりだ。野宿できないだのなんだのといつて。勇者ご一行は八人だけど、その後ろにバックアップがつくという、周囲から見たら実に間抜けな光景になるだろう。想像するだけでうんざりする。

その間、私は特にやることがないので、レーレンから情報を引き出したり、リートたちから各地の状況を聞いたりと、情報収集が仕事のよう（私が勝手にしてるだけだけど）になつてい。

魔王の居城は魔族の地の中心にあって、そこまではおおよその距離は日本でいえば八百キロ弱くらい。東京からだとどれくらいだろうか。地理に詳しくないのでよく分からぬ。しかもメートルとこちらとでは長さが違うので、いちいちメートルに換算しなおしてからじやないと把握できないから、思わず電卓が欲しくなる。

とりあえず距離はそんな感じだけど、この世界ではよくて馬車のような乗り物しかない。だけど、そんなのに乗つていたら、いざ魔族が出てきたときに対応できないということで、徒步になった。そのため、距離が出ても何日でたどり着けるのか分からぬ。

ここまで状況を理解すると、もう面倒くさいのでそれ以上考えるのはやめた。あとはその場その場で対処していくしかない。

そうして、だらだらと数日過じたあと、蒼井くんはじめ勇者一行はやっと旅に出た。

この世界は縁が多くて一見すると穏やかなところに見える。魔族の被害などの問題もあるけど、アスファルトに阻まれた地面に比べると、なんかのどかなイメージがする。そんなところを歩いていた。荷物の多さにうんざりしてディリアさんに抗議して、隊商で旅慣れているレー・レンの援護、プラス大野くんの口添えもあって、何とか一台の馬車に留めさせた。

その馬車に、後方支援だからとディリアさん、堤さん、篠原さんが乗っている。残りは旅に必要な荷物で、貴族が乗る豪華な馬車じやなくて、幌のついた荷馬車といったもの。

で、何かあつたらすぐに対処できるようにと、蒼井くん、大野くん、ヴァイスさんは歩き。私も剣を持っているので、徒步になつた。まあ、あの女性陣の中にいるより、疲れても歩いたほうがよっぽどマシだ。

といつても、私たちも特に歩きなれているわけじゃないから、人のことはあまり言えない。ばてない程度に休みを入れて、足の筋肉の凝りをほぐした。

ちなみに私たちはここに来たときの制服のままだった。なんでこうなったのかというと、制服が（蒼井くんたち男の子の）この國の王様に気に入られてしまつたから。一応布地 자체を強化させていりし、必要なところは防具を付けている。

あえてこちらの服にしたいとも思わないでの、口を挟まなかつた。こちらの服はちょっと……というより、還るチャンスがあるなら還りたいので、そのときにこちらの服を着ていると都合が悪い。私はまだ、還るということを諦めてはいないから。

それに普通と違う格好というのは、人の目を自然に引くもので、希望の光 勇者一行が魔王討伐に出た と、町に出てすぐに歓声が沸き起つた。

そうか、王様、この効果も期待してたな。

勇者の存在で人が希望に満たされるのなら、魔族になら敵対心、闘争心、恐怖心などが生まれるだろう。その辺を考えているんだろうか。こんなノロノロしている旅なら、すぐに魔王に勇者の存在を知られるだろ?」

歩いている間、蒼井くんと大野くんは異世界を堪能しているかのような会話を繰り広げてる。想像の域での話は、ヴァイスさんが途中で訂正したり補つたりと、自然にこの世界の知識が身につくように仕向けていた。

何気ないところでも二人を鍛えてこの世界でやつていけるように仕込むあたりがすごいな、と私は少し後ろで感心してみている。

そして、さらにその横で「面白い光景だね」とのんびりした口調で語りかけるのはレーレンだった。彼は約束どおり一緒に歩いてくれた。

「面白いというより、私はレーレンがものすごくお人よしに見えるよ」

「そりゃかな? そう思つてるのは僕だけじゃないよ
「そう?」

「うん、ほら見て!」らん。ヴァイス隊長が気にしてる。あと、ヨーヨーチつて子も気にしてる。馬車に乗つてるマナミつて子は今は分からぬけど。完全に無視しようとしてるのは、勇者とティリア様と

「リツて子だけ」

まあ、確かにレーんが言つた四人はこちらのことが多少なりとも気になるのか、意識している。篠原さんなんか旅に出る前も、気にして何回か声をかけようとしてた。私としては露骨に避けたのに、それでも心配するなんて本当に意外だ。

まだ町から近いせいか、旅の一日前は何事もなく終わつた。ただ、ほとんど進んでないんだけどね。魔王の居城にたどり着くまで、いつたいどれくらいかかるんだろうか。

＊＊＊

旅の一日前。やっぱり筋肉痛になつた。というより、足にできた肉刺が痛い。まだ夜明けだったので、疲れてみんな起きていな。そつと天幕の中から抜け出して外に出て、少し離れたところで足の肉刺に治療の力をかける。

魔法じゃないので、いちいち呪文が要らない（覚えなくともいい）のが便利なこの力。頭でイメージする。ただ、治れ治れと念じるだけけど。一応成果があつたのか、しばらくすると血が滲んでいたところは赤みが残つているものの、普通の皮膚に戻つていた。

「ま、こんなもんかな？ 他の人たちは篠原さんの力で治つているだろうし」

彼らはいつことを本当に実行していた。「こ飯を食べた後、みんなで（レーんとヴァイスさん除く）集まつて、篠原さんに足にできた肉刺の治療をしてもらつていた。

レーんが「いいの？」と聞いたけど、別に構わないと答えた。

篠原さんも気にしているのか、私に声をかけたけど、堤さんによつて止められた。振り向いた私に「なんでもない」と、辛そうな表情で言つ篠原さんに「そう」とだけ返した。

見事にバラバラです、はい。いや、私のせいなんだけど。

戻ると大野くんがもう起きていて、戻ってきた私に声をかけた。

「おはよう、相沢さん」

「……おはよう、大野くん」

普通に声をかけてきたので、普通に返した。

そういうえば、大野くんはあまり茶化すわけでもなく、普通に気遣つてくれたっけ。こつちに来てからはヴァイスさんにしごかれているのを見るだけで話はしなかつたけど。

「よく……眠れなかつた？　その……」

「別に、ただ単に早く起きただけ。こつちは向こうと違つて空氣はきれいだし、この場合は……」

「早起きは三文の徳？」

「そり、それ。なんか気持ちいいからそんな感じ」

一人のほうが気が楽だし、みんなが起きてくる間、リートたちと話しながら時間をつぶそうと思つていたんだけど……まさか、大野くんが起きてくるとは思わなかつた。

とりあえず話をあわせながら適度な距離を保とうとするけど、大野くんはやっぱり今の状態を気にしているんだね。「大丈夫？」とか尋ねてくる。

「ハヤト（あいつ）も悪いヤツじゃないけど、下手に熱血漢などると優しいところがあるから。あいつにしたら、無理やり呼び出さ

れたのにこっちの世界のことを心配しちゃつてるし」

「まあ、それは分かるよ。教室では私によく声かけてきたもの。それに熱血漢でお人よしじやなきや、『勇者』なんてできないでしょ」

それでも少しきているところがあつたので、大野くんが『優しい』といったところを、私は『お人よし』と代えて返した。

その意図に気づいたのか、大野くんは後頭部をなでるよつにして「参つたな」と呟く。

「堤さんだつて仲のいいクラスメイトがそんな状態のところに、仲良くなのがいてしかも非協力的なら文句も言いたくなるよ。問題はティリアさん。私からすれば、の人、最高位の巫女さんなのに

「私情入りまくつてるよね、の人」

私の言葉にかぶせるように、大野くんは同意する言葉をさりげなく口にした。

なんだ、同じようなこと思つてたんだ。

13 旅のねじり（後書き）

かつと旅に出かけた。

大野くんは意外に周囲を見てる人だった。

ただ、どうしても知らない世界で、しかも猪突猛進…じゃないけど、『勇者』街道一直線な親友を見捨てられないようで、なんか複雑な気持ちを抱えているようだった。

でも、世の中にそんなに単純思考な人は少ないとと思う。あちらを立てればこちらが立たず、なんていうけど、まさにそのとおり。けど、どこか一箇所とだけ交流していればいいわけじゃない。そのためにはあちらに合わせ、こちらに合わせ……ということになる。今の大野くんはそんな感じだらう。

「そりいえば、あの、レーレンって人と仲いいけど、大丈夫？」

大野くん、何度も「大丈夫？」を連呼されると少しうんざりするんだけど。それに、なんの「大丈夫？」なのか。

いつも体調を気遣つて「大丈夫？」と聞いてきた大野くん。でも、レーレンとのことは、体調は関係ないはずだ。

じゃあ、恋愛？ いやありえないでしょ。レーレンの目にも私の目にも、そんな色はどこにもない。大丈夫かと心配されるようなことは、見ていれば分かるはずだ。でもそれを心配してるっぽい……よね？ はあ……とりあえず。

「レーレンは商人だからね。最初会ったとき、シャーボのことをすごく興味深そうに見てて、それで話するようになったんだけど。元の世界の話とか聞くのが面白いみたい。特にその中で、こっちの世界で応用できて商売になりそうなのとか、ね」

代わりに私はこっちの世界のことを教えてもらつているよ、と答

える。

半分はレーレンの好奇心と、私にどつても気が抜けれる場所というものもあるんだけど。その辺を言つと、また話が元に戻つてしまつて表には出さない。

それとアイテムの指輪と交換したのは内緒にしておいて、単に情報交換の一環として互いに利害が一致しているから話をするのだということにしておいた。

大野くんのレーレンに対する変な思い込みは消えたけど、替わりに蒼井くんやディリアさんの状況報告や説得をするから、自分にもそれらを教えてほしこと言われた。

「自分で聞けば？」

「だつてあの人、相沢さんは仲良く話すけど、僕たちは事務的にしか話しないから」

「普通に話せば、普通に返つてくれるけど？」

「だから、それが事務的ななんだつて」

「そう言われても……」

レーレンは最初から好意的だったし、こっちの世界、元の世界と話題は尽きないし、よくしゃべる人なんだけど。

まあレーレンは私に対して好奇心（属性全部あるところ）と多少の同情からだらうけど。私もレーレンと話をしないと、ぜんぜんしゃべらなくなるから、レーレンの存在はありがたい。だから会話を弾む。

でも、そこにやついたモノはないと黙つてよ……うん。

「レーレンは商人だから有益な情報があれば食いつくと思うよ。そういうた話をすればそこから話は膨らんでいくし。同性だからその辺りでも私より話が合つんじゃないかな？ 気構えないで気軽に話してみるとこよ」

ね、軽く笑いながら言つと、大野くんの目が丸くなつていった。

「お、大野くん？」

「……あ、ごめん。相沢さんのそういう顔、はじめて見たから……
びっくりした」

……レーレンに続いてまた一人。

そんなに私の笑顔は珍しいのかつ！？

そりや、今の私はあまり笑わないけど、レーレンにも言つたように感情がないわけじゃない。楽しければ笑うし、頭にきたら怒るりもするただの人間なのに。これじゃあ、まるで珍獣のようじやないか。

ふつ、とため息をつくと、大野くんは。

「相沢さんがなにを考えて動いているのか分からぬけど、たまには笑つたほうがいいよ」

と言つた。その顔には嫌味の欠片もなかつた。
が、そう簡単に笑えるなら、いくら休学していたとはいえクラスの中で浮くわけがない。でも好意からの言葉だったので「善処する」と答えた。

返事とほぼ同時に、ヴァイスさんとレーレンが天幕から出てきて、この話は終わつた。

* * *

朝食をとつたあと荷物をまとめてまた動き出す。昨日と同じように、徒步と馬車で。

でも、馬車が入れないような場所になつたらどうするんだらう、とふと考える。レー・レンがいるし、ある程度は広い道を行くだらうけど、魔族の地に入ればそんはいかないだらう。歩き組はその頃には歩きなれているだらうからいいけど、馬車組の三人はどうするのか、意地悪い興味が沸いた。けど、篠原さんがいるから、足にできた肉刺は治してもらえばいいだらうし、と深く考えるのをやめた。なんか馬鹿らしくて。

小休憩を一回ばかりとつた頃、数人の人が道の前に現れた。

盗賊とかじやなくて、その辺りに住んでる村人といつた服装。なによりこちりを見てすぐりつくよくな視線にまず目がいった。

これは……魔族が出たからどうにかしてください、的なお話？と思つてみると、どうやら違うらしい。勇者の格好をした蒼井くんじゃなくて、巫女がいると聞いてきたという。

「なに」とです？」

馬車の中から顔を出すティリアさん。キリッとした表情は、作つてるなーと思わせるものだつた。そりやそうだよね、この国最高位の巫女ともなれば、普通の人ではないよに振舞わなければならぬいだろう。どちらかというと、私が見てきたティリアさんのほうが感情豊かで人間味があるのかもしけれない。

まあ、そんなことはどうでもいいけど。

「巫女様にお願いがあります

「どうか…」

「村の近くにある『忌み地』を、『浄化』していただきたいのです

村人達は言葉をつなげるよう手を合わせながら順番に口にした。まるで伝言ゲームだ。いや違うか。あれは同じ言葉を伝えていく、最後まで同じかどうかというヤツだった。

それにしても『忌み地』？ また新しい単語が出てきた。首を傾げてると、横にいたレーレンが小声で説明してくれる。

「『忌み地』つてのは、魔族によつて穢れてしまつた土地のことだよ」

「魔族によつて？」

「うん。魔族によつてたくさん的人が殺された、とか、逆に魔族を追い詰め殺せたのはいいけど、その魔族の瘴気によつて穢れてしまつた場合の一種類かな」

レーレンの説明では、そんな事件のあつた土地だと、草木も生えてこなくなつて人からも敬遠されるような場所になるそうだ。

ちなみに前者だと殺された人たちの無念がもとで、後者の場合は、きちんと瘴気が浄化されないために、残つた瘴気が凝つてできるのだという。しかも、瘴気のせいでも魔族が集まりやすい地になつてしまつという一撃。各地に点在している魔族は、こういつた地を拠点にしている。

どちらにしろ『忌み地』になつてしまつと、巫女などを呼んで浄化してもらわないと無理だという。そのため魔族討伐の仕事につく人には、たいてい他のアイテムと一緒にクリスタルが支給されるらしいが、この土地はそのときこきちんと浄化されなかつたらしい。

「そうですか、しかし、私は現在、魔王討伐の任に就いています。

他のものを派遣するより、神殿に連絡しましょ」

「そんな、今すぐお願ひします！」

「先を急ぐのです。こうしたところをなくすためにも、ハヤト様に

早く魔王の居城まで行つていただくのが最優先です

毅然とした態度で自分の意見を貫ぐディリアさん。

でも、村人達は今すぐにでも何とかしてほしいと粘る。そりやそうだろう。レーレンの話のとおりなら、もたもたしてると新しい魔族が来てしまう。

魔王を討つことも大事だけど、身近なこいつたことを放つておいていいものなの？ ディリアさんは魔王討伐しか頭にないようだけ……さて、いつもの嫌味を再開してみますか。

「ディリアさん、本当は自信ないんだ？」

「なっ！？」

私の独り言のような台詞に、ディリアさんはすぐさま振り向く。
そして。

「自信があるとかないとかの問題ではありません。私たちにはするべきことがあって、そしてそのために足止めされては困ると言つているのです！」

「じゃあ魔族に襲われている人がいても、魔王じゃないからって無視して行っちゃうんだ。いやーすごい英断だわ」「

と笑いながら返すと、ディリアさんは真っ赤になった。

そして案の定、「そんなことありません！ それくらい簡単です！」と意気込んで、村人に『忌み地』の場所を聞き始めた。

ふふん、口だけでなくその力を見せてみろつての、とぼやくと、隣にいたレーレンが笑いをかみ殺すのを口元を押された。

「なによ？」

「いや…人を動かすのが上手いな、と思つて

笑いを抑えながら、レーレンは小声で答える。それに対して私も小声で返した。

「神殿に伝令出して出直すより、最高位の巫女の『ティリアさん』がしたほうが、被害が少ないとthoughtただけだけど？」

「まあそうだけど……『忌み地』になってしまった土地を浄化するのはすごく大変なことなんだよ」

「そのための巫女でしょ。最高位の」

使えるものはなんでも使わなきや、と言つて、レーレンはふき出した。

その間に、ティリアさんは村人達から詳細を聞いたのか、私のほうを振り返つて。

「場所は聞きました。すぐに行つて浄化します。カリンさんも浄化とこうのをじり覽になつたほうが、どんなものか理解できるでしょう」

それは私にも来いつて言つことかしらね。しかもこの場合、『忌み地』の浄化を見せるんじやなくて、自分の力を見ろ、つて意味で。断る理由もないし、血漫するその力を見てみたくなつて頷いた。

そして、ティリアさんと私の二人で『忌み地』に向かうことになつた。

14 「忌み地」（後書き）

嫌味またもや復活。

次回は2人きりの初イベント。

……つて、たまにはと思って恋愛フラグっぽいのを立ててみたけど、主人公の中ではへし折つてそうだ；

『忌み地』まで『ティリアさんと一人きりの間、とてもなく冷えた霧囲気の中、嫌味の応酬をしながら歩いた。

救いだつたのは『忌み地』が近かつたことだろうか。しばらくすると瘴気が濃くなつていいくのが分かり、『忌み地』に近いのが肌で感じる。

「カリーンさんは『忌み地』といつのを」存知ないと思いますが」「ええ、元の世界では魔族自体がいませんでしたから」

『忌み地』なんて初めて聞いたんで。でも、じうじう場所は知ってる といふことまでは答えなかつた。元の世界でも心靈スポットとかになっている場所に近い。

いや、それよりも酷い。まだそこへ行き着いてもいのに、体に纏わりつく瘴気はねつとりとした嫌な霧囲気で気持ち悪くなる。こんなところに長居したら、それこそおかしくなりそうな、そんな感じ。

「『忌み地』はその言葉通りのところです。忌むべき土地。穢れた地です」

「先ほどローンに聞きました。どうしてそつなのかも。なので、一刻も早く浄化をしたほうがいいと思つたなんですが?」

だからどうした、といった顔でティリアさんを見た。
ティリアさんが言いたいことは知つてゐる。それでも早くしたほうがいいと思つたから急かした。

「……『忌み地』の浄化は、神殿にいる神官や巫女数人で行つもの

です」

『忌み地』の浄化はそれだけ大変なのだと何度もいつディリアさんに、私はそつてなく答える。

「だから？ ディリアさんはこの国で最高位の巫女なんですよ。だったら数人分の仕事をしたっておかしくないと思うけど？」

「ええ、確かにそうですが村人にも言いました。最優先は魔王討伐です。こんなことで足止めされていたら困ることくらい、カリンさんだつて分かりますよね？」

「さあ？ 私は見えない魔王より、ここに漂う瘴気のほうに寒気を感じますが？」

私が瘴気を感じているのが少し意外だったという表情を一瞬するが、すぐに元に戻る。

「魔族から発せられる瘴気は、確かに人の心を蝕みます。でも、その源は魔王なんです。カリンさんは目の前の人のせいでの、だいぶ視野が狭くなっていますね。私には目の前にいる人を放つて先に進む

「そうかもしれませんね。私には目の前にいる人を放つて先に進むほど、大きな目的には思えないですから。ディリアさんはなんのための魔王討伐だと思ってるんですか？ こういう人たちをなくしたいからじゃないんですか？」

「それは……」と言いよどむディリアさんに横槍を入れられないように矢継ぎ早に話を続ける。

「魔王を討てたとしても、その間に人がいなくなれば意味ないです。それに魔王を討つことばかりに気をとられ、勇者は誰も助けてくれなかつた」と言われるほうが問題じゃあ、ないんですか？」

あなたの国としては とにかく力を発せながら、冷めた目で
ディリアさんを見る。

「ああ、あと、ここで言い訳してやめるようなら、『ディリアさんの巫女としての格はそんなもんだと思いますから。まあ、誰にも言つつもりはないから、私が思つだけですけど』

私はディリアさんのプライドをチクチクと刺激して、「やる」としかいえないと持つてこいつてこいつ。言葉尻を取つて、ひっくり返して反論の道を封じた。

冷静なときなら、他に反撃の余地もあつただけ。でも、『忌み地』が近く、瘴気が濃い。冷静な判断などできるわけがなかつた。ディリアさんは唇をかみ締めて怒りを我慢している。しばらくしてディリアさんは顔を上げて。

「この辺でいいでしょう。カリンちゃんは巻き込まれないよう、そこから動かないでください」

その声は怒りで震えていた。それでも、逃げることはず、向かい合つ気になつたのは認めよう。おとなしく指示に従つて、その場に立ち止まつた。

ディリアさんは私から離れて瘴気の濃い部分へと向かう。そしてクリスタルを取り出して、それを両手に持つて目を瞑つた。クリスタルが淡く光りだすのを見て、ディリアさんが力を使い始めたのが分かる。

でも……

「あの力じゃ、無理そつ……」

「ディリアさんの力は弱い。ディリアさんだけではこの地を浄化するには無理だわ。」

「それにしても、最高位と呼ばれるのがこれじゃあ……ね。そう思わない? リート」
“ほんとだねー”
“だつて、しかたないよ”
“そうそう”
“いかいのかべを、こえてきたひとには、かなわない”
「あー、そんなものもあつたねえ」

世界と世界の間には簡単に行き来できないように壁といつか断層とこづかそういったものがあるところ。

そして不幸なことに、この国にある呪喚陣は、とにかく強いものを呼び出すという無謀な陣で、その陣の対象は近くの世界に入る。そうして呼ばれた人は世界の壁を越えてたどり着く。呼ばれて気づくところからに來るけど、実際は世界と世界の間の壁を乗り越えるという荒業をしてくるので、そこで一気に力がつくといつ。

だから、勇者として呼ばれた蒼井くんも力の使い方をきちんと覚えれば、ヴァイスさんなんて目じやないほど強くなれるはずなんだよね。今の蒼井くんは反射的に力を使つていても、意図して使つていいない。自分の意思で力を使えれば、格段に強くなる。

まあ、異界の壁越えの話はたぶん知らないはずだから、私も自分から口にしないけど。情報の出所を探られたら、私もいろいろヤバイんです、つてレベルのモノだから。

「うーん…、ねえ、リート。瘴気って、火で焼くことはできないの?
“なんで”
“どうして”

「あー私の世界では浄化っていうか、そういうた類のは、火とか塩を使うのがあつたから。クリスタル通して力で浄化するより、焼いちゃつたほうが早いんじゃない？」

『火で浄化できないものはない』っての、本か何かで見たことがあるんだけどな。できるならそっちのほうが楽だし。

“うーん… それはやつたことがない、かも？”

“わたしたちのように、いしをもつて、ひのせいれいが、ちからをかしたら、べつ、かも？”

「疑問系なんだ」

まあ、精霊を見える人自体がいなかつたんだから、直接精霊に話をして「瘴氣を焼いてみてください」なんてのはなかつたんだろうな。

……試してみよつか？

そう思つてゐる間に、ディーリアさんの力が飞きたのか、びたりと倒れる。

ああ、やつぱり無理だつたか。さて、このまま火の精霊に「試してみて」とお願いした場合、ディーリアさんも巻き添えになるのかな。さすがにそこまではしちゃうのはマズイか。

仕方なく、まずはディーリアさんを安全な場所まで移動することに決めた。

“わたしたちが、やろうか？”

“てつだうよ”

「できるの？」

“かりんが、なまえをつけてくれたから”

「は？」

あれ、主従関係はないって言つてなかつた？
ヤバイぞ、どんどん道を踏み外している氣がするーー！？

“ちがう、ちがう”

“まぞくとの、しゅじゅうかんけいじやないよ”

リートたちはぐくす笑つて説明してくれた。
要するに、私が精靈に名前をつけたことによつて、主従じやない
けど繋がつたといつ。精神的にリンクしているといつ感じか。
たとえば魔族の地で精靈が入れないようなとこりでも、私がリー
トたちの名を呼べば、私を通してそこに移動して、私の力で存在で
きるといつ。

“よほど、つよいからがなれば、むりだけどねー”

“でも、かりんは、つよいから”

「あ、そつ…」

話戻して、私の力を使うけど、私自身が意識して使うんじやなく、
精靈たちに力を預けて勝手にやつてくれるといつ。そうすれば一度
にいろんな力を使えるけど、自分で制御するわけじゃないから、い
きなり倒れることもありそうだ。

といつても、とりあえずそういうのができるのは、風の精靈リー
トと、土の精靈エルテのみ。残りの精靈たちとも話をして、名前を
つけて気に入られなければはじまらない。

「まあ、とりあえず……できるならお願ひ

“りょうかい”

“まかせて”

嬉しそうに了承すると、ディリアさんの体が宙に浮く。

うわーこんなこともできちゃうんだ、と感心しながらも、私はディリアさんから田を離してレーレンにもらつた火打ち石を取り出した。

ライターとか便利なものがないので、火をおこすにはこれを使うしかない。最初はなれなくて何度も力チカチやつていたけど、コツを掴むとすぐに火をつけることができるようになった。

それを使って、近くにあつた枯れた草に力チカチとやって火をつける。

じつと見ると、眩しい火の中で小さな赤い小人みたいたいのが踊っているのが見えた。

15 淨化（後書き）

異世界の人と召喚された人の力の違いをちょこっと。
情報の出所はまだ内緒で。

「えーと、とりあえず……こんにちは？」

最初に挨拶は基本でしょう、ってことで挨拶する。それにしても眩しい。サングラスほしい。早めに話をつけよう。

“これって、わたしたち、に？”

“ちがうんじゃない？”

声をかけるといつせいにこっちを見て、それから勝手に結論付けられた。決め付けるの早いよーっ！

「待つて待つて、キミたちに話してるからっ！」

そりゃ話しかける人がいなかつたみたいだけど、火に向かって話しかける人はいないから　とツツ「キミを入れたい。

でも眩しくて目がおかしくなりそう……と、思った瞬間、闇をサングラスみたいに使えばいいんだと気づく。日食を見るときみたいに、薄くて黒い半透明のプラスチックみたいなのを想像すると、火の精靈を見るのに眩しくなくなつた。

「えっと、火の精靈で、いいんだよね？」

“うん”

“みえる？”

「見えるよ。手伝つてもらいたいことがあって話しかけたんだけど

……いいかな？」

“できることなら”

「ありがとう」

見てすぐに手伝つてといったのに、火の精靈は素直に頷いてくれた。

風と土の精靈たちはかなり友好的だつたけど、性格を考えると、火の精靈と難しそうな気がしたけど、それでもなかつた。おかげで長々と説明をしなくて済んだことには感謝。

とりあえずこの瘴気だけを焼いて消すことはできないかと尋ねてみると、火の精靈たちは少し考え込んでから、“むり”と答えられてしまつた。

“ここまでなると、わたしたちだけじゃ、むり”

“ほかのものまで、やいちゃうよ”

“まぞくだけなら、なんとかなるけど”

“ごめんね”

「そつか。じゃあやつぱりクリスタルを使って浄化するしかないのかな？」

『忌み地』を火で浄化するとなると、全てを焼き尽くすことになつてしまつ。そこに漂う瘴気を含んだ大氣も、土地も、生えている草木もすべて。

さすがに無謀な策だつたか。クリスタルに代わる浄化方法がないかなと思つたんだけど。

あ、でも。

「魔族とかなりできるの？」

“うん”

“それなら”

「じゃあ、力を貸してほしいとき、貸してくれる？」

火の精靈は「うひをじつと見た後、“いいよ”と了承してくれた。

それから呼びやすこうつに名前をつける。

「で、呼ぶとき困るから……グリューハンって呼んでいい？」

“いいよ”

“うん”

「うちは快諾。よく分からぬ反応。

とりあえずこれで火の精靈の力も借りれることになつたので、力の幅が広がりやう。やっぱり攻撃的なものは火を連想するからかな？」

「じゃあ、これからよろしく」

握手はできないので、手を振つてさよならした。

「さて、んじやあ浄化を始めますか」

気合を入れ直して、制服の内ポケットから元の世界ではなくお守りとして売つている水晶のブレスレットを取り出した。

靈感なんてものがあつたせいで、身を守るために元の世界から持つていたブレスレットは、うちでもらつたクリスタルより自分に馴染んでいる。

それを手に持つて前にかざし、この地が草木が生えてどこにでもある心和む森をイメージした。そうして目を閉じてしばらぐの間、イメージし続ける。

肌にピリピリとくる瘴氣がなくなつたのを感じると、ゆっくりと目を開けた。

目の前には瘴氣のなくなつた大地と、そしてそんな大地から芽吹いた小さな草の芽がちらほらと見える。

「エルデ、来て」

地の精霊がいなくなると、『忌み地』ではないけど、土地は荒れていいくといったので、ダメもとで呼んでみた。口々口々とした地の精霊が現れる。

「エルデをお願いしてもいい?」

現れた数人に頼むと、彼らはゆっくり頷いた。
これで少しずつでもこの地は回復していくかな、と思いつつ、やつと一息つけた。

隣で横たわっているディリアさんに手をやってから、まだ起きそうにないと判断した。彼女の場合、治療の力は効かない。本人の力の回復が必要だから。

いつになつたら目覚めるまで回復するだらうか、と思つているとリートたちが教えてくれる。

“かりんがさわっていればいいよ”

「は?」

“さわることによって、こじこじして、すこしなら、ちからのことうができる”

「なるほど」

ディリアさんが起きてくれなければみんなのところには戻れないもんね。

そつとディリアさんの手に自分の手を重ねる。これで力の移動ができるのか分からぬけど、私からディリアさん何かを渡すイメージをする。一緒に、ディリアさんに纏わりつく瘴気の浄化も行った。ふわふわとしたピンク色の髪にきれいな顔立ちは、元の世界ではアニメのヒロインでできそうな感じ。意識のない今は見下したよ

うな視線はなく、素直にきれいだと思つ。

「……はー、駄目だなあ」

“なにが”

“どうしたの？”

リートたちが独り言を聞いて好奇心丸出して尋ねてくる。
それに対して、「ちょっとね」と笑つて誤魔化した。

「それにしても、『忌み地』ひとつでこれかあ。この先大変そう」

旅に出で一田田で『忌み地』。今回はディリアさんの力が必要とされていて、蒼井くんの出番じやなかつた。瘴氣相手じや勇者は必要ない。

……ん？ なんか…嫌な予感がする。

「ねえ、リート。今回の魔王ってどんなのが分かる？」

魔族の地にいけないのは分かつてゐる。それでも多少なりとも情報がないだろうか、ともう一度尋ねた。

“まあうは、よく、わからないけど…”

“かりんたちがでてから、こうじつたひがい、おおくなつた”

“いままでは、ほかのばしょばかり、だつたのに”

「じゃあ、今まであまり危機感なかつたけど、勇者召喚で身の危険を感じたから、勇者の行く手を阻もうってことかな？」

“わからない、けど…”

“あたらしい、まあうは、いつせんてき、つて。にげてきた、つち

のせいいれいがいつてる”

“わたしたちのなかも、おなじようなこと、いつてた”

「好戦的？ ちょっと待つて」

リートたちの話を整理するために、情報を一時ストップさせる。
今まで被害はこの国よりも他の国の点在しているところのほうが
被害が強かつた。

あと、これは以前にリートたちから聞いていた話だけど、そのせいでこの国は勇者召喚を出し渋つていたらしい。この世界にいる人よりも強いものを呼べる召喚陣は、この国にとつて外交上、大事な切り札だから。

でも業を煮やしたほかの国が、同じような召喚陣を作り始めたと聞いて、慌てて勇者召喚をしたという。他の国に、同じような召喚陣があつたら、この国に残るのは魔族の拠点に一番近いという不利な点だけだ。

そんな思惑の結果、蒼井くんはじめ数人が呼ばれたんだけど、それからこの国の城から魔族の地までの間に被害が急に増大した。
しかも瘴気は城の内部の人まで蝕んで、皆冷静な判断ができないよう、少しずつ狂い始めている。

あまりにも早く、今回のように、すでに魔族はいなくなり『忌み地』が残っているところがいくつかあるみたい、とリートたちが呟くのが聞こえた。

……つて、この状況、本当にやばくない？

この地を浄化するだけでディリアさんは倒れちゃうし、浄化はできなままだつたし。

なにより、こんなのが続いたら、ディリアさんの力の消耗だけで、蒼井くんの経験値が上がらない。蒼井くんをはじめとするこの勇者一行は、まだ完成された強さを持つていない。

そんなところ、魔王が現れたら……？

「ディリアさん、起きてー、早く起きてー！」

「まだ目覚めないディリアさんの体をゆすって無理やり起きる。少々く「ん……」と声が聞こえて、目覚め始めているのを気づく。ついに搖さぶつて無理やり起こした。

「ディリアさん…」

「あ……カリン、さん…？」

まだちよつと焦点が合わない目で私を見る。

「ううむ…」

「村の人と言われた『忌み地』のことです」

「そういえば、浄化しようとして……」

意識がはつきりしてきたのか、ディリアさんは頭を押さえながら起き上がる、周囲を見回した。

「うん……」

周囲の光景に信じられないよう、目を大きく見開いた。

そういえば、最初に芽吹いた草は、今はかなり成長してる。やつぱりエルテがいるといないじや、差が出るのかな、と思つてみると。

「これは……私が……いえ、ちがいますね。…………カリンさん、あなた……ですか？」

状況把握は早いのか、『ディリアさんは自分がやつたという考えをすぐに捨てた。

そのため私も隠すことなく、「ええ」と短く答えた。

「どうやつたらこなことが……？」

「まあ、ずっと身につけていたこれと自分の力で」

と、水晶のブレスレットを見せた。

ついでに「浄化は一番得意ですから」と付け足すと、ディリアさんの目がまた大きくなった。

「それより、ディリアさんにお願いがあります

「な、なんですか？」

隠しておきたかった自分の力。

でも今はそんなことを言っている場合じゃない。

私は、誰一人欠けることなく、元の世界に戻りたい。

そのためには、魔王のところへたどり着くまでに、みんなが強くならなければならない。

「これから先『忌み地』の浄化は引き受けます。だから、それ以外にも魔族の被害などを聞いたら、それを受けてほしいんです」

『『忌み地』の浄化を引き受けるといふのと、魔族の被害を聞いたらその願いをすべて受けてほしいと言われて、ディリアさんはとまどつているようだった。

「カリンさん、あなたはいつたい……？」

「私は、元の世界で幽霊 こっちで言うと死靈といったほうが分かりやすいですかね。それを見ることができました。身を守るため

に、こちらで言う『浄化』の力も強くなつたんですね

これだけ見れば、どちらかというと私は剣を扱うより、巫女としてのほうが合つているだろう。

けど、手渡されたのは剣だった。私の力の確認もなく。

「カリンさんはことは分かりました。でも、ならどうしてそういう願いを聞き入れると言うのですか？ 瘡気が見えるのなら、この状況がまずいことは分かりますよね？」

ディリアさんの問いは、私の力を認めた上で質問だつた。私も話すと決めた以上、自分の力を出し惜しみする気はない。だから、自分が思つてることを素直に口にした。

「確かに瘴気は人を蝕みます。でも、このまま進んでも、それでは魔王のところへ向かうだけで、蒼井くんたちは強くならないから」

篠原さんと堤さんはイメージして力を使うことを覚え始めている。このままでいけば、どんどん力に慣れていいくだろう。

でも、蒼井くんと大野くんは、ヴァイスさんに剣の手ほどきを得ているだけで、力の使い方まで習つてない。だから、剣の腕は上がつても、それを最大限にするための力をほとんど使えていないといつてい。

でも実戦を経験すれば、おのずと必要になつてくる。死にたくないと思えば、それだけでも力が増す。

その説明をすると、ディリアさんは大きく目を見開いていた。

「カリンさん、あなたはいつたい……」

「いつたいもなにも、勇者召喚に巻き込まれた一人ですけど」

他に何がありますか？と軽く問うが、ディリアさんはまじめな表情で。

「それは……違うと思います。どうして今まで気づかなかつたか不思議ですが、最初に呼び出された時点で、あなた一人だけ信じられないほど冷静でした。今も、数人で行う浄化を一人でこなし、先のことまで考える余裕　あなたは、いったい何者なんですか？」

瘴気を取り払つたせいか、物事をしつかり考えられるようになつたのだろうか。

ディリアさんは今までのことを分析しながら、真剣な表情で私に尋ねた。

16 新たな魔王（後書き）

タイトルがバラバラでんがなーと思いつつ：

17 花梨とトーリアの問答

参ったな、といつのが第一感想。

最初の頃の「ディリアさん、どうやらあの時から瘴気にやられていたらしく、きれいに取り扱った後は、落ち着いて状況を分析できるようになっていた。

おかげで突っ込まれてます、やっぱこです、ってなほど。

「えっと、実は元の世界でも知る人ぞ知る賢者だつたり」「嘘ですね」

「……どうして即答ですか？」

「今まで隠していたくらいですから、簡単にばらすわけがありません」

「あー… そうですね」

本当に冷静になつちやつたんですね、ディリアさん。思わず心中まで敬語で話してしまつわ。

これが駄目なら。

「さっき言つたように、私は靈退治のエキスパートで……」

「言葉の意味が分からぬところがありますが、他の方たちとじり学友といふことから、恐らくそれも嘘かと」

「いえいえ、副業みたいなものでして。実は数ヶ月休んでいたのも、依頼で手ごわい靈を相手にしていたからで」

「どこまで話を膨らませるつもりですか？」

……てつ、手ごわい。いつもがあれこれそれらしいことを語つていふのに、ディリアさんの口はぜんぜん信じてない。

うーん、いつそ別の手でいってみるか。

「実は、新たな魔王だつたり」

「え?」

「召喚時に紛れ込んで、ちよちよこのちよいで、みんなの記憶操作をして」

「まさか……だったら、どうして勇者を強くするためになどといふんです?」

魔王といつ言葉に驚いたのか、今度は少し氣になつて尋ねてくる。とつあえず話を逸らしたいので、それに乗つて種明かしをするかのように話し始める。

「だつて、せつかく来てくれるのに、弱かつたらつまらないじやない。もつと経験つんで強くなつてくれなきや、つぶす楽しみがないんだけど?」

まあ、途中でやられたらそれまでだけじね と笑みを浮かべながら付け足すと、ティリアさんは眉を顰めた。

警戒し始めた様子に信じ込んだかな、と思つているとしばらくして。

「それも、嘘……ですね?」

「どうしてそう思うんです?」

「下級の魔族といえど瘴気を纏います。なのに、カリンさんにはそれがない。それどころか瘴気の浄化まで行う それは、魔族でなく、神に属する側の力です」

いや、神に属するなんて、そんなすごいものではないですよ、と心中で否定する。

でもすでに勇者召喚に巻き込まれたその他一気に吸まらなくなつ

てこるよつで やりすぎたなあ、といまさらながらに後悔した。
はーつと深いため息をはいたあと、軽い口調に戻して。

「んじゅあ、実は真の勇者は蒼井くんじゅなくて自分だ、とか？」
「……先ほどのことを見るとそう言えなくもありませんが……それは力のみの話です。他にも納得のいかない点がいくつかあるんですね」

が

「う…、冷静すきるよつ、ディリアさん！」
もつもつ面倒くわくなつてきた。いざれどいかでばれそつだしな……
もつ、自分がうらばりしてしまおつか。

「なら、勇者は勇者でも、一百年前に召喚された初代の勇者」「それも嘘……ええつ！？」

あ、スルーしてくれなかつた。
これもさつくり嘘だと否定してくれればいいのに。

「まさか……」

「あれ、嘘だと否定しないんですか？」

「いえ、だつて……一百年前の勇者はこづ茶色の髪と瞳、まだ子どもといえる年齢、そして名前はリン、と。カリンさんの名前に似て……、でも、一百年前の話で……」

やばい、そこまで知つてたのか。

書庫で見た本にも詳しいことはあまり載つてなかつたのに。さすがに最高位の巫女の情報を侮つてはいけなかつた。

あーもつ、仕方ない。ティリアさんには話せるといつまで話せつ。諦めは早いほうなんだ。

「……世界と元の世界では時間の流れが大幅に違うよつですね」

「え？」

本当にそうだと思わなかつたのか、ディリアさんは驚いた表情になつた。

私が最初呼ばれたのは、中学卒業してまもなくだつた。そして、ここで『勇者』をやらされ、今の道のりを一年近い時間をかけて魔王の居城にたどり着き、そして封印した。そのあと、自力で元の世界に戻つたけど、戻つた時点で数時間の誤差しかなかつた。

「そして、約半年後、蒼井くんを初めとしてまたここに来たのが、その一百年後つことですね」

と、指を一本立てて説明する。半分諦め、半分ヤケで。でもディリアさんは私の話を真剣に、だけど興味深げに聞いている。

「では、どうやつて戻つたのですか？ 勇者は亡くなり、城に帰還したという話は聞いていません」

「はあ、まあ……戻つたら厄介そんなん、自力で召喚陣を作り上げてですねー、んで、帰還と同時に召喚陣つぶすように設定して、証拠隠滅 つてわけです」

あの頃は、今ほど穿つた考え方をしてなかつたけど、一年かけてたどり着いた道のりをまた戻つて、あれこれ説明する氣になれなかつた。

早く戻りたい、その気持ちだけで。

今なら、戻つたら歓迎だのお祝いだと称しながらなるべく引き止め、勇者を外交手段に使うんだろうな、と想像してしまつ。リー

トたちから勇者召喚の話の裏話を聞いているからなおさら」。ディリアさんもその辺りを察したのか、表情は暗くなる。

「まあ戻つたら戻つたで、怪我の治療やらなにやらで、三分の一は療養だつたんですけど」

元の世界ではこれほどの力は使えないから。ただ、幽霊が見える、靈感があるというだけで終わってしまう。攻撃する力も、傷を癒す力もここのように使えない。

「前のことがあるから……黙っていたんですか？」

「まあ……、ああそれと、最初はこの世界が前に呼び出された世界と同じかどうか決めかねてたので」

一百年前　あの時、瘴気はあたりに漂つていて、精霊たちはほとんどどこに国には存在しないほど荒れていた。國中が『忌み地』といつていよいよほどに。そんな中を魔王のところまで行くのだから、今より魔族との対面は多いし、やりあう数も多かつた。

なにより一番の違いは、その人に属性があつて、その属性のアイテムを使ってその属性しか力を使わないということだ。

一百年前は、そんなものは関係なく想像するままにいろんな力を使っていたから。アイテムはあっても、そんな風に力の使える範囲を自分から狭めたりしなかつた。

私の属性が分からぬ　となつたのは、たぶんその辺りからだろう。一百年前は他の人も、いろいろな属性を普通のように使つたから。

「それは、初めて聞く話です」

「どうでどうなつたか分からぬけどね。でも……」

と、途中でいつのをやめて、横に置いておいた剣を取り上げた。

「『J』の剣が、属性が分からなくて使えるよつこ、やうやつてみんな、アイテムを使っていろんな力を使っていたんですね」

剣 アインスを抱きしめるよつこして当時を思い出しながら語る。

そう、この剣は以前私が使っていたものだった。当時、刀鍛冶としての腕は並ぶものがいないといわれたショタールが、心血注いで私に合つたように作り上げた一振りだった。

剣を知らない私でも戦えるようにと。でも力を極力押さえるために、闇雲にきるだけじゃなく、臨機応変できるような機能もある。見た目が変わりすぎてたんで、すぐに気づかなかつたけど。危険だと思つて抜かなかつたし。

そんな感じで、昔は前からあるアイテムなら、その人に合つたよう力スタッフライズして使うか、または最初からその人に合つよう作るかして、属性がどうのといった制限はなかつた。

この辺りが、似てゐるけど違つ世界かも？ と思つて因だつたと説明した。

「そもそも、ディリアさんの『浄化』とか、篠原さんの『癒し』はどこにも属さないものですよね？」

「ええ、確かに」

「それに勇者は蒼井くんになつていたし、私は属性が分からぬからおまけ程度に見られていたから、それなら適当にしてようと思つたんですね。下手に口を出せば『どんなん情報を？ なんて言わわかねなかつたんで』

おまけに見られて『どう』と云つたと、ディリアさんは「そ

れについては済みませんでした」と謝った。

それから前の話に戻つて、蒼井くんたちを強くするために、魔族退治はなるべく引き受けることにしてもらつた。魔王のところにたどり着くのが遅くなつても、強くなつてからでなければ、魔王と一戦交えるのに必要な力が身につかないから。

「今回の浄化の件はどうしてもつかつか？」

「うーん…、ディリアさんが主で私が手伝つたぐらうにしてほしいです。私が表に出るとなると、昔のことまで話さなくなるから」

それに、ディリアさんは瘴気によられていた分、百パーセントの力がでなかつた。今ならさつきより力を出せるはず。あと属性が分からなくなつてゐる私に、浄化ができるか試してみたことにすればいい。

「いいんですか？」
の手柄ですのに」
「」」」をこれまでに綺麗にしたのは、あなた

「別にいいです。私は、誰一人欠けることなく、元の世界に戻りました」

仲がよくなくとも、数ヶ月一緒に教室に一緒にいて、それなりに会話をしたことのある人たちだったから。相沢花梨個人に対して話しかけてくれる人たちだったから。

だから、自分ひとりで還れると思つても、還る氣にはなれなかつ。

17 花梨ヒトヤリ亞の問答（後書き）

とつあえず正体ばりしたところで一段落。

18 初、魔族退治（前書き）

登場人物が簡単すぎて必要ないと思ったので、編集しなおして18話に。

今回魔族退治なので、ちょっとそういうたシーンが入ります。

みんなのところに戻つて、ディリアさんが淨化が終えたことを報告した。

ディリアさんは自分の手柄にするのが気になつたのか、私が手伝つたからできたのだと言つた。そのせいで周りに奇妙な目で見られる。

レーレンだけが、力のことを知つていたので納得した顔だつたけど。

村の人からはものす「」にお礼の言葉と、そして遅くなつたので村の宿に無料で泊らせて貰うことになった。

ディリアさんが目覚めるまでだいぶ時間がかかつて、そのあと話をしたからみんなのところに戻つたのは夕方近かつた。ディリアさんの力が回復しないのと、この先泊れるようなところがないということで、村の人たちの好意を受けたのだった。

そして夜はベッドの上でゆっくり休んで、次の日を迎えた。

なるべく何事もなかつたかのように、ディリアさんともほとんど話をしなかつた。他の人に対しても同じだつた。

レーレンだけが別で、普通に話しかけてくる。昨日のことも特に詮索することもなく、他愛無い世間話と、そして元の世界でこちらにとつて商売になりそうなものがないかという、隙あらば美味しいところを持っていきたいという感じが見え隠れしていた。

まあ、別に向こうの世界の特秘事項など持つていらないからいいや」とことじで、こんな話をした。

そんな時、今度は魔族の襲撃があつた。

遠くで悲鳴が聞こえたのに気づいて、慌てて蒼井くん、大野くん、ヴァイスさんの四人で向かう。もし馬車のほうに襲撃があつても、防御くらいはできるということで、護衛に誰かを残すことはなかつた。

行つてみると、襲われている人たちは商人たちだったのか、大きな荷馬車から出て逃げようとしていた。護衛の人たちは魔族と奮闘しているも、あまり芳しくない。荷物より人命を（というか、魔族は人の荷物に興味がない）優先ということで、先にたつて逃げる商人の後ろを守りつつ後退している状態だつた。

魔族はといふと、一言で表すなら獣人。といつても、茶色い長毛に覆われた体には服など身につけていないし、武器もない。ただ、その鋭い牙と爪のみで人を襲つていた。

大型犬でも十分怖いのに、一足歩行で理性のない獸に襲われたら堪つたものじゃない。ヴァイスさんは半ば錯乱している商人の人を後ろに追いやり、蒼井くん、大野くん、あと私は今戦っている護衛の人の援護に入つた。

「大丈夫か！？」

切り裂いた場所から魔族の血 少し透明で、黄色といつかオレンジというか色 が噴き出す。人の赤い血とは違う。

けど、魔族の叫び声と飛び散る血を見て、ほんの少し動搖の表情を見せた。稽古だと実際に傷つけるまでしないし、こんな悲鳴を聞いたのは初めてだろう。魔族といえ、動物を傷つけたという罪悪感からか……。

それは自分にも、見に覚えがある感覺だつた。深く息を吸い込み、余計なことを考えないようにする。そして剣を抜き放ち

「行くよ、アインス」

剣の名を呼ぶと同時に、近くにいた魔族に切りかかった。細身の剣は“断つ”というより“斬る”ほうがあつて。けど、この剣は硬度もあるから“断つ”こともできる。腕力は力を使って補つて。剣に自分を委ねて、力の解放だけを意識すると、剣は私にあつた速度と力で敵 魔族を斬る。

一匹片付けている間に、蒼井くんは立ち直ったのか次の魔族に立ち向かっていた。

大野くんといえば、剣に慣れていないこともあつて苦戦している。魔族の爪が横から伸びて大野くんの脇を狙おうとしたのを見て、きびすを返してその魔族を斬りつけ、こちらへと意識を向けさせた。

この剣のこいつこりは変わらない。“敵を斬る剣”なのに、必ず私の意志のほうを優先してくれる。最初の説明では物騒な剣と思つてしまつたけど、剣の名を呼んだ時点で、剣はすんなり私の意志を尊重するようになった。やっぱり私用に作ったものだからだろうか。

戦闘には必要のないことなのにあれこれ考えてしまつのは、私も、魔族といえど、生き物を殺しているという事実から目を逸らしたいからなのかもしれない。

剣で切り裂いたときの感触、断末魔の悲鳴は、何度聞いても慣れるものではない。また、慣れたくもない。

なんだかんといいながらも、ある程度の時間で魔族はすべて片付いた。

とはいっても、魔族といつても赤い血と、残る亡骸を見ると、なんともいえない気持ちになるが。

蒼井くんと大野くんもそう思ったのか、怪我もなく魔族を屠れた安堵より、罪悪感とも後悔とも取れるような表情をしていました。そんなところに、助けてもらつた商人は。

「いやー助かりました、ありがとうございます!」

と、にこやかな笑みとともに明るい声で礼を言つた。

そのお礼に少しばかり心が軽くなつたのか、蒼井くんが「……いえ、間に合つて何よりです」と答えた。こういつたときはお礼を言われたほうが心が軽くなるものね。一人はさつきより表情がよくなつて、やつと人を救つたというのを感じはじめたようだつた。

初めて魔族と戦つたことで、ほんの少しだけど前進した気がした。

その後は残つた魔族の骸の処理と、浄化が必要になる。

けど、浄化しているところを見られたくないんだけど……ディリアさんに任してしまつてもいいだらうか。前回の『忌み地』ほど範囲は広くないし、瘴氣も少ないし。

などと思つていると、ディリアさんは助けた商人たちをはじめ、蒼井くんたちも田に見えない程度の距離まで遠ざけた。

「デ、ディリアさん?」

「これならカリンさんも遠慮する必要がないでしょ? 今後このような形でやっていきたいと思つています」

「えと……本気ですか、ディリアさん?」

これじゃあ、前線で戦うのと浄化の一いつの作業を「なすことにならんですが……私一人だけ超過勤務ですか!?

「カリンさんの力はとても便利ですもの。知ったからには存分に働いてもらいます。それに、カリンさんがもう少し協力的でしたら、みんなとの連携だってもう少し楽になりますのに」

マイナスの分を帳消しにするよう、頑張つてくださいね、と笑みとともに言われて、私は口元を引きつらせた。

どうやらディリアさんは使えるものは何でも使う主義らしい。話す人を間違つた、と思ったのは仕方ない。とはいえ、後悔先に立たずで、いまさらどうにも……ん、いつそ殴つて記憶消去とか、などと物騒なことを考えていると、ディリアさんに。

「カリンさんは思つたより表情が出る方だつたんですね。今なにを考えているか分かるような気がします。これからは背後には気をつけることにしますね」

と、せりりと言ひやがりました。
この巫女さん、瘴気がなくなつたら別人じゃん！　つてなほど頭が回るようになつて厄介だつたらありやしない。

でも、最初からなにコイツ！？　と思うような態度と口調で大嫌いだと思ったのに、今はその気持ちも薄れて、少々嫌味を含んでいるものの、相手を認めての会話になつてている。

あ、そっか。私はディリアさんが嫌いだつたんじゃなくて、前のディリアさんのように上にいて自分より下だと思う人を見下していた人だつたんだ。でも今のディリアさんにはそれがなくなつたから、普通に話せるようになつたんだ。

自分の人間不信も治さなきやな……と思いつつ、ブレスレットを手にして浄化を始めた。

こんな感じで、進むと魔族にあつて退治して浄化して、それを繰り返しながら、十日くらいに過ぎた。

といつても、魔族退治と浄化でほとんどの疲れがやうので、思つたよつその歩みは遅かったのだけだ。

それでも前よつは早くつわせただ、と心の中で思つていた。

18 初、魔族退治（後書き）

これくらいなら、別に『残酷描写有り』といつ仰々しい注意書きは要らないかな。

自分の筆力ではこのくらいがせいぜいです：

18・5 勇者の苦悩（前書き）

番外編っぽいので、今回は勇者にされた蒼井一人称な話です。

俺は蒼井隼人、高校一年生だ。

親友の洋一と一緒に、クラスの中では割と中心にいたと思う。友だちも結構いたし、女子ともよく話をした。成績は中の上くらいか。容姿端麗・頭脳明晰。なんて嘘でも言えないが、それでも学校生活は充実してたほうだ。

けど、ずっと休学していた隣の席の相沢花梨が復学したとき、衝撃を受けた。

高校に入る前に怪我で入院していたとかで、一学期の終わりになって初めて登校した彼女を、担任はまるで転人生のように紹介した。病院にて日に焼けていないせいか色白の肌、同じ高校一年生とは思えない落ち着いた態度、顔立ちは素直にきれいだといえるくらい整っている。が、何よりも印象的なのは、髪の色より明るい茶色い目だった。

なぜそう思ったのか、よく分からぬが。

そして一学期の終わり、期末テストで上位に入つたことにも驚いた。だって今まで怪我して病院にいたやつだぞ。どうしてそんないい点取れるんだよ？

きれいで頭も良くて　　できすぎでないか、と思つてゐると、案の定というか、クラスの女子の中から浮き始めていた。

相沢のそつけない態度も一役買つているだろう。休み時間はたいてい一人で本を読んでいて、話しかけても二、三回のやり取りで会話を終わらせる。そんなことをしていれば、みんなよく思わないだろう。俺も気になつては話しかけるものの、返つてくるのはそつけない言葉だけ。

それが、ここに来るまでの相沢との関係だった。

城からでて一日で魔族と会い、そこからは坂から一気に転げ落ちるようにな（ん、この表現はいまいちか？）魔族と遭遇する数が増えた。多い日には四回というのもあつたしな。

俺は日本では剣道を中学のときからやつていて、一緒に来た中でも一番上手く剣が使えると思っていた。

でもそれは自惚れだつた。いくら剣が勝手に動いてくれるといっても、相沢の流れるような動きと、その後に倒れていく魔族を見て俺の自信は見事に砕けた。

頭に続いて剣までかよ、と心の中で毒づく。

いくら剣のおかげだといつても、結果を見れば明らかだろ。俺が魔族一匹を何とかしとめている間に、相沢は身近にいる魔族のほとんどを片付けてるんだぜ？

どっちが『勇者』だか分かつものじやない。ってか、あいつが選ばれれば良かつたんだ。でなければ、形だけの勇者にならなくても済んだのに

旅に同行している巫女であるティリアさんにビリして俺を選んだのか問い合わせたこともある。

でも、五人の中で一番力を感じたから　　という曖昧な答えしか返つてこなかつた。確かにこの世界では力がモノをいう。力といっても魔法とも、腕力とも違うがな。

で、ティリアさんに言わせると、今の俺は剣の腕を磨ぐのに精一杯で、力を使ってないという。力を使うということを身につけてください、と言われた。

でも風の力なんてどうやって使うんだよ？　俺はただの高校生だったんだぞ。せめて魔法で呪文なんかがあれば、まだイメージしやすいのに……今の俺は、成果を目に見えて出すことができず、焦り

しかなかつた。

今も相沢との力の違いを見せつけられて、近くにあつた樹にハツ当たりで殴りつけた。

「蒼井くん、大丈夫？」

そんな俺を心配して尋ねてきたのは、前からよく話をしている篠原だった。

「いや、怪我はしない」

「でも疲れてそうだよ。何か食べる？」

癒しを得意とする篠原に、怪我はないからといつて、じゃあ食べ物をと。でも、放つておいてほしかった。だから、俺は伸ばされた手を振り払つよう。

「喉が渴いたから水飲んでくる」

とだけ言つて、近くに川があるといったのでそこへと向かつた。後ろで、「水ならあるのに…」とぼやく篠原に、慌てて「冷たい清水がほしいんだ」といつて手を振つた。これ以上心配かけさせたら、俺がいる意味なんかねえつてことに気づいたから。

草を踏み倒しながら乱暴に進んでいくと、川幅がおよそ一メートルくらい（こっちでの計測単位は面倒だから割愛する）の澄んだ水が流れる川にたどり着いた。

川のすぐ側で膝をついて水に触れようとした瞬間、ビリッとなる

で感電したような感覚にあつ。なんだ、と思つて、田を凝らすと、ところどころ瘴気が混ざつていた。

あまり力を使いこなせない俺でも、ディリアさんの指導のおかげか、瘴気の把握くらいは多少できるようになつた。瘴気が分かれれば魔族がいるとかそういうのが分かるといつて、旅に出てからまず最初に教えてもらつたことだ。

まあ教えてもらつたとかは別にしても、こんな瘴気混じりの水じゃ飲む気になれない。もう少し上流に行けばきれいな水があるだろうと思つて立ち上がつた。

川の流れに沿つて歩く間、田は川の流れを追う。だんだん瘴気が少くなり、そろそろ飲めるところがありそうだな、と思つて視線を上げると、上流には相沢がいた。

川のすぐ近くにある樹に寄りかかりながら、片方の手を水につけて、もう片方は地につけて体を支えていたようだ。

……疲れてるのかな？ ……まあ、当然か。俺たちと一緒に戦つて、その後はディリアさんの浄化の手伝いだし……相沢のしていることを考えると、自分のハつ当たりがすごく醜く見えるよな。なんともいえない気持ちになつて手で頭をくしゃくしゃとこうか、ガリガリというかそんな行動をしてしまう。

それから、篠原のところへ連れていくて回復してもひつよじ行つと思つて相沢にもう一度視線を戻す。

すると

「マジかよ……」

相沢は疲れて寝ているんじゃなくて、川と地面を同時に浄化していた。

ディリアさんに言われて瘴気を見る癖をつけたから分かる。辺り

に漂う瘴気の中、相沢の周りの地面はきれいになつていて、しかも枯れたはずの草も勢いを取り戻している。川も、手を入れている先から瘴気が消えて元通りの清水になつていいところなのだ。

最高位と呼ばれる私でさえ、『忌み地』ひとつ浄化するのは難しいのです。

最初、『忌み地』を浄化して戻ってきたとき、ディリアさんが恥ずかしそうに告げた。そして、そのために相沢に手伝つてもらつたとも。

『ディリアさんでさえ大変だ』という『浄化』をこんな自然な状態でできるコイツはなんなんだよー？

信じられない田で見ると、ゆつくりと田を開けた相沢とバッタリ田が合つてしまつ。すげえ、氣まずい。

「蒼井くん？ どうしたの？」

だけど、相沢はそんなことを気にせずに普通に話しかけた。
しかもさつきまで浄化していたことなど微塵にも感じさせないような普通の口調で。

「水飲みにきたら、瘴気で汚れていたからここまで来ただけだ」

「そう？ ここの辺なら大丈夫だよ」

立ち上がって何もなかつたかのような顔をして立ち去りつとしている相沢。
思わずその手をとつて。

「蒼井くん？」

「どうして平氣な顔してられるんだよー？」

「……は？」

きょとんとした顔をしている相沢に、いろんな思いが混じりあって溢れた。

「どうしてそんなに力を使えるんだよー？ それにみんなから仲間はずれにされてるような感じなのにぜんぜん気にしてなくて…お前を見ると自分がすっげえ小さく思えて惨めになる…！」

半分以上は愚痴だつた。こんなこと、相沢だつて言われても困るだろう。でも、それでも情けないことに口から溢れ出てしまった。

「どうしてそう思つの？」

「だって、相沢は一人でも平氣で、魔族だつてほとんびりつけてでも平氣な顔して、その後だつてのに淨化まで…」

俺が頑張つてこるとこを、相沢は飄々とした顔でどんどん先に行く。

それがなんかとても悔しくて

「そりかな。でも、蒼井くんは『勇者』の肩書きに負けないよう頑張つてると思つよ？」

「え…？」

「勇者つていえば、みんなが見るじゃない。大変なのに頑張つてんなーつて思つけど。それに蒼井くんはこいつの見るのは、初めてでしょ？」

そりりと『頑張つてる』と言つた相沢の言葉に嬉しくなり、その後、『こいつのを見るの初めて』といったのが気になった。

「……いつの、って？」

「いや、えっと…死体とかそういうの？」

「相沢はよく見てたのか？」

「さすがに死体はないけど、血みどりの靈とか結構見てるから、たぶん、その辺は蒼井くんより慣れてると思つよ」

ち、血みどりの靈！？

「あれ、言つてなかつたつけ？ 私、靈感つてのがあつて、靈とかよく見る。怪我して入院してたときもよく出てきたし、治つてやつと学校に行つたのに、ああいうところつて人が集まるせいかな、氣を抜くと見つけやうんだよね」

……も、もしかして、最初からその辺の耐性というか、レベルが違つていたのか？ だとしたら、俺が悩んでいたことは無駄なのかよつー？

「あ、ちなみに油断していると靈に近寄られて無駄に怖い思いをするから、跳ね除けるくらいはできるよつになつてたんだけど、それがこつちでは『浄化』に近いみたい」

……決定。俺の悩みは全部無駄だつた。

「ば…」

「ば？」

「馬鹿みてえ。俺、力使いこなしてる相沢に嫉妬してたんだ」

「うーん……確かにそれは馬鹿みたいだね」

「おい」

「だつて力がぜんぜん違うもの。なんに使いたいかで変わるんだよ？ 魔法とより超能力に近いものだもん」

「そりゃ、超能力か！」

魔法より超能力という言葉が、なんとなく引っかかっていた心にすとんと落ちた。

そつか、イメージとか想像するとか、曖昧なことを言われてよく理解できなかつたけど、なんか、超能力のようだといわれたら納得できた気がする。

「蒼井くん、あまり本見ないでしょ？」

「なんで分かる！？」

「だつて力の使い方とか、想像するつて言われてもピンとこなかつたみたいだし」

「わ、悪かつたな。還つたらちゃんと見るよ」

「うん、還るために頑張ろ！」

「当たり前だ！」

さつきまでの心のもやもやは晴れて、氣づくと粗沢の言葉に思い切り答えていた。

18・5 勇者の苦闷（後書き）

それぞれ抱えているものはある……んだと思つ。
ということで、今回は別の人での一人称、心情だだ漏れ話でした。

旅が続くと疲労が溜まっていく。そのためには、比較的穏やかな村で一日休みを取ることになった。

村の名前はエンテ。魔族の被害にあつていいない、珍しい村だった。ディリアさんと一人で村の瘴気を確認して、ないことに驚いた。

ディリアさんが驚いて村人達に尋ねると、村の人から

「ああ、それはきっと、前の勇者様が置いていかれたクリスタルのおかげでしょう」

という返事が返ってきた。

前の勇者といつても、一年に一度の大会と勇者選定は最近まで行われていたため、ディリアさんが知る大会で最後に勇者になつた人かと尋ねると、そうではなく前の魔王が現れたときに封印してくれた、勇者のことだという。

それに驚いてディリアさんは私を引っ張つた。

「カリンさん、あなたいったいなにしてたんですか！？」

「あ……えーと、確かにいくつかの村にクリスタルを置いてきた覚えが……」

「それは分かりますが、どうしてこの村のことを覚えていないんですねか！？」

「だつて名前とかいろいろ変わってるし、あの時はそこまで余裕なかつたし。ってか、そもそもそのときのクリスタルが、いまだに効果があるなんて思つわけないでしょうー？」

ひそひそと、側から見ればかなり怪しい会話を繰り広げる。

「確かにやつですが、隠したいのならどうぞそんなことをするんですか！」

「だからさつき言ったように、当時はお守り程度で危なさそうなところにおいてただけですってば。いまだに効力を持つていろいろ聞いて聞いたこいつが驚いてます！」

力を使うアイテムは、身につけて使うのが主だけど、自分の力を染みこませて遠隔操作することもできる。でも、それは力の持ち主が生きている間で、しかもその力がアイテムの中で尽きてしまえばそれまでだ。

一百年もの間、ずっと保つていられる力の入ったアイテムなんて知らないし、そんな力作を作った覚えもない。

頭を左右に振る私に、ディリアさんはため息をついてから村の人にはそのクリスタルを見せてほしいと頼んだ。

村の人は快く受けてくれて、ディリアさんは招かれるよつ家の中に入つていく　と思つたら、私の服を引っ張つてゐる。引っ張りなおすと、ディリアさんは振り向いて、自分のものかどうか確認してくれという視線を送つてくる。仕方なくディリアさんの後についていた。

見せられたクリスタルは占い師が使う水晶球のような大きさだった。とてもじゃないけどブレスレット（本当は数珠？）に使つていた水晶のサイズじゃない。どうなんですか？　せつづくディリアさんには。

「あのですね、魔王を倒す旅をしているのに、あんな馬鹿でかいクリスターを持ち歩くのがどこにいると思うんですかーー？」

「そ、それもそうですね。でも……」

「だいぶ前のことみたいだし、どこかで話が食い違つたんですよ、きつと」

「そうかもしませんね」

一百年前の話なんて、もう昔話に入る類のものだ。言い伝えられている間に、少しずつ変わつていつている可能性のほうが高い。ただ力を保ち続ける、あのクリスタルは気になつたけど。

「相沢！」

外に出て冷たい水でももらおうかと思った矢先、蒼井くんに声をかけられた。

「なに？」

「いや……休みの日に悪いんだけど、力の使い方を教えてくれないか？」

「力の使い方？」

「相沢に言われて、それなりにイメージしてみるんだけど上手いくかなくてさ。だから、その辺教えてくれ！」

と、手の平をあわせてお願いされた。

蒼井くんとは少し前から、少しづつ打ち解けられた感じで、少しづつ会話が増えていた。

「いいよ。でも暴走したら困るから、少し場所を移そつか？」

「ホントか？ 頼むぜ、相沢！」

さつきまでの氣まずい表情がなくなつて、蒼井くんは人懐っこそ

うな笑顔で喜んだ。

ああ、こういうのが女の子が蒼井くんを気に入るのかな。すげくイケメンってわけじゃないけど、顔立ちはいいほう。で、人見知りをしないで誰とでも話をして、楽しいときは無邪気に笑う。どちらかというと弟にしたいキャラ　という感じ。

私の場合、こっちでの一年があるから、本当はみんなより一つ上になるんだよね。それもあるのかな？　見捨てておけないって思ったのも。なんだかんだ言つても一緒にいるし。

「なんだよ、相沢」

「ん？　なにが」

「いや、なんかニヤニヤしてるぞ」

「そう？　それはきっと蒼井くんのせいだよ。蒼井くんって見てたら犬っぽいなって思つたから、つい……」

黙つていよいよと思つたけど、意地悪く、思つたことを口にした。だつて、人間なら弟。それ以外なら犬みたいななんだもの。

「なんだよ、それ？」

「ん？　かわいいってこと」

瞬間、蒼井くんの顔が真っ赤に染まった。

やりすぎてしまつたか。さすがに、高校一年生の男の子にかわいはなかつたかな。ここでの一年間も年齢に入れるとすると、みんなより上になるんだもの。話してみると蒼井くんはかっこいいとうよつ、かわいいと思うんだからしょづがないじゃない。

「ととととにかく、行くぞ」

「はーはー」

照れた蒼井くんはこれ以上言われたくないらしく、どもりながら話を元に戻した。でもやっぱりその姿がかわいく思えて、くすくす笑ってしまった。

同時に、自分の蟠りのせいでもみんなをちやんと見ていいなかつたことに気づいて「ごめん」と呟いた。その声は小さくて、蒼井くんには届かなかつたみたいで、少しほっとした。

* * *

「じゃ、早速教えてくれよ」

村から外れて人が来なさそうな森まで行くと、蒼井くんはやる気満々だつた。さあやるぞ、といつ意気込みが感じられる。

「うん、でもその前に、蒼井くんの剣を見せてもらつてもいい？」

蒼井くんは勇者にと特別に作った剣を持つている。最初から作ったのなら蒼井くんが一番使いやすいだろうし、元あつたものでも多少カスタマイズしてあるはずだ。

蒼井くんから剣を受け取つて剣を見ると、やっぱり装飾過多だなと思つて剣を渡される。ついた装飾類のせいか、普通の剣より重い気がする。

「ねえ、これ重くない？」

「そうか？ 確かに竹刀に比べりや重いけど、いつもたのと一緒にするのが間違いだる」

「そりや ただけど…… 蒼井くんって思つたよりアバウトなんだね

「悪いがよ」

「ううん、いい意味で言つたんだよ」

蒼井くんに許可をもらひて剣を鞘から抜き放つ。すると、鞘が装飾過多らしくて、剣のみになるとわほど重みを感じさせない。……つていつても、私が持つているのよりかなり重いけど。

剣 자체に風を象徴しているのか、薄い青緑の大きな宝石が剣首のところにはめ込まれていた。それ以外に鞘についている宝石は力の增幅ができるようなアイテムじやなく、普通の宝石。

なんていうか、ガチガチに風の力のみ增幅といった感じ。これじやあ超能力のようなもの、といつてもいまいち分かりづらうだろうね、と納得してしまつ。

「どうした？」

「ううん、あのね、蒼井くんが風だと思い込んでるみたいで、この剣には風用のアイテムしかついてないみたい。でもこれだけ大きいし、ある程度は他のも使えると思うんだけど……」

「え、だつて俺、風だつて言われたし、なんの問題があるんだ？」
「だから……本当は風だけじゃなくて他の力だつて使えるんだよ。超能力つていつたらどんな力があると思う？」

「テレビポートだろ、それに……サイコ……なんだつけ、物を持ち上げるやつ、んで、透視とかもそうだよな。他には……」

私の問いかけに、蒼井くんは考えながらポソリポソリと思いつく単語を羅列していく。

「うん。その中に風とか火とか、そういうのを連想させるものつてある？」

「…………ねえな」

「やつ、ないんだよ」

その後、超能力のよつたものといつたけど、厳密には違つんだよと説明する。

それでも、どうこう風に使いたいかは自分の考え方次第だから、「こんな」とはできないかなとか想像するのも一つの方法だと説明した。

「蒼井くんは風を使って戦つとしたら、どうやつたら一番効果的にできると思つ?」

尋ねると、蒼井くんは考え始めたのか腕を組んで首を傾げる。あまりに考えすぎてかなり傾きかけた頃。

「吹き飛ばすとか。あとは……」つづり、あんまり思いつかねえよ

「でも、蒼井くんは無意識には使つてるんだね

「え?」

「だつて、お城で私とやつたとき、蒼井くんは風の勢いを利用して突っ込んできただじゃない?」

さらりと言つと、蒼井くんはものすごく驚いた顔をしていた。本当に無意識でやつたんだね、蒼井くん。

でも無意識でそれができるなら、意識してやつたら結構な力になるんじゃないのかな。だつたら、ディリアさんが蒼井くんを選んだのは間違いじゃないんだね。

それから、風といつてもそよ風のよつたものから突風、竜巻、鎌鼬 もまあまあるから、その場で必要なものを考えればいいよ、説明した。

「たとえば、剣に石がくつついてるから、剣に風をまとわせて剣圧で相手を斬ると同時に吹き飛ばしたり、風で渦作つて真空状態にしてそれを飛ばしたり」

「鎌鼬が」

「うん」

「あと、危なじつてときめは、相手の足元を風でぞりつて姿勢を崩すのも手だよね」

とりあえず思いつく　といつか、昔使った手を思い出していくつか話すと、蒼井くんは感心した顔をして。

「相沢つてすぎえな。つてか、よくそんな手をポンポン思いつくよな。なんか、最後のはちょっと卑怯な感じしたけど」

たぶん、別に悪気があつて言つているわけじゃがないんだろう。でも、その後もヴァイスさんに教わつてたから剣の稽古つて感じだけど、私の場合、いろんな手で狙つてきそつだから、すごいスペルタで怪我しそうとか言つんだよ！？ 鬼教師みたいだつて。教えてもらひひのこ、もつ少し考えてもの言おうよ、もひひー！

「……ほほーう。力の使い方を教えてほしいと言つたのは蒼井くんなのに、そういうこと言つんだ？ ジヤア、実践やつてみよつか。その、鬼教師と手合わせすれば、少しさは上達するでしょうしねえ？」

嫌味と笑みを交えて言つと、蒼井くんは「やべつ」と慌てる。うん、でももう遅いんだよね。みんなからすれば“敵とみなしたもの斬る剣”を抜き放つ。

蒼井くんは敵でもないし、この剣は私の言つことを聞いてくれるけど、それを知つてるのはティリアさんくらい。だから、私が蒼井くんに向けて剣を振るい始めたのを見て、蒼井くんは本気で私を怒らせたと思つたようだった。

そうして日が暮れる頃まで、自称：蒼井くんの特訓。でも側から見れば、一方的な蒼井くんいじめが続き、最後にはパタリと倒れた蒼井くんの姿を上から見下ろした。

鬼教師とか、スバルタとか、要らぬことを言つからせうこうじとになるんだよ、まったく。

19 新たな謎と、勇者の修行（計上、じじやく）（後書き）

だんだんカリソの隠していた性格（本性？）がじわじわ出てこ
るような気がする・

『レモン』になってしまった蒼井くんを見て、たすがにやつすぎたかなと後悔する。

それにこのままだと借りた部屋にも戻れないでの、体力はともかく傷だけは治療した。

「相沢、ちょっと反則過ぎねえ？」

「は？」

「あんなに力使いこなした拳句、治療もできるのかよ」

治療が終わってから蒼井くんの最初の一言は、「ありがとう」じゃなくて、ふてくされたぼやきだった。
まあ分かるよ、いいことは。

「うん。私、みんなみたいに属性に縛られてないからね。みんなみたいにガツチリ属性決められちゃうと、他のを使つてみようつて思わないでしょ？」

「そりゃ……でも、分からぬのと使えないのと違うのか？」

「違うみたい。分からぬいつて言わたのに力はあるつておかしいよね。だから、何が使えるかなつて思つていろいろ試したら、いろいろ使えるようになつたよ」

人にはこの属性しか使えないといつていう決まりなんてないし、アイテムには確かにそれぞれの属性（本当は精霊）が好む色があるけど、だからといってそれ以外の属性が使えないわけじゃないこと。

ついでにお守りに持たされたクリスタルは浄化だけでなく増幅もできるから、それと上手く使い合わせれば、風だけでなくほかのものも使えるはずだということも。

「うわっひでえ。お前、それ知つて教えて教えなかつたな！？」

「だつてディリアさんだつて知らないくらいだつたし」

「え？」

「私の場合、属性ないつてことで放つておされたから、書庫で結構古い文献とか調べてて知つたんだよ」

さすがに前にも召喚されました、なんてことはいえないのに、それらしい言い訳をした。書庫に入り浸つてていたのは本当だから、蒼井くんはそれ以上追及してこなかつた。

いまだと、こういうすぐ人に信じちゃうところなんか、本当にかわいいと思つちゃうんだよね。弟にして遊び倒したくなる。

でもそこまで言つちゃうとかわいそなんで、「早く戻ろう」とだけ言つて、部屋を貸してくれた村長さんのところまで戻つた。

戻ると大野くんが待つていて、力を使つ練習なら自分も一緒にやりたかつたと主張する。
でもあまり知られたくないもので、たまたま蒼井くんが練習相手を探していたら私が目の前を通つたからと答えた。それを端のほうで聞いていた蒼井くんは。

「相沢

「ん？」

「なあ、さつきの……あまり知られたくないのか？」

「力のこと？ 確かにあまり知られたくないけど」

「なら黙つてる」

「ありがと」

「俺こそ、使い方教えてもらつたり、怪我治してもらつたり……ありがとな」

「どういたしまして」

「ソソソ」と蒼井くんとやり取りすると、蒼井くんも話をあわせて、属性が分からぬからどんな手で来るか分からなくていい練習相手になつた、と大野くんに力の練習をしていたことを話してゐる。

だからあまり知られたくないのに、そんなに細かく説明するなつての。新しいオモチャを手に入れた子どものようにはしゃぐ蒼井くんに心中でツツコミを入れた。

それから夕食を貰つてお腹を満たした後、お風呂には入れないのでは、沸かした湯で体をきれいにする。そして貸してもらつた部屋に戻つた。今日はディリアさんと相部屋だつた。

まだしつかり乾いていない髪の毛を櫛ですいて整えていると、ディリアさんも戻つてきた。

「もう戻つていたんですね」

「あ、はい。ディリアさんはどこへ行つていたんですか？」

ディリアさんのほうが年上なので、それなりに話をするようになつたものの敬語は抜けていない。ディリアさんもそれを指摘することもなかつたので、互いに敬語で話していた。

「例のクリスタルをもう一度見せていただいていたんですね」

「ああ、あの。で、どうでした？」

「詳しいことは分かりませんでした。でも、あのクリスタルは力に満ちていて、当分の間この村を守ってくれるでしょう」

「 まだに力に満ちたクリスタル。だとしたら、やっぱり私が置いたものとは違う気がする。」

「 前の私は、水晶のブレスレットを左右の手首にしていました。靈などから身を守るためにもつと高価な石のほうがいい。」

「 でも中学生の私には、修学旅行で買った神社のお守りぐらいしか買うことはできなかつた。だから一つ買って左右の手首にしていました。その片方をばらし、いくつかをこの世界の人々に渡したことも覚えている。」

「 でも、気休め程度のものでしかなかつたはずだし、昼間も言つたけど、あんな大きいものではなかつたとディリアさんに話した。」

「 ……そうですか。あれがカリンさんのものなら、ある程度納得できたのですが」

「 納得されても……ね。ずっと力を保ち続ける　なんて、自分の力を疑いますよ。そんなことまでできたら人間じゃないみたいで」

「 靈感などなければもつと穏やかな生活ができるだろう。それに、それ以外に強いからと呼び出されるような要素などどこにもない。きっと、何も知らず幸せに高校入学し、普通に学校生活を送つていただろう　と思わずにはいられない。」

「 でも、今までにない強力な魔王を封印できたというだけでも、十分すごいことですけど」

「 あれは……偶然に偶然が重なつて、奇跡といつてもいいことだつたから。その奇跡がなかつたら、きっと私は死んでたと思います。あまり当てにしないほうがいいですよ」

「あのとき、ただ一人、味方もなく圧倒的な力を誇る魔王を前にして死を覚悟した。」

奇跡的にもそれは免れただけど　と、窓から空を見上げると、ち
ょうど満ちた月が見えた。

「」も地球と同じで夜には月がある。それが夜はわずかな明かり
をもたらしてくれる。それは、一百年前も変わらない。

「なら、皆で力を合わせたほうがいいことがありますね」

「たぶん」

それに新しい魔王は好戦的だ。勇者が来るのを待ち構えているだ
ろう。遅くなれば遅くなるほど、魔王に時間を与えることになる。
魔王を撃つチャンスが少なくなるに違いない。

「少し……お聞きしてもよろしいですか？」

「なにを？」

「カリソさんの気持ちです」

月から視線を戻すと、眞面目な表情をしたティリアさんが立つて
いる。

私の気持ち？

いつたい何をというんだ？今は多少薄らいだものの、心の中
の複雑な感情は消え去ることはない。

「カリソさんは最初、他の方と違つてすぐ嫌そうでした。いえ、
今なら分かります。知らない世界のために戦つてほしいなど言われ
て、簡単に頷けることではありません」

「うん。私、前のときもずっと嫌だつて言つてた。そしたら

「そしたら？」

「魔王の居城まで勇者を守るつゝ命で、裏では私が逃げ出さ
ないよ」って監視になつた

ここまで知つたティリアさんには、もう話しておこうと思つて、当時のこと語りだした。とはいえ、ティリアさんの目を正面から受け止める勇氣もなく、月夜にまた視線を戻して。

召喚されて嫌がつた私は、元の世界に戻してほしいなら、魔王と倒してくれと言わされた。それでは取引といえない。一方的に連れてきて、願いをかなえたら還すなど、どこが交渉なのかと文句を言つたこともある。

どちらにしろ、私用の剣を仕上げるまでは城から出れないので、そんなやり取りを何度もした。信じられないから、その返還陣を見せうとも言つた。

当時の神官、巫女たちは自分達の力がなければ還れないと高を括り、子どもを宥めるような感じで何度も見せた。あれを使えば、すぐにもとの世界に戻れるから」と。

だからといって、素直に信じられるわけもなく、私は見るたびにひたすら返還陣を記憶しながら、当時持つていた紙に返還陣を書き足して覚えた。

彼らに期待しても駄目なら、自力で還つてやると思いながら。

「私の考えはばれてはいなかつたけど、彼らは還れなくとももう一つの可能性を危惧して、魔王のところに行ぐのに私の護衛と称して数人を監視に付けた」

「そんな、ことが……」

当時も瘴氣でみんなおかしくなつていたから　　と苦笑する。

もう一つの可能性とは、還れなくても、魔王と戦うところ恐怖から逃れ、この世界でひつそりと暮らすことだった。

自分ひとりなら、魔族の手から身を守ることも可能だつ。もつと遠くの国へ逃げて、なるべく静かに暮らせば、怖い思いをするこ

とも、命を失う可能性もほとんどない。

でも彼らにすれば、魔王を倒せるような強いものをと望んでてきた存在。それをむざむざ野放しにする気はなかつたのだ。たとえ本当に魔王を倒すことができなくとも、勇者がいる間は魔族の、魔王の意識は勇者に向くであらうから。

「魔王を倒せたら還すという言葉も、私を護衛するといった周りの人も信じられなかつた。でも」

こんな勝手な世界なんか知らないと思いつつも、外に出れば見方も変わる。

国の中核ではなく、末端にいる村人は本当に死の恐怖に怯えていた。目の前で必死に助けてと縋る姿を見れば、それを見てみぬふりはできなかつた。

「助けてほしいと願うのに、その裏では逃げださないよう見張つている 最初の頃はこの世界と人を身勝手だと、そして憎いと思つた」

月夜を見ながら呟けば、ディリアさんが動搖して身じろぐのが雰囲氣で分かつた。同じような気持ちで召喚陣を使つたディリアさんは、罪悪感を感じてるだろう。

それに気づきながらも「でも」と、話を続けた。

「でも、その気持ちをずっと保ち続けられるわけじゃない。最初に見た以外のものを見れば、それ以外の感情だつて芽生える。全体を見れば憎い。でも個人を見ればそうでもない。憎いと思つても見捨てられるほど冷酷にもなれない。 はつきり割り切れるほど、人の心は簡単じやないんです」

長く語ると、深いため息をついて、ディリアさんを見た。
ディリアさんもなんともいえない表情で、どう答えていいのかしばらくの間迷っていた。

そして。

「うう……ですね。そして、そういう感情は一人で制御できないほど、人の心は複雑なものですね」

そう答えると、ディリアさんも夜空に浮かぶ月を見つめた。

しづらぐすると、ディリアさんは眠りについた。規則的な寝息を聞きながら、完全に眠っていることを確認する。それから。

「じんばんは、闇の精霊さん」

窓から闇夜に向かつて話しかけた。

“わかるの？”

闇の精霊はリートたちみたいにはっきりと見えないけど、それでも存在は感じる。声をかけると、案の定、自分たちの存在が分かるのかといつ問い合わせが返ってきた。

「分かるよ。しっかり見ることはできないけどね。あなたたちの力を借りたいんだけど、いいかな？」

今私は、風、土、火、そして少し前に水の精霊に力を借りるこ

とと名を付けることで繋がった。後は光と闇のみ。

前に初めて魔王の前に立つたときはいまだに鮮明に覚えて

いる。あの力を前にして、私はまったく勝てる気がしなかつた。

今回の魔王は前より弱いと聞くけど、魔王は魔王。今相手にしている魔族なんてものじやないだろう。三回目の異界の壁越えで付けて力を知られたくないからと、出し惜しみをしているわけにはいかない。

闇の精霊が“いいよ”と答えるのと同時に。

「ありがとう。あなたたちのことを、“アーベント”って呼ぶね」
名前をつけた。

20 割り切れないもの（後書き）

話には出てこなかつたけど、蒼井くん一人称のときに水の精靈とは約束します。

名前は“クヴェル”

次は番外編で、あまり出ていなかつた堤さんの話。

20・5 彼女（前書き）

今回は堤さん一人称になります。

堤恵理、高校一年生。

愛美とは中学からの友だち。ふわふわした感じで、私と違つて女の子っぽくて好き。

大野とは中学は違つても知り合いだった。

蒼井は大野がよく話をしてるから、一緒に混じつて話をした。愛美が蒼井のことを気にしているのに気づいたときから、一緒にいることが多くなった。学校では四人で仲良くしていたと思う。

相沢花梨。

彼女が出てきたことで、愛美的嫌味が増えた。

理由？ それは蒼井が何かと彼女のことを気にするから。

私は別に彼女のことは好きでも嫌いでもなかつた。愛美がいなかつたら、私も彼女のようになつていたかもしれないから。一人でいられることは、それだけ自分というものがしつかりしているからだと思う。

そんな見方をしているせいか、私は彼女のことだけは『相沢さん』と、さんを付けていた。個人的に話をしたことはないけど、たぶん、彼女のことをそれだけ認めていた。

そんな中、五人で異世界へと呼び出された。

異世界召喚　　は、なんの冗談？ 愛美が好んでみたライトのベルのファンタジーじゃないんだから、現実的に考えてありえないでしょ。

そう思う反面、変わった日常が面白くも感じた。

それに私たちには、元の世界にはない不思議な力があつて、それを使えることができる。しかも還れるという約束つき。楽しまなきやソソんでしょ、って展開だった。

でも、わくわくした気持ちも、彼女の現実的な一言一言で潰されていく。しつかりしていると思つたけど、ここまで来ると少しづんざりした。

それに私は面白がつてやつてみた力の練習をぜんぜんしない。剣の使い方も覚えようとしない。

つい、「少しばかないと足手まとい」と嫌味を言つてしまつたほどだ。

嫌だな、こいつじめじめしたのは嫌いなの!」。

そう思つたのに、彼女の態度に対してその気持ちは抑えられず膨らむばかりだつた。

それが顕著になつたのは、蒼井にケンカを売つたときだ。夕食を終えて部屋に戻つて、愛美と話をした。

「まつたくムカつくよね。そつ思わない? 愛美」

「相沢さんのこと?」

「そうよ、相沢さん! 自分が中途半端だからつて、蒼井にケンカ売つてばかり。愛美だつてあの子のこと、嫌つてたよね。ムカつかなかつた?」

このとき、私のほうが怒つていた。意外にも愛美のほうが冷静だつた。でも愛美の態度に余計に苛々した。

ずっと嫌味を言つてきたのに、なんで今になつて底づきうことを言つわけ!?

理不尽な怒りは収まらず、次の日も蒼井が負かされるのを見て、さらに苛々した。

* * *

旅に出てからずっと移動してたけど、やっと一田のんびりする日ができた。今日は何も考えずに「ロロロロ」。最近、ずっと苛々しつぱなしだったから。

苛々の原因は彼女だ。

言つことは立派でも、役に立たなければ、ああ口だけか……と思つたのに、彼女は言うだけの力を持っていた。

剣で戦えば、誰よりも魔族を多くしとめてるし、その上ディリアさんの净化の手伝いまでしてる。ここまでくれば文句も言えない。それでも、みんなの中で彼女だけ浮いているということだけが、気分的にはザマアミロという感じで小気味良かつたのに、いつの間にかに蒼井と仲良くなつていた。

遠くから見ていたからなにを話していたのか分からぬ。でも途中で蒼井が真っ赤になつて彼女が珍しく笑つて　それを見て、心の中がざわつくのを感じた。
この気持ちはなにから來るのか。

蒼井のことは友だちとして好きだ。異性だつて友情は成り立つ。大野とだつてそうだ。

じゃあ、彼女に？　でもなんに？　この世界に来て、一番活躍している。逆に私の力のほうが必要ない。道案内のレー・レンさんがいる以上、私が役に立つのは、防御くらいだ。

だから？　妙な嫉妬を感じるのは　そこまで考えて、自分がなりたくないと思った人間になつていることに気づいた。
そう思つた矢先、隣にいた愛美が何かを呟いた。

「なにか言つた？」
「……ううんつ、別に」

あのやり取りを見て、きっと妬いたか落ち込んだか分からぬけど、愛美は悔しそうな表情をしながら私から視線を逸らした。

ああ、そうだ。私は友だちの愛美を傷つける彼女が嫌いなんだと改めて思いなおす。醜い自分の気持ちに蓋をして。

次の日、まだ薄暗いのに目覚めてしまった。実は、トイレに行きた
い。

「」は日本のように下水完備じやないから、そういうのは家の外にある。面倒くさいけど、寒くないし行かないと一度寝ができるからと静かに外に出た。

外に出ると、空は朝焼けで地平線沿いが赤紫色をしていた。上のほうはまだ暗い色をしている。たぶん四時くらい……かな。空を見上げて今の時間を推測してから、視線を下に移した。

同時に、今見たくない人物が見えてしまった。

……って、こんな時間になにやつてるわけ？

隠れて観察しようとしたらい、逆に「誰?」と問い合わせられてしまつた。仕方なく彼女のところに歩いていくと、向こうから「おはよう、早いのね」と声をかけられる。その声は至つて普通で警戒心もない。

「おはよう。あなた」は早いね」「ちょっと早く目が覚めたから。それに、朝焼けはきれいだから眺めていたところ」

「ふうん。なんでもできる人は本当に余裕だよね」

落ち着いた口調で答える彼女に、また嫌な気持ちを感じてしまい、
気づくと嫌味を言つていた。

前の愛美はこんな感じだつたのかな　と思いながらも、出た言葉は取り消せない。開き直ると、今度は私の言葉にどう反応するのか気になった。

「きれいなものをきれい、って思えない？」

「なつ！？」

逆に問い合わせられて、言葉に詰まつた。

「堤さんの言つ『余裕』つてのが、なにを指しているのか分からな
いけど……私は周りが見えなくなつたら終わりだと思うから、こう
いう時を大事にしたいだけ」

確かにそのとおりだ。だから悔しくて何か言い返そうと思つても
できなかつた。

だいたい余裕ある人はいいね、と嫌味を言つて、それに対しても
分はこうだと答えている。つてことは、彼女は自分のことを言わ
れている自覚はあるつてことだ。

そう考へると、余計苛々して

「私、あなたのことが、前は嫌いと思わなかつた。でも今は　大嫌
い」

嫉妬とかそういうのと無縁でいたかった。

幸い、私はそこそこ勉強も運動もできて、せばせばしていいと愛美にも言っていた。他の人ともそれなりに上手くやっていたと思ひ。

恋愛もしつかりしたことがなかつたから、そういうのとも無縁だつたし。だから今まで気楽だつた。

なのに今は　彼女に對して、嫉妬にまみれていた。

20・5 彼女（後書き）

すみません。今回はあまりいい話ではありません。

歩み寄つて仲良くなる中で、こんな存在もいていいかなと思つてます。

嫌い 好き があるなら 好き 嫌い があつてもいいと思つてることで。

でも気持ちは流れるようになつて変わるので、最後のほうはどうなつてわかるかわからんが。

昨日の夜、ディリアさんに昔の話をしたせいか、深い眠りにつくことはできなかつた。

何度か夢を見ては起きては、日本と違うことに驚いて、次に前にここに来たときと間違えそうになつて、横で寝ているディリアさんを見てやつと現実に気づいた。まるで悪い夢でも見ていいようだつた。

前と違うのに……。

前は一人といつてよかつたけど、今は仲間と呼べる人がいる。本当に仲がいいとはいえないけど、少しずつ普通の話もできるようになつてきた。それに、この世界の人もみんな協力的だ。

ただ、自分が前のことのせいで人を信じきれずにして、周りとの和を乱している。分かつていながらもどこか信じられない自分に嫌気が差し、頭に手を当てながら深いため息をついた。

明るくなつてきた空を見て、気分転換に外に行こうとした。ディリアさんを起こさないよう静かに、寝巻き代わりの服のまま部屋から出た。

家の近くの岩に腰掛けて、だんだん白んでくる空をじばらぐの間見ていると、途中で人の気配がした。誰かと聞いかけると、出てきたのは堤さんだつた。

そういうえば堤さんはあまり話をしないな。篠原さんは途中で心配してくれて話したけど。あのときは篠原さんに悪いことしちゃつたつけ　と考えながら、とりあえず朝の挨拶をする。

「おはよう、早いのね」

「おはよう。あなたこそ早いのね」

返事から、あまり好意的でない印象を受ける。そつなるよつこ言

つたりしたりしたので仕方ないかと思いながら、朝焼けがきれいだと話した。

すると、堤さんから「余裕だね」と言われる。本当に余裕だったらこんな風にしてないよ……と思いつつも、話すことじやないので喉元までかかつた反論を飲み込んで、「きれいなものをきれい、つて思えない?」と問いかけた。

そう思えなくなるのは、精神的にまいっているとか、何かの問題に囚われてほかのことまで見てられないとか どちらにしろいことじやない。

だから怒られそうだけど聞いてみた。そしたら。

「私、あなたのこと、前は嫌いと思わなかつた。でも今は 大嫌い」

はつきりと言われて、それからふんっと鼻息荒く部屋に戻つてしまつた。面と向かつて言われたため、どう反応していいか分からなかつた。ただ、家に戻つていく堤さんの背中を見るしかなかつた。

「私、馬鹿だ……」

分かつてゐるくせに、相手をあおるようなことをいつ。

人を信じられない自分が情けなくて嫌で そこまで考えてから悩むのをやめた。暗い思考を止めるために、また朝焼けの空に視線を戻した。

* * *

朝食の後、泊めてくれた家の人にお礼を言って村から出た。

結局、村を守っているクリスターの正体は分からなかつたけど、そのクリスターのおかげで昨日はゆっくり休めたからよしとしよう。蒼井くんと話をするようになつたせいか、今日は五人で固まつて歩いていた。レーレンが少し不思議そうな顔をしたけど。

そのまま和やかな雰囲気で歩いていくと、ふと急に朝焼けの中、堤さんとのやり取りを思い出す。

……あれも悪いことしたよね。自分がそう仕向けたとはいえ、面と向かって言われるのはやっぱり嫌なものだ。またそんな気持ちにさせてしまつたことに対する罪悪感もある。一步城からでて他の人と接して見方が変わつて、あの時と同じ思いをする。まったく学習能力がなくて同じことを繰り返している。

ため息をつくと、ヴァイスさんが「どうした?」と尋ねてくる。

その表情は前よりも明るい。

「いえ、ヴァイスさんがそんなにおしゃべりだと思わなかつたから、ちょっと驚いただけです」

やうとひさに言い訳するほど、ヴァイスさんはよつやく『気軽に話ができる雰囲気になつたのが嬉しいのか、「はは、悪かつたな。俺はおしゃべりさ」と陽気に答えて今までのことを熱く語つてくれる。最後には「細いのにスゲエな」と頭をなでるといつよりくしゃくしゃにされた。ヴァイスさん、大きくて力があるから、なでられるといつより押しつぶされている感じだ。

それを見て蒼井くんと大野くんが笑つて、レーレンは「それくらいにしたほうが……」とヴァイスさんにやりすぎだと主張してくれた。

「おつ悪い悪い。ついなあ、カリンは女の子だつたつけ」

「……完全に忘れてますね」

「わ、忘れてはいな……ぞ?」

「ならなんで疑問系なんですか？」

「俺は強いやつは男でも女で認めるんだ。だからこれくらい大丈夫だと思ったんだ」

あの、その無理やりな理論はなんですか。ってか、強いと認めたら男と一緒に？ それはそれで嫌なんだけど……と、非難めいた目で見ると、大野くんが横から口を出す。

「でも分かる気がするよ。相沢さん強いし、蒼井のヤツも昨日さんざんやられたみたいだし」

「でも特訓つて言つたらそれなりにしないと特訓にならないし」

剣じやなくて力の特訓だったから無理やり力を使うような攻め方をしなきゃならなくて、私のほうも大変だった。この世界の力はイメージによつていぐらでも使い方があるから、とにかく使ってみることが一番なんだと思う。

「そうだけど……俺も頼んだけど、俺のときはお手柔らかにお願いしたいな」

「私、そんなに酷かつた？」

「…………怖かった」

蒼井くんに視線を移して尋ねると、少し考えたあと、はつきりと返された。青ざめた蒼井くんの顔を見れば、それが嘘じやないんだうつと思える。

「「」あん。やりすぎた」

素直に謝つて、その後は時間のあるときにはみんなで剣と力の特訓に決まった。他人事のように眺めていたレー・レンを、あんたも身

を守るくらいはできるよつになれ　といつて無理やり巻き込んだ。
そんなやり取りをしながら歩いていると、風が通り過ぎて髪の毛
を揺らす。

“きけん”
“あぶない”
「なにが？」

リートたちの声に思わず声に出してしまったが、話の流れから聞いてもおかしくないタイミングだつたらしく、大野くんが何か話し始める。

けど、私はリートたちの声に耳を傾けた。

“どひごんが、くる。”
“にげないと、あぶない”

リートたちの言葉に思わず叫んでしまう。

「ドヒゴン～」

ドラゴンは人よりはるかに強くてでかい生き物だ。瘴気を持たないといふことで、魔族とは別の種族として見られているけど、力だけ見れば魔族と変わらないどころか、魔族でも強いほうに入る。しかも硬い皮膚にあの大きさは的にしたくない相手。

「あの、なんかドラゴンがくる……みたい？」

情報源をはつきりせられないの、ヴァイスさんとノーレンの様子を窺つように小声でぼそりと呟く。リートたちから十分逃げるだけの距離があることを教えてもらつたから、五感では感じ取れな

い距離にこらのドーラゴンで知ったのかと聞かれるといひひと困る。けど、このままドーラゴンと対面したほうがもつと怖い。ドーラゴンの怖さを知っているヴァイスさんとレーレンはすかさず本当かと尋ねた。

「う、うん。たぶん。リ、風が……」

なんて説明したらいいんだろう? と迷いつくると、ヴァイスさんが急いで馬車のほうへ向かう。そして、早く出て逃げるよう指示していた。

「ほら、カリンたちも早く!」

馬車に乗つてゐる三人をおろしてから、細かく突つ込まれなくてよかつたと安心していると、腕をとられて引っ張られた。

ドーラゴンは出くわしたら最後、というほど厄介な存在。魔族のように瘴気がないから精神的におかしくなつたりしないんだけど、倒すとなると白旗を揚げるしかない。大きい体に硬い皮膚は並みの剣ならすぐに折れてしまう。

ただ、数が少ないので人にとつて不幸中の幸いで、運悪く出くわさなければただの怖い話で済む。魔族との違いはそんなところだ。だからヴァイスさんも無理やり倒そうとは思つていない。急いで全員で岩陰に隠れるように縮こまつた。しばらくするとその上空を低い音が響き、その後大きな影が通り過ぎた。

「う、怖かった……」

レーレンがぼそりと呟く。

旅をしているレーレンが一番ドーラゴンの怖さを知つているんだろう。それにヴァイスさんも頷いた。

ドライソンが通り過ぎてしばらくしてから、やつと馬車のところまで戻ると、風圧のせいか馬車は半壊状態だった。そのため荷物を取り出して、次の町まで歩いて向かうことになった。

2.1.5 立ち位置（前書き）

大野くん視点の話。

いつか歩きになると想つていたけど、こんな形で歩きになるとは思わなかつた。

女の子に重い荷物を持たせるなんてことはできないけど、もし魔物が現れたときのためにと荷物はみんなで均等に持つことになつた。歩くのに慣れていない堤と愛美ちゃん、ディリアさんは少し辛そう。同じ女の子でも、今まで歩いてきた相沢さんの足取りはしつかりしている。

あ、遅くなつたけど、俺は大野洋一。^{おおの よういち}この世界に『勇者』として召喚された蒼井の友だち。

『勇者』と一緒に召喚された友だちという立場は微妙なもので、蒼井のようなプレッシャーはないものの、役に立たないと思つたらどういう扱いになるか分からない。

だから、俺なりに頑張るしかないと思つた。俺にとつて都合いいことに、『勇者』以外に召喚されたのは他にもいて、女ともだちの堤と彼女を通して仲良くなつた愛美ちゃん。そして、ずっと休学していたせいか、みんなに馴染めないでいる相沢さん。

戦力として数えるのは蒼井の他には俺と相沢さん。堤と愛美ちゃんは後方支援みたいなもの。でも勇者の肩書きを持つ蒼井と、それを凌ぐような強さ（実際今は彼女のほうが強い？）を持つ相沢さんの一人のために、俺の存在は微妙なところだった。

と、歩きながら一応なんとなく自分の立ち位置のよつたものを考へてしまつた。

それもこれも、突然現れたドラゴンのせいで全員歩きになつたせい。慣れてるのはともかく、そうでない人たちが疲れて俯き加減で

ふらつきながら歩いているから。明るい会話をしようにも、ずすん、と暗く沈んだ雰囲気に話しかける勇気がない。

そういうや、俺は蒼井よりそういうのが苦手だったもんな。あいつは明るい性格で物怖じしないせいが、一緒にいるといろんなところであいつの知り合いに出くわす。

俺はといえば、それに便乗して気の合つ人と適度に話をするようになつて。そうでない人は俺一人の場合、向こうも気づかないからそのままやり過ごして こういうのを事なきれ主義というんだろうか。

そういうえば、じつに着てからも浮いている（いや、ケンカを売るような真似をしているからか？）相沢さんにも、元の世界にいるときは隣の席だし、とよく話しかけていたつけ。

俺からすれば、人を拒絶するような雰囲気を持つた相沢さんが苦手だつた。蒼井が話しかけるとき、なにを言つていいか困つて怪我をしていたということを理由に、何かあると「大丈夫？」とだけ聞いていた。それが一番無難だつたから。

じつにきてもそれは変わらず、俺は適度に離れたところで傍観者になることにした。

『勇者』と言われてやる気になつている蒼井の気持ちもなんとか分かる。物語の主人公になつたようで、浮かれなくなる。

でも残念なことに、俺は『勇者』ではなく『その他』だつた。

それに、のほほんと生活してきた俺たちがいきなり人より強いといふ魔族 ひいては魔王を倒すなどというのは無謀だと思つ気持ちから、相沢さんの言い分にも納得できる。

けど、自分達でも手に余るモノを押し付けようとしているこの世界の人たちに、俺ははつきりと嫌だと言えなかつた。そのためどちらに転んでもいいよに、適度に距離を保つことに決めた。

ズルイ、といえばそれまでだけど、俺だってこんなところで魔族なんて変なものにやらされました、なんてバッドエンドは迎えたくな

い。

あ、バッドエンドで思い出したが、あれだけ危険だとか口にする相沢さんが、どうして俺たちから離れないのか不思議だった。

それに、痛いのが嫌だの言つていた割りに、敵とみなしたモノを斬る剣を持つて一緒に戦っているのかも。

まあ、それについては、蒼井の話（特訓のあと）を聞いて、どういった理由か知らないけど、俺たちより一步も一步も『力』について先を行つているせいかな、と推測した。

今日の明け方の堤とのやり取りなんかも、それを感じさせる一面がある。（これは半分キレた堤に無理やり聞かされた）

蒼井や堤　みんなを怒らせて、相沢さんはいつたいなにをしたいのか。近くを歩いている彼女を盗み見ても、その表情からは何も分からなかつた。

何度も休憩を入れて、あと少しすれば村につくといふ頃に、とうとう魔族の襲撃にあつ。

できればなるべく会いたくないんだけど……とぼやいても始まらない。

ソレは、狼のような姿をしているものの、足が六本あり、犬よりも口が裂けていて、あれにガブリとやられたら致命傷になるだろうな、というのがすぐに想像がつく。

ソレが唸りながら数匹飛びつくに向かってきた。

ヴァイスさんの指示の下、ディリアさん、レーレンさん、堤、愛美ちゃんを後ろに下がらせる。ディリアさんは一定の位置にまとまるごとに結界のような光の壁をつくる。レーレンさんと堤がそれをサポートするようにしていた。愛美ちゃんはこのあとに出番だから、彼女が傷つかないように、壁の一番奥へとやつてみんなで守つてこる。

蒼井と相沢さん、俺は剣を抜いて狼のような魔族に対抗する。

とはいっていいソレは、動きが早い。剣を向けてもそれよりも早く動いてするりとかわす。

そんな中、蒼井がすごい速さで動いて魔族を一匹倒した。

なんで？ どうやって？

そう思つた。そのあと、昨日の相沢さんの『特訓』を思い出す。

でもたつた一日なのに！？ 城にいたときには対して俺と変わらなかつたのに。相沢さんの『特訓』って、なにやるんだよ？ そんなにすぐに強くなれるのか？

疑問系ばかりが頭に浮かぶ。そう思つていると、横にいた魔族に気づくのが遅れた。

やりれる、と思った瞬間、軽く突き飛ばされる。そして、魔族と俺の間に相沢さんが入り、その鋭い牙を剣で何とか受け止めていた。さすが……と思ったけど、とつさのことだつたらしい。受け止めた場所は刀身ではなく、剣を持っている手のところだつた。見れば、相沢さんの顔が痛みに歪んでいた。

慌てて体勢を整えて相沢さんに噛み付いている魔族に上から剣を振る。一刀両断、とまでいかなくとも、動かなかつたソレを傷つけることには成功する。耳を塞ぎたくなるようなわめき声に耐えながら、もう一度剣を魔族に向けた。

一匹くらい魔族は逃げたけど、それ以外はなんとかやつつけた。

みんなも疲れているし、蒼井とヴァイスさんと俺は軽い怪我、相沢さんは深いのかどうか分からないけど、手の甲を噛み付かれたい

たからそれなりの怪我をしてこなはずとこつて、逃げていく魔族を深追いしなかつた。

愛美ちゃんが蒼井と俺の怪我を治しはじめたとき、ディリアさんと相沢さんがその場の浄化を始めていた。

浄化の様子はクリスタルを胸の前で両手で持つて、祈るような、また何かを占うようみも見える。浄化の力に合わせて周囲が淡く光るのが幻想的だった。

その様子に見入つていると、愛美ちゃんが治療を終えたのか「はい、終わり」と告げた。

「あ、愛美ちゃん、相沢さんなんだけど……」

「分かってる。怪我……してるんでしょう？」

「あ、うん」

相沢さんと蒼井との間も良くなり始めているし、とにかく仲違いしているような状態じゃない。それは愛美ちゃんも分かっているようだった。

「相沢さん」

浄化が終わるのを待つて相沢さんに声をかける。

「……なに？」

「手、怪我してるよね？」

明らかに動搖した表情をしたけど、それに気づかないふりをして怪我をした手を取った。

「愛美ちゃん」

「うん。相沢さん、手を出して」

「……」

返事をしない相沢さんに、勝手に愛美ちゃんの前に怪我をした手を出すと石を持った手を上にかざして治療を始める。

相沢さんの手が逃げないよう、「元は治療が終わるまで手首を押さえていた。

そう、明らかに、相沢さんは『逃げ』よじとしていた。
でもそこまでの原因が分からなくて、やつぱり気づかないふりをした。

「あ、ありがとうございます……」

治療を終えたあと、ちこちな声でそれだけ言つと慌てて離れる。
午前中の話をしながらの和やかな雰囲気とも、棘のような言葉による拒絶とも違つ。どうこうの態度をとればいいのか分からない、といったほうがいいのか。

「どうしたのかな？」

「さあ？ まあ、今までこっちも大人気ない態度とつてきたから、怪我の治療をしてもらえたと思わなかつたから……とか？」

愛美ちゃんも相沢さんの態度がおかしく思つたのか、首を傾げながら呟いた。それに少し違つと思つたけど、思つても答えないと答へると。

「そりや、確かにしなかつたけど……氣にはしてたんだよ。でも声かけにくくて。それに相沢さんも怪我しても痛いとも言わないしつて、言い訳だよね。思つても動かなかつたら意味ないのに」「うん、まあ……それは俺も同じだから、ホント、言い訳になっちやうけど」

愛美ちゃんは周りから強く言われたら反論できないような性格だし、俺は事なかれ主義だし。そんなのが一人揃っていても、なかなか踏み切れないんだ。

今回は、だいぶ周囲の空気が軟化したせいで動くことができたけど。でも、逆にいえば、雰囲気が変わらなければ動けなかつたわけ

で

「情けないよなあ」

ぼやきながら空を見上げた。

21・5 立ち位置（後書き）

今まで主人公視点は番外編として X・5 で出してましたが、これからは主人公に代わって本編を進めることがあるので、普通にカウントしていきます。

22 水晶の幻影（前書き）

ここからちょっと暗めな話になります。

歩きなれない人たちと歩くと、どうしても歩く速度がゆっくりになつていく気がする。

かといって慣れない歩きとドラゴンの登場でみんな疲れきついて、他愛無い会話などする気力もないようだつた。

そのためひたすら黙々と歩く。

沈黙の中、ただ歩くという行為は、鬱々とした気持ちになつてきて、ここに来てからの暴言に對しての罪悪感がぐるぐると頭の中を回り始める。

それは考えれば考えるほど、どんどん暗い思考になつていぐ。確かに言い過ぎてこじとも認める。でも、必要なこと也有つたはず。知らない世界。知らない生活。知らない力。未知なるものに対しても警戒心を持つのは当然だ。だから、みんなに対する忠告も至極当然。

……違う。

自分が知つているから忠告を、なんて、他の人を下に見ている証拠だ。

蒼井くんはじめ、みんなでなんとか乗り切ろうとしているのに、元水を差すような発言をして、場合には実行して。そうして注意を促すふりをしながら、みんなより上にいるのだと誇示している。

頭の片隅でそれを理解しながら、それでもその態度を崩さない。そうしなければ、私は

考え始めたら止まらなくて、歩いている間あれこれ考えてしまい、精神的に疲れてしまった。

駄目だ、考へては駄目。どんな田で見られようが、嫌われようがそれでいい。そう思つたのは私自身だ。

元の世界に戻つてから、こんなことに巻き込まれたわけじゃない

と。怪我をして遅れて入った学校に友だちに馴染めない そんな私でなければいけない。ここであつたことをこれ以上、話すわけにはいかない。知られてはいけない、と。

深呼吸してもう一度頭にそれを叩き込んだ。

どれだけ歩いたのか分からぬけど、とりあえず村に着いた。みんな疲れていて、早々に休めるところを探す。体力のあるヴァイスさんが探しにいって、それからティリアさんが話をつける。泊る場所は早々に決まった。

ふ、と氣づくと、この村からは瘴気が感じられず、澄んだ空気だといふことに氣づく。

………… めでか………… ね。あるわけない。

「カリソンさん」

頭をよざつた可能性と同時にトイリアさんに声をかけられてびくりとした。

「は、はい」

「あの、例の……クリスタルがまたあるそなんなんです」

「…………やつぱり」

しかも話によれば前と同じくらい大きさだといつ。

確かに前にお守り代わりにおいてきた覚えはある。でも、あくまで『お守り』程度のものだ。使つには『力』のある人から常に力を送り続けてもららうしかない。

加えて一センチ程度の玉だつた水晶を占い師が使うような大きさに成長させるなんて普通じゃない。

やっぱり私がおいてきたものじゃなくて、この世界の七不思議のひとつだつたりして……。

なんとなく気になつて、ディリアさんにむづ一度見てみたいんだけど、と言つてみると、荷物を置いてからゆつくり見に行きましたと答えられた。

ディリアさんもあの水晶が気になるらしく。もう一度じつくり見てみたいと言われた。

部屋割りは前と同じくディリアさんと一緒に。もともと篠原さんと堤さんは仲がいいから、一人部屋だと自然との組み合わせになる。野宿のときには馬車で雑魚寝状態だけど。

馬車が駄目になつたせいで増えた荷物を部屋へと入れて適当に置くと、ディリアさんと一緒に水晶を祀つてある部屋へと向かう。

そう、あの水晶はその威力から大事に祀られているのだ。そのため普段は人が触れられないよう大事に保管されている。持ち去られないために、外から来る人には口外しないという暗黙の了解があるらしい。

どんな力が分からぬけれど、魔族を寄せ付けず浄化してくれる水晶は彼らにとって貴重だろう。そんな村を守る水晶を見ることができるのは、ディリアさんの巫女という立場のおかげだった。

普通より厚い木でできている扉を村の人々が開けると、水晶は中央に厚手の布の上に置かれていた。

本当に、水晶のためだけの部屋。でも、中はこまめに掃除されているのか、埃っぽさはなかった。

「これが……」

ディリアさんが近づいて、それから案内してくれた村の人々に触れ

てもいいか尋ねる。

村人は少し考えたものの、「どうぞ」と答えた。うーん、地位があると便利だねえ、などとそのやり取りを見ていたけど、ディリアさんが触つてあちこちから見た後、呼ばれた。

「はい?」

「カリンさんはこれを見てどう思いますか?」

と、水晶を田の前に出された。

水晶は傷や内包物がほとんどなく、澄んだ氣を発している。これなら十分魔族避けになるだろ?と思われるほど、透明感のある『力』。

やっぱりおかしい。

あのとき置いてきたのは、お守りで売っているブレスレットをばらしたものだ。それも気休め程度にしか力をこめていない。こんなに長く続くはずもないし、大きくなることもない。

「カリンさん、どうですか?」

「どう、と言わても……やっぱり分かりませんよ。…………って、あれ? ちょっとといいですか?」

ディリアさんが持つている水晶を眺めていると、きれいな曲線を描いているはずなのに、一部だけ小さくへこんだところを見つける。そのへこみが気になつて、ディリアさんから水晶を受け取つた。

水晶の重みを感じた途端、ぐらりと視界が揺れる。

なに?'

思わず落としそうになる水晶に力をこめる。

すると、田の前が真っ暗になった。それから浮かんでくる光景。

プレスレットを見て買ったといふ。そして身につけてからの日常生活。

ああ、これは私が置いていったものの一つだつたんだ。

目の前の光景は、水晶に残つた記憶なんだろう。

それからも次から次へと目の前の光景は変わっていく。

変わらない日常生活。

なのに、突然、呼ばれて、そして、剣を持たされ魔族と戦うことになった。

最初の頃は自分の意思で戦うというより、剣に主導権を握られていて、目の前にいて自分に敵意を持つているものは、すべて剣に敵とみなされ倒された。

そうだ。私は、ただ剣を持っているだけだった。剣に組み込まれたプログラムのようなものに逆らえず、ただ目の前の敵を倒し続けて

そして、目の前に赤い血が飛び散った。

「いやああああっ！－！」

目の前の光景に思わず悲鳴を上げる。

ディリアさんの声が聞こえた気がしたけど、自分の悲鳴に消されてしまつてよく分からない。

たぶん、水晶を抱えながら膝を突いたんだと思ひ。足に軽く衝撃を感じる。

それよりも、もう何も見たくない、と目を瞑つた。

もう嫌だ、もう見たくない。変えられない過去などこれ以上見たくない。

これ以上、思い出せないで！

目を瞑つて暗闇の中、そう願つた。

その願いが届いたのか分からぬ。けど、目の前の光景は消えて、何もない静かな状態になる。

あれ、ディリアさんは？　さすがにいきなり叫び声を聞いて何もないわけがないし、外には村の人だつている。

それなのにやけに静かで、それが気になつて少しずつ目を開ける。すると、真っ暗だった周囲はある程度明るくなつていて、その中で夜を連想させる紫黒の双眸が私を見下ろしていた。

「あ……」

待つて　　そつ言いかけた途端、前から突風が吹いて腕でとつさに顔を隠して目を守る。

その風が收まるごと、今度は眩しいほどの光が溢れた。目の前には薄い青緑の髪を揺らしながら優しげに見つめる美女がいた。

「つ、リート……？」

本物、の『リート』だ。

風の精霊王　　リート。前のときにも、最初に会った精霊王。

風の精霊たちに『リート』と名づけたのは、彼女の名前だったから。そして、彼女とそつくりだったから。

「でも、どうして……」

「ここには精靈王などがいなくて、みんな同じだと『リート』たちから聞いたのに。

私の疑問に答えることなく、風の精靈王リートはわずかに笑みを浮かべながら、その形を崩していく。彼女から離れたものはちいさな光になつて、あちこちへと飛んでいった。

ああ、そうか。なぜこの世界に『精靈王』がないのか、やつと分かつた。

それは、一百年前に魔族の瘴氣で傷ついたから。

人もそうちだつたように、精靈たちもその数を減らした。特に、風、土、水が。だから、その数を補うために、精靈王たちは消えたのだ。王という圧倒的な力を捨てて、精靈を生み出す源になるために。

「好意的だつたのは、なんとなくでも覚えていてくれたせいなのかな……？」

自由気ままな風の精靈王は、異世界から呼ばれた私に興味を持つて、彼女のほうから近づいてきた。私も人でなく、ただ的好奇心で来る彼女には言葉の裏を探るような必要もなく、普通に会話ができるた。

懐かしい存在を目にして、そしてどうして同じ世界なら『精靈王』と呼べるべきものがいなかつたのか、やつと分かつた。

そして、紛れもなく、ここは前にもきた世界なのだと改めて思い知る。それがいいのか悪いのか分からない。知つているから先が分かつていいこともあり、知つているから嫌なことも突きつけられる。

「どうやらこじる、魔王を倒さないと戻れないんだろうね」

それでも、前の魔王より力はないのは少しばかりの幸運なのか。それとも、好戦的なために近づくまで厄介になるか。

でもそれをするのは……

「私じゃない」

RJ喰陣の真ん中にいたのは蒼井くんだった。今回必要なのは、きっと蒼井くんのほう。

「どうあえず……サポートに回ればいいのかな?」

魔王と対峙するのが自分じゃないと分かつて、少しばかりほつとした。

僅かに気が緩んだ瞬間、雪崩のように押し寄せてきた光景に意識が押しつぶされて、今度こそ暗闇に包まれた。

22 水晶の幻影（後書き）

1 / 18 加筆修正。

23 感情と責任と（前書き）

今回は「ディリア」一人称で進みます。

「ディリア」

「誰か！ 誰かいませんか！？」

倒れたカリンさんを起こしながら、外にいるであろう人たちに声をかけました。思ったとおり、すぐ外に人がいて、どうしたのかと尋ねてきます。

「連れが……突然倒れたのです」

突然というのは違うけれど、と思つものの、説明できないためそれは省きました。

彼らは倒れたカリンさんより、クリスタルのほうが心配だつたようで、「それよりもクリスタルは……？」と心配そうな顔で尋ねてきます。少しムツとしたものの、少し前の自分もこのようだつたのか、と思い知らされたようでした。

とりあえず、心のもやもやしているものはおいておいて、気づいてカリンさんの体を仰向けにさせると、クリスタルを抱えたまま涙を流して氣を失っているカリンさんが目に入りました。

「クリスタルは！？」

カリンさんが抱えているクリスタルに傷がないか確認しようとする人たちにのけられて、倒れそうになつたので手をついて体を支えました。

人よりも村を守る大事なクリスタルを それは分かります。それにカリンさんの過去を知つても、まだ魔王討伐の一員として使お

うとしている私に、それを言つ権利もないことも。

それでも……

「クリスタルはカリンさんが抱えていたから大丈夫です。それよりも、彼女を部屋まで運んでください」

倒れたままのカリンさんを放つておくことはできません。彼らにそつと運ぶように指示して、なんとか借りた部屋の寝台へと寝かせました。

そつと上掛けをかけようとすると、いまだにカリンさんの目から涙が伝わってくるのが見えました。

「カリンさん……」

「…………めん…………りー…………で……」

ちいさな呟きは掠れていってすべてが聞こえたわけではありませんでした。けれど、誰かの名前だということは分かりました。

昔の……仲間、でしうつか？

でも、カリンさんが言つには、一緒に旅をしていた人たちを見張りだといつていたはずです。なのに、なぜこのようなときに思い出すのでしょうか？

考えてみれば、私はカリンさんの本心をあまり知らないところにとに気づきました。

前に召喚された勇者であり、いやいやながら魔族を倒していくのは聞いています。そのときに、多少なりとも彼女の気持ちも聞きました。

けれど、それだけではないように見えてきました。

今思つと、あのときでさえ彼女は一段高い場所から　　といつよ
り、他人事のように話をしていました。あれが嘘とは言い切れないけれど、でも、あのときの気持ちがカリンさんのすべてじゃない、

と思いました。

今になって、なぜそう思つたのかは分かりませんが……

思案していると、戸がたたかれる音がしました。

私は静かに椅子から立ち上がり、カリンさんから離れて戸をゆつくりと開けると、目の前には、ハヤト様はじめ、ヴァイス隊長にレーンさんまでいました。

「相沢が倒れたって聞いたけど……大丈夫なのか？」

ハヤト様が心配そうに尋ねます。

それに対して、私は今は眠っているだけ伝えました。泣いているということを話すと、どうしてか尋ねられると思ったからです。でも、カリンさんはどちらかというと嫌われようとしていたので、揃つて様子を見に来たのが不思議でした。

「どうしてこちらへ？」

気になつて尋ねると、村の人から聞いたといいます。

でも、皆揃つてというのが不思議なのです。ヴァイス隊長は性格から分かります。レーンさんはカリンさんと親しげに話をしていたので、仲がいいのでしょうか。この人も分かれります。

分からなのは、勇者として召喚した方々のことです。

「そりや、倒れたって聞けば、心配するじゃないか」と、ハヤト様。

「そうだね、それでなくても相沢さんは前に大怪我してるみたいだし

と、言つたのはヨーヨーさんでした。

「怪我ならわたし、治せるし」

小さな声でそう言ったのは、マナミさんでした。

「私は別に……みんな来るから来ただけ」

そつそつとぼやいたのは、ヒリさん。

そういうえば、この人はあからさまにカリンさんへの感情を出していました。

まあ、ヒリさんのほうが普通の反応かもしません。敵意を向けてくる人に対し、大丈夫だからと手を伸ばしてくれる人のほうが少ないのですから。

「そうですか。とりあえず、今は眠って」

「どうしたの？」

私の言葉を遮るように後ろからカリンさんの声が聞こえました。顔色はまだ悪いものの、意識はしつかりしているようです。

皆が心配して見に来てくれたことを伝えると、カリンさんは一言だけ「そう」と答えました。

ふとした違和感を感じて、何か言おうとしたところ、カリンさんのほうが先に。

「悪いけど、一人にしてくれる？ まだちょっとめまいが残ってるみたい」

抑揚のない声に、いつものカリンさんに戻っていることに気がつきました。

じぶなると、カリンさんのほうから何か話してくれぬことはありません。

ません。「分かりました」と答えて、ハヤト様たちを促して部屋の扉を閉めました。

その様子を見ていたエリさんから、「なにあの態度」という文句が出ます。それを宥めつつ、カリンさんには聞こえない場所まで移動しました。

「で、なにがどうしたんだ？」

「倒れたって聞いたけど、やっぱり過労？ 魔族退治と浄化の両方やっているからきつかったのかな？」

と、ハヤト様とヨーライチさんが心配して尋ねます。

カリンさんが前の勇者だったということは、本人も隠したがつていましたし、ハヤト様をはじめ、他の方からやる気がなくなつてしまつと困ります。

前回勇者だったカリンさんがやればいいだろう、という流れになつてしまつては私たちが困るのです。召喚陣を使つて呼び出された人は、他の人より強いのです。その人たちが戦線離脱というのは、私たちにとって痛手。ここまで考えて、一方でカリンさんを気遣いながら、一方で都合よく利用しているのだと改めて気付かれます。

分かつては、いるのです。

ですが、皆と接触していると、この国の、この世界のためという気持ちが薄らぎ、個人を心配してしまつ。でも、その心配も結局は魔王を討つために必要な人材だから、という理由がつきます。

そんな矛盾を、カリンさんは知つてているのかもれない。

だから、彼女は自分の本心を明かさないのでしょう。それでなくとも、彼女は前回のときの同行者たちは“見張り”だったと言つて

いました。そこから、私たちを信用していなのは明らかなのに。彼ら個人に対する気持ちと、この世界　自分たちの命とを常に天秤にかけて、釣り合いの取れるようになじみつかずの状態でいる私を、信用してほしいと思うのが無理なのでしょう。

ここまでくると、自分の傲慢さや愚かさを受けとめるしかありませんでした。

「ディリアさん、ディリアさんまで……いつたいどうしたんですか？」

マナミさんの高い声で現実に戻り、「すみませんでした」と答えた。

「本当にどうしたんですか？」

ヨーハンさんがもう一度尋ねます。
とりあえず、あつた事実だけを話しました。

「それが、村全体を浄化してくれるようなクリスタルがあったので、それをみさせてもらつたのです。そのとき、浄化の力の強いカリンさんにも一緒に見てもらつて……そうしたら、突然、カリンさんが倒れてしまったのです」

「どうしてですか？　浄化つて、そんな誰かを倒したりするような力じゃないですよね？」

「分かりません。本当に、分からぬのです」

浄化の力は人に作用しません。瘴気に蝕まれている場合は、それが消え正常な状態に戻ります。そのとき、長い間瘴気に当たつていた場合は疲労で倒れる人がいます。でも、カリンさんは瘴気に蝕まではいませんでした。

「やつぱり疲れが溜まっていたんじゃないかな？」

「やつだなあ、カリント戦闘と浄化の両方をしていたし」

と、ミーティチさんが心配そうに言つのに、ヴァイス隊長が付け加えるよつて言います。

確かにそれに対しては申し訳ないと思つのです。戦つて疲れているところに、さらに浄化の力まで使わせるのは、体に負担をかけるでしょう。

ですが、浄化できるのはこの中ではカリントさんと私だけです。マナミさんも少しほどりますが、魔族を退治した後の強い瘴気を浄化できるまでの力はありません。

「とりあえず……ここで一、二日休ませてもらいましょう

「そうだな

「ですね」

気休めにしかなりませんが、休息は必要です。それに、ここには村全体を浄化できるクリスタルがあるため、魔族の襲撃もないでしょう。

「足さんも、少し休んでください。馬車もなくなってしまったので、徒歩による移動になるか、もしくは馬車を調達する必要がありますから」

と、ここで、いつたん言葉を切つた。

「ヴァイス隊長」

「はい？」

「あなたなら、ここから城まで一人で戻れますか？」

「え、まあ、一応。ここまでは道も浄化をされますからね
「なら……」

カリントさんが呟いた言葉は、誰かの名前のはずです。

誰か　それは、前回の魔王討伐のときについた、誰かではないでしょうか？　なら、その人たちには多少なりとも心を許していたはずです。そこから、何か分かるかも知れない。

「戻つたら、前回の魔王討伐に加わった人たちのことを調べてください」

魔王討伐に加わるのは、腕に自信がある者にとっては名誉なこと。そして、その名は後世まで記録されます。

「いきなりなにを……」

「いえ、カリントさんが、もしかしたらクリスタルを通して何かを“覗た”のかもしれないのです」

そう、カリントさんはきっと、心に触れる何かを覗て、そしていつもどおりでいられなかつた。でも、気がついて意識がはつきりしてきたら、それを取り繕うことをはじめた　と、つていいでしょう。

なら、あのとき呟いた“誰か”は、彼女にとって、それなりに大事な人たちでしょう。

「名前は……よく聞き取れなかつたのですが、語尾に“ヨル”がつく者、そして、“リート”、“ヒルデ”……“クヴェ”か“クヴェー”という名の者を」

今ままの私たちではありません。力が足りません。

でも、経験のあるカリンさんの協力が得られれば、かなり変わるものでしょう。なにより、このギクシャクした関係が少しあは変わるかもしれません。

その手がかりが、彼女の口から出た者たちのような気がするのです。

「お願いします、ヴァイス隊長。あと、皆さんはこのことはカリンさんには内密に」

24 思い出した約束

一人になりたかった。

水晶が見せた映像が頭の中に押し寄せてきて、それを整理するためにも、心を落ち着かせるためにも一人になりたかった。

心配して様子を見にきてくれたみんなを追い出してから、仰向けになつて天井を仰いだ。

「今になつて……」

嫌というほど、この世界が前に呼び出された世界だと、認識せざるを得なかつた。

どうして私だつたんだろう？ 霊感があつたけど、それだけだ。格闘技を身につけていたわけじゃない。どこかの軍隊なんかで生きる術を叩き込まれたわけじゃない。

「まあ、それを言つなら、蒼井くんだつてそつなんだけど……」

剣道を習つていたけど、そこで一番という強さじやなかつたはず。大会に出るくらいだから、それなりの腕はあるけど、優勝したとは聞いていない。

何をもつて『強さ』の基準にするのか分からぬ。

『力』が強さの基準だというのなら、それは『意思』なんだろうか？

そんなことはない。自分で言つのもなんだけど、私の気持ちは搖らいでばかりだ。人には見えないものを怖がつて、それを見て怖がつている自分を、他人に見られるのが嫌でなるべく親しい人は作らなかつた。

私に、『友人』と呼べる人はいない。それでいい、と思つていた。

この世界から戻つて後は、それはさりに強くなつた。

今もそれは変わつて

「あーつもん、違つつてば！ 強さの基準を考えていたのに……なんで自己嫌悪になつてるかなあ？」

あまりの馬鹿らしさに、顔の上で両腕を交差させて、顔を隠すようにした。誰もいないから、そんな必要などどこにもないのは分かっていたけど。

はー、とため息をついて、また考え始める。

要するに、この世界の『力』について分かつていなければ、その『力』が強ければ魔族を倒すことができる。また、他の世界から召喚された者は世界と世界の狭間を渡つてくるために、無意識にその『力』が強くなること。

前回とあわせて、私が知つているのはこのくらいか。

ああ、あと、その『力』には属性などないけど、この世界では属性に当てはめて、無意識に『力』の幅を狭めてこる。

なんにしろ、蒼井くんはじめ私たちは魔王を倒すところ以外に道がないこと。

「馬鹿馬鹿しい」

他の世界が繁栄しようと滅亡しようと、果ては魔王が支配したとしても、私たちには関係ない。

けど、還るために魔王を倒さなければならない。

ただひとつ幸運といえるのは、還る方法がちゃんとあること。これは一度戻つた私が実証済みだ。返還陣さえあれば戻ることができる。

その返還陣を使うのが問題だったけど。

残念なことに、返還陣の詳細まで覚えていない。あれを記した手

帳があれば別だつたけど、戻つて怪我をしたときに駄目になつた。ディリアさんに打ち明けたときは、それを知られたくないて作れると言つたけど、実は詳細な部分はあやふやだった。

あとはこの国の返還陣。でも、あれを使うには、魔王を倒して戻らなければ

「あつー。」

ああ、私としたことが失念してた。

あそこに行けば、自分が作った返還陣があることに。完全に形を保つてゐるかは不明だけど、新たに作るものも手間だし、このまま皆といふのなら、必然と魔王の居城まで行く。

まあ、場所が場所だけに、魔王を倒さなければ返還陣は使えないだろうけど、一人で行くより皆と一緒に行つたほうが返還陣までたどり着ける確率は高い。

「よしひー。」

思い切り起きて掛け声を上げた。弱気になつてきた自分の喝を入れるために。

この世界の人の思惑にのるのは癪だけ。でも、自分のためだと思えばいい。最終的に還るのなら、後のことなど

ああ、でも……こんな身勝手な自分を、案じてくれる存在が、この世界にはいたんだっけ……

ふ、と昔に思いを馳せると、少し懐かしい気持ちと寂しさを感じて胸が痛んだ。

リート、エルデ、クヴェル……人ではないものたちだつたけれど……でも、私にとつて大事な存在だつた。

そして

「『』みんなさー。あなたとの約束を忘れてた……」

守りたいと言つたあなたの気持ちを、私はすっかり忘れていた。
その気持ちのために、あなたはすべてを投げ出したのに。
それなのに、私は自分のことばかり考えている。ここであつたことは“夢”で終わらせるこことなんてできないのに。
やつぱり眞と魔王の居城に向かおう。そして

「約束は……まもいなくちや、ね？ パル」

窓から、すでに暗くなつた空を見つめて呟いた。

夕食の時間になつて呼ばれていくと、皆に心配された。「大丈夫か?」と尋ねてくるみんなに、なんとか「もう大丈夫」と答えた。心配の度合いは違うけど、心配されるというのが信じられなかつた。心配されるほど仲がよくないのは自分でも分かつている。

でも考えてみれば、みんなはここに来るまで普通に高校生をしていたんだ。本当だつたら、学校に通つて友だちと話して、その後は家に帰つてテレビを見たりゲームをしたり……そんな生活。

その中には、人間でなくとも生き物を“殺す”というようなことはほとんどないだろうし、また、殺されるという心配もない。

そんな人たちだから、私が皆に合わせなくとも嫌味を言つても、それでもこうして歩み寄ろうとしてくれるんだらう。

一番、大人気ないのは自分だ。この世界を知つている、『力』の使い方を知つているという驕り。そのくせ、一度も巻き込まれたという自己憐憫。

なんて考へていると、篠原さんが「本当に大丈夫?」と聞いてくる。

どうもぐるぐる考へていたのを、調子が悪くて返事できなかつたと見られたようだつた。

「あ、ありがとう。大丈夫、心配かけてごめんなさい」「そう、よかつた」

するりとたた言葉に、篠原さんは安心したのか、緊張が解けて笑みを浮かべた。つられて蒼井くん、大野くんも表情が柔らかくなり、堤さんは少し呆れた顔で肩を竦めた。

みんなの表情になんともいえない気持ちになつて横を向くと、ティリアさんと目が合つた。

そして、そこにヴァイスさんとレーレンがいなことばらば。

「あれ、ヴァイスさんとレーレンは？」

「あ、それは……」

ちょっと答えてくそつなディリアさん。

私が倒れている間に何かあったんだろうか？ それとなく聞いてみようかと思つたとき。

「レーレンさんはこの村で必要なものをそろえてもらつてゐる。あと、ヴァイスさんは調べ物でちょっと城まで戻るつてや」

答えたのは蒼井くんだった。

「調べ物？」

「ああ、ディリアさんに頼まれて」

「なにを？」

「さあ？ 僕には分かんね。でも、今戻るつてことは大事なことなんじやないのか。だからディリアさんも言いにくそつだつたみたいだし」

なあ、と蒼井くんがディリアさんのほうを向けば、ディリアさんはためらいがちに頷いた。

「俺たちって、ijiの世界のことほとんど知らないだろ。だから俺たちに話しても仕方ないつて判断したんじゃないのか」

「そ、だね」

そういうことなら仕方ないか。

それに、すべてを知ろうとしても無理があるし。なにより、あの水晶のほうが気になるんだよね。できればもう一回見たいんだけど

……

「じゃあ、ヴァイスさんが戻るまでどうするの？」

先に進むのか、それとも待つのか。

それによつて、あの水晶をもう一度見ることができるものかもしれない。

この辺の決定権はティリアさんかな、と思つてティリアさんを見る。

すると

「待つ予定です。カリンさんも倒れた後ですし、皆さんも疲れていますから。その間、少しは休憩することにしました」

「それってどれくらい？」

「魔族討伐をしながら……といつわけではないので、数日で戻つてこれるはずです。その間、体を休めるのもいいですし、力の鍛錬など何をしていても構いません」

「分かった。私はしばらくは休ませてもいい」

正直、いまだにあの変な感覚が残つていて、足元がなんとなく覚束ない。しばらくすれば治ると思うけど。だから、数日休めるのは嬉しかつた。

「え？ 相沢、俺の練習に付き合つてくれないのか？」

「は？ いつそんな話になつたわけ？」

「そういうえば、俺のも見てくれるつて言つてなかつたつけ？」

「ええ？ 大野くんまでなに言つてるの？」

なにより、私、倒れたばかりなんだけど……

そう思つけど、一人とも真面目な表情で尋ねてくる。

「もうひ、一人とも相沢さんが困つてるじゃない」

「どうしようとかと思つていると篠原さんが助けてくれる。

あー、本当に篠原さんつていい子だったんだなあ、なんて漫つて
いると、今度は堤さんが。

「ヴァイスさんが戻つてくるまで数日はかかるんでしょ。だったら、
とりあえず一日間は自主練。その間相沢さんは休むこと。その後に
練習の成果を見てもらつたら?」
と、具体的な提案をしてくれた。

「そうだね。相沢さんのこと考えてなかつた

「悪い」

「ううん。それより、篠原さん、堤さんありがとひ」「
「じゃあ、それぞれ予定が決まつたみたいだから、『ご飯にしよう』

と、この話はとりあえず終わりになる。

確かにご飯を目の前にして、延々話をするのもなんだし。

というか、話が長かつたせいで、シチュー冷めはじめるよ……。

みんなもそう思つたのか、一同に微妙な表情をした。

それにしても意外だつたな、本当に。

最後の台詞は早くご飯を食べたいから、という感じに思えたけど、
でも、助け舟を出してくれたのは確かだ。

結局、一介の高校生（もとの世界で、だけど）が、なにもかもを
背負えるわけでもないし、いきなり聖人君子にも、悪人にもなれない
のかも知れない。

知らない場所、知らない世界だけど、今いる自分を形作つたのは
日本でも平和な生活だ。

すでにもとが出来ているのに、他所に行つたからと早々変わるものではないのかもしない。

「ディリアさん」

「なんですか？」

部屋に戻つてディリアさんと一緒にいた後、ベッドに腰掛けながら話しかけた。

「今日はありがとう」

「いえ、当然のことです。それより、カリンさんに負担をかけさせてしまつてすみませんでした」

「ううん。今思つと」

「カリンさん？」

口に出すのは恥ずかしい。

こと、自分の失態については。

でも言わなければ。

「私が皆との間を険悪にしてたから」

「でも、仕方ないことかもしれません。誰もが協力的してくれるのはあります。特に自分に関係ないことに對してなんて……」

「うん、私、そう思つてた。でも……」

他の皆はそうじやなかつた。

気持ちの大きさはあるけど、ディリアさんたちの願いをかなえてやりたいと思つたり、一緒に来た人たちを思いやつたり。

思いやり 私に欠けていたものだ。

「すぐには無理かもしない。でも、皆との溝が埋まるまでは心が
けるよ。ただ、まだ……」

「まだ？」

「話せないこともあるから。私の中で整理できないことだから
」

それでも、みんなの思いやつを田の前にして、少しだけ、視野が
広がった気がした。

上手く言葉で表現できないけど、ここにきて私は一歩も動いてい
なかつた。

でも、今は少しだけ周りが見えるようになつて、近くにいる人に
近づいていく気になつた。

それはきっと、みんなの気持ちのおかげなんだろう。

予定通り、最初の一回はのんびり休んだ。できればその間にもう一度あの水晶を見たかったけど、倒れた原因があるに思う。ディリアさんに止められてしまった。

そういうして三田田　田の前には、蒼井くんと大野くんが立っている。

前にいったように、本当に特訓するらしい。

でも、このままいつても互いに力不足なのは違いない。力を存分に使えるように慣れておいたほうがいいのは確かだ。

私も経験があるとはいえ、ブランクがある。以前と同じレベルじゃない、という、理由から一人に付き合つて、同じように特訓したほうがいい。

この世界の『力』というのは、どういった原理で起るのかまったく解析されていない。

ただ、力を使える人と使えない人がいて、使える中でも強さが違うということ。使える属性が決まっていると誤解されていること。でも、それは違っていて、想像力で力の使い方は広くなる。たとえ、風ひとつでも

「単純」

ぼつり、と呟きながら、風を先に打ち出しながら向かってくる蒼井くんに対して、私は風を少しばかり向きを変えたあとに、蒼井くんの剣を受けた。

受けたといつても、蒼井くんは男の子だし、剣道をやっていただけあって、正面からの攻撃はかなり重い。だから、このまつばぜ

り合いなどしても、すぐに私のほうが押し負ける。

意識を集中して、土の精靈、エルデに心の中で頼む。

すると、蒼井くんの足元が崩れ、「つわっ」という声とともに剣にかかっていた重圧がなくなった。

そして、意地悪にも体勢を崩した蒼井くんに、追い討ちをかけるように一歩踏み込んで懐に入つて、剣の柄をお腹に叩き込んだ。

「ぐつ……」

うん、痛いよね。分かつてはいるんだけど……弱点を知つてそれを直さないと特訓の意味ないし。と、言い訳しつつ、お腹を押された蒼井くんを見た。

「……わる、い。ちょっと待つて、くれ……」

なんか……私、蒼井くんと稽古（？）してると性格悪くなる？
と思いつつも、現実的なことを言ひてみる。

「魔族は待つてくれないよ？」

「分かつて、る。が……」

「はいはい。少し休憩」

「サンキュー」

「……と、同時に攻撃方法のおさらいね」

「……」

「実践じゃないよ。ただのイメージ」

「……」

「時間もつたないしね」

「……鬼」

「なにか言った？」

「いや……」

こんなやり取りを見ていた大野くんが、横でぼそりと呟く。

「本当にスバルタなんだね、相沢さん」「わたしもびっくりした」

大野くんの呟きに同意したのは篠原さん。怪我をしたらすぐ治せるようになると、そばで見ているといって一緒にいる。

篠原さんの分野は治癒系だし、その治癒の稽古（？）も怪我人がいなければできないので、駄目とは言わなかった。

ただ、刺激が強いかもしないよ、とは言っておいたけど。

目の前で、好きな人と知り合いが切りあつて、どちらでも怪我をした というのは、世間一般（日本基準）では十分な刺激だろうから。日本を基準にしてはいけないと思うけど、生糞の日本人なので、それは無理。日本の平和が懐かしい。

あれ、違った。

日本のこととはいって、そんな理由で篠原さんが来ていて、堤さんも隣にいる。一人は仲がいいから何かとセツトでいるという感じがあるから、あまり違和感ないんだよね、と思っていると、強張つた表情した堤さんに声をかけられる。

「ちょっと、相沢さん」

「なに？」

「さつき地の力を使つたよね？」

堤さんは地の属性を持っていると思ってるので、地の力に関しては敏感なんだろう。少しばかり使つた力に気づいたようだつた。使つたというより、動いてもらつたというほうが正しいんだけど。でも精霊が動けば、力が使える人はそれなりに分かるから、それで

分かったんだね。タイミング的にも、私がなにかしたとしか思えないだろ？」

「あ、うん。ちょっと」

「なんで地の力が使えるわけ？ それに、せっしき蒼井とやりあつ前
だって風の力をなんとかしてたし……」

「それは俺も聞きたい。どうしてできるの？」

「うーん、それは……」

力に関しては蒼井くんにある程度説明してあつたけど……他の人は知らないんだよね。

さて、どうやって説明しようかな。

「ええと、私は属性が分からぬってことで、この剣を渡されたよ
ね？」

「うん」

「だけど、属性がないのに力が使えるって変だから、図書館で調べ
たり自分でいろいろ試してみて」

とりあえず、以前もここに来てるんで、力の使い方については詳
しいんです、なんてことは言えないでの、自分で調べたり試した結
果、属性なんて本当は合つてないものだと分かつたと説明した。

「まさか……」

「本当。一応相性みたいなのがあるから、たぶん一番あつてる相性
のものが属性として判断されるんだと思つ」

確かに相性というのはあると思うんだよね。相性というか、自分
に特化してる力の使い方みたいのが。

蒼井くんは勢いがあつて、あちこち愛想がよくて、人懐っこくて

そう、リートみたい。

大野くんは蒼井くんより一歩引いて周りを見てる感じ。落ち着いてるように見えて、それが、静かな湖とかを連想させる。

篠原さんは戦うつて感じじゃなくて、いると和ませてくれるような雰囲気を持つてる。（つて、最近観察しだして分かつたんだけどね）まさに癒しという感じ。

で、堤さん。田本にいたときも、しつかりとしているお姉さんといつイメージだつた。そして、仲のいい篠原さんを守らなきや、つて気持ちが、守護の力になつている気がする。

と、改めて四人を見た。

そして、それを言葉を選んで伝えると、四人は意外そうな顔をした。

「なんか変？」

気になつて尋ねると、篠原さんが。

「ううん。ただ……相沢さんつてわたしたちと距離を置いてるようだつたから、そんな風に見られているなんて思つてなかつた」

「俺も。かなり意外」

「ホント、私も」

「いろいろ考へてるのは思つてたけど、人が嫌いな感じに見えたからそこまでみてるとは思わなかつた」

口々に、實に意外だと言われ、私は一言「失礼な」とだけしかめつ面で返す。

「いや、悪い悪い」

と、あまり悪いと思つていらない蒼井くんの声。それに続くよつこ、

みんな口々に「『めんね』とか言つ。

でも、みんなと一線を引いていたのは私のほう。
だから仕方ないんだよね。そういう風に見られていても。

「うん、私のほうが悪かった。大野くんが言つよつに、人嫌いな
のは確かだし……だから、みんなで力を合わせて なんての、す
ごく違和感あつたし」

だつて、四人はよくしゃべつていて仲がいいつてのが分かつてい
た。

でも、その中に私が入るのは、違和感があつて。手を差し伸べて
くれてゐるのに、どうしてもその手を取れなかつた。今まで。

「で、でも……ありがと。それでも私に話しかけてくれて」

お礼を言つのはなんか照れくさかつたけど。でも、『優しさ』と
いつのを思い出したせいか、それに気づいたら嬉しくなつたのは本
当。

「べ、別に……当たり前だ。一緒にこの世界に来ちまつて、帰る
ためには自分で頑張らないといけないんだから」

「そうそう」

みんなで協力して魔王を倒して還る。

目的は分かつてゐるけど、成し遂げるには困難な道。だから協力
しあわなければならぬ。

「うん。頑張る」

「そだな。あ、やつと意見が一致したかい、あれと言われて首をかしげた。

はしゃこでいる蒼井くんに、あれと言われて首をかしげた。

「ん？ どうあべす手を出しだ」

「は？」

一応、言われたとおりに手を出すと、「両手じやない。片方」と
言われたので右手を残す。

すると、そこに蒼井くんの手が重なる。さらに大野くん、篠原さ
ん、堤さんが重ねていぐ。

ああ、これって手を合わせてみんなで「頑張るぞ、おー！」って
のね。と思つてみると、案の定、蒼井くんが。

「頑張つて魔王倒して日本帰るぞーー。」

と、声高に宣言した。

で、大野くんがそれに続けて「おーー」とか宣言する。女の子の
篠原さんと堤さんも同じように、ちゅうと声が小さじ間に合つ
に「おーー」と続く。

恥ずかしいな……と、思つても、一緒に頑張ると決めたので、
小声ながらも「おー」と応えた。

その日の夜は羽目を外すすぎた　かもしだい。

昼間のノリで夕食時も過ごして、うつかり果実酒に手をつけてしまった。いつもなら、黙々と食べて終わるだけだったのに。この世界には飲酒に関して年齢制限がない。そのため、怒られることはなかつたけど、確実に酔つ払いが五人出来上がつた。（いやほら、私達はまだ未成年でお酒を飲むのには慣れていないから……）
つて、言い訳なのは分かつてゐるけど、口当たりはいいし、冷えていてお酒だと気づいたときにはある程度飲んじやつた後だつたから）
と、言い訳に言い訳を重ねても仕方ないけど、そんな感じでいつもとは違う夕食になつた。

もちろんこれで心を許した本当の仲間になつたわけじゃないのは分かつてゐる。それはみんなも同じだと思つし。

でも、みんなと私の間にあつた壁が薄くなつたのは確かだ。少なくとも、形からでも入ろうとしている。それは、きつといふことなんだろう。

は一つと大きく息を吐きながら、寝台にゴロリと転がつた。

「なにがあつたのですか？」

上のほうから聞こえる声は、もう耳に馴染んでしまつたディリアさんの中だつた。

「まあ、いろいろ

「私には言えないことですか？」

「うーん、別にそういうわけじゃないけど。ただ、本当にいろいろありすぎて……自分の中でも整理するのが大変なくらい」

少し寂しそうな表情の「ディリリアさん」に、苦笑しながら答える。

そういえば、ディリリアさんともなんだかんだ言いながら、同じ部屋で寝泊りしたり、みんなにまだ言えない話をしている。

言えることと、言えないこと それは相手によって違つ。

「ねえ、ディリリアさんはどうして巫女をしているの? ビハツヒ選ばれるの?」

ふと気づいた疑問を尋ねると、ディリリアさんは目を瞠つた。聞かれるとは思わなかつたことなのか、聞かれたくなかったことなのか。

「ディリリアさん?」ともう一度名前を呼ぶと、ディリリアさんは気を取り直したのか、緊張した表情が諦めのよつた寂しそうな表情になつた。

「すみません。そんなことを聞かれるとは思ひませんでしたので」「んー…深い意味はないんだけど……」

「そう、ですか。私にすると、カリンさんは何でも知つてそういう気がして」

「は? ないない」

蒼井くんたちよりは知つてこるだらうナゾ、ディリリアさんはどうこの世界について詳しくはない。一部詳しこのせ、一百年前の魔王討伐に関してのみだ。

この世界の事情 特に、今に關しては「ディリリアさんのおつがせつたい詳しい なんて思つていふと。

「前に……」

「はい?」

「カリンさんに、この世界のことを聞かれましたよね

「あ、うん。それが?」

「あのとき分からないと答えたのは、嘘ではありません。もちろん、意地悪でもないですよ」

と、ディリアさんは少し軽い口調に戻し、茶田つ眞を出でつけた。

けど、その表情はどこかわざついて……

「ディリアさん？」

「すみません。本当に、私は知らないのです。この世界のこと。自分のことすらも……」「……ええと、それって……？」

ディリアさんの話が理解できないいると、ディリアさんが困ったような顔をして。

「物心ついたときには、すでに城の一角にある神殿にいたのです。ですから、私には家族の記憶もありませんし、神殿の中のことしか分からぬんです」

「物心ついたときから？　家族も知らないの？」

「ええ、『巫女』としての力は少し特殊で……十一年毎にその年の一番最初に生まれた力を持つ子どもがなるのです」「なんか……特殊な決まりだね。なんかあるの？」

十一年に一度、力を持つて生まれた一番最初の子ども　どこからそんな選び方をするんだろうか。

まあ、そもそも魔法とは違う力があつたりするし、今では属性がどうのということけど、実際は方向性だけで、どんな力でも使える。その日に生まれたから、あなたは巫女だといわれ、そのための力を学べば、その力だけが秀でるつてこともある。

が、なんで十一年？

と疑問に思つてゐると、ディリアさんは私の疑問を読み取つたのか、十一年の意味を教えてくれた。

「「」の世界で、私たちが住む国は、最後にできた十一番めの国になります」

「え？ でも、地図を見たとき……」

「ええ、その後いろいろあって、国の名前と違つていますが……はあるか昔、まだ、人が国を作つてゐる間の話です。まだ魔族と対抗するだけの力もろくになく、魔王の居城より離れたところからまたまり、國ができ始めました。そうして、最後に、一番魔王の居城に近いこの地にできたのが、この国 シヴェルフなんです」

「それが十一番め……」

「どうやら、今はあちこちに魔族が点在するようになつて、国として機能しなくなつたところや、そういうたとこひを避けるために分裂して、国の数は増えたり減つたりという状態らしい。」

逆に「」の国は魔王の居城に一番近いけど、他の国より土地はやら広いらしい。半分が魔族に占められているから、どこまでが国と呼べるのかは分からないけど。

とりあえず、十一番めにできた国と「」とで、「」の国は十一というのが特別になつてゐるらしい。

そして、ディリアさんはその年に力を持つて生まれた最初の子のため、すぐに親と引き離され、神殿の中で育つたという。ちなみに、どこで生まれようが、先代巫女が感じ取るため見逃したことはないという。

先代といつてもまだ健在。十一年だからね。先代も先々代も、そして、ディリアさんの後継者も。

彼女たち、すべてが特別な『巫女』なのだと。その中で、十代後半から二十台前半の人が、最高責任者になるらしい。

最高位の巫女 なんて言われているから、お嬢さんなイメージが強かつたけど、今の話を聞いて少しだけディリアさんに対する見方が変わった。

世間を知らないお嬢さんなのは変わらないけど、それ以上に、普通の人の生活をまったく知らないのだ。

ディリアさんたちは、巫女に選ばれてしまつた以上、一生この国に対してその身を捧げる事になる。この世界の力は純潔でなければならぬという必要性はない。そのため、死ぬまで巫女という枷から逃れられないといつ。

しかも、結婚できても、ほぼ政略結婚でしかない、と。

「カリンさんでも驚きましたか？」

「う、うん。前のときはそんな話なかつたし……そもそも、召喚した本人は城にいたときまでしか顔を合わせなかつたからね。私も、会えば元の世界に還せとしか言わなかつたから、向ひつのはうが避けていたし」

「あら…… そうだったんですね？」

「うん、まあ。逆に、巫女であるディリアさんと、ここまで話をす るような関係になるとは思わなかつた……かな？」

人のつながりとは、意外なところで繋がつていいくのかもしれない。今のディリアさんを見てから、昼間のみんなの顔を思い出した。壁がすべて取り払われたわけじゃないけど、それでも最初のときから変わつてきている。

少しずつでも一緒に力の使い方を試して、そのたびに会話が増えて、笑つて……皆ともつといろいろな経験をするんだひつ。

きっと、この旅が終わる頃には、皆のことは一生忘れられない存

在なつて いる
改めて、 そう感じた。

三日なんびりして と、うわけでもないけど、稽古とかしてた
し、四日はこれからどうするのかという話になつた。
ディリアさんは城に戻ったヴァイスさんを待ちたいようで、もう
しばらく滞在して、それからという。
でも、蒼井くんたちは、急がなくていいのかと心配になつてい
るようだつた。

確かに、一度平和な状態に戻つてしまつて、またあの緊張状態に
慣れるには時間がかかるし、抵抗も出る。

まあ、一番は 戻つたときのことだらう。

ふと、稽古の途中で、大野くんが急に自分たちは今、向こうでど
ういう状態なんだらう と呟いたところから始まつた。急にいな
くなつたのだから、失踪、行方不明、誘拐という単語が口からこぼ
れていく。

それらを聞いて、みんな急に慌てだした。

……そりや そうだらう。戻れるつて安心してたけど、こざ戻つて
みると、こっちで過ごした時間の分、向こうでも過ぎているんじや
ないかつて思うのは当然だらう。

私はこっちの世界と向こうの世界との時間の流れの違いを知つて
いるけど、さすがにその辺はまだ言えない。言えば、どうして知つ
ているんだと聞かれてしまうから。

そしてそれは……私が前にこの世界に来たことが分かつてしまつ
から……

みんなすごく心配しているのに、本当のことをいえないのがもど
かしい。みんなとの距離が縮まる分、罪悪感が増える気がする。

結局、六日間の間、ヴァイスさんは戻つてこなくて、七田田の朝を迎えた。

最近では食堂にしている部屋に入ると、すぐに「おはよう」とみんなと挨拶を交わす。ぎこちなさはあまり感じられず、努力して笑顔を作らなくても済んだ。

「今日はどうするの？」

「もちろん、ヴァイスさん待ちなら、また稽古や……」この世界の力つて、使い始めると結構面白いからな

「蒼井くんたら……」

「でも、私もそう思うよ。私の場合、『地』だから、できる」とはあまりないって思つてたけど、そうでもないし

「堤さんまで……」

最近では模擬戦のよごなこともして、力の使い方のバリエーションを増やしている。それに堤さんも加わるようになつて、昨日、攻撃方法を思いついたところだった。そのせいか、堤さんも楽しそうに加わる。

篠原さんの力はほとんど癒しの力のみで、模擬戦で負つた傷を癒すのが、篠原さんの特訓になつていた。

浄化や癒しは思ったより大変な力だから、それのみになるのも分かる。

日に見えるような攻撃的な力とは違つて、浄化や癒しは目に見えないものを相手にするよつのもの。癒しは傷が治つていくのは分かるけど、傷の状態を見て、どう癒すかを決めるのは、力の使い手による。表面的なものだけ見て、そこだけに癒しの力を使うと、中の傷が治らないまま塞いでしまう……という恐ろしいことがおきてし

まうのだ。腕や足ならまだしも（これでも十分怖いけど）、内臓とかが傷ついているのに、表面だけ癒してしまつと、中で内出血や雑菌による炎症などが起きてしまう。

そのため、癒しの力を使う人は、治療するその傷を間近でよく見なければならぬ。どこまで傷ついているのか、どこまで癒しの力を必要とするのか。

たぶん、篠原さんは精神的に強くなつたと思う。みんなのように田に見えて強くなつたという感じではないけど、芯が強くなつたと思つ。

蒼井くんと大野くんは、力を想像したとおりに使いながら、剣と力を上手く使い合わせてきている。

蒼井くんは自分の手から離れたところの空気 風を操ることを覚えた。これで多方面からの攻撃にもある程度対応できる。

大野くんは空中にある水分を集めて形にできるよつになつた。蒼井くんに比べて進んでいないうえ見えるけど、集める量が違うんだから見えても仕方ない。代わりに、水の近くであれば、たくさんさんの水を直接操ることができる。

結局、属性に縛られたままだけど、それでも力の使い方のバリエーションは増えた。

六日間 城にいたときよりも、はるかに強くなつた。

力の使い方のコツを覚えだしたおかげだろうけど……みんな、大野くんの言葉が影響しているところもあるだろう。

ただ、それが、焦りに繋がらなければいいのだけど……

* * *

その日の晩過ぎ、ヴァイスさんが戻ってきた。
馬を駆つてたどり着くと、汗だくで馬から下りた。

「遅くなつてすみませんでした」

ディリアさんに頭を下げるヴァイスさん。

そういうえば、向こうの世界とあまり代わらない姿や、使用目的（乗つたりして移動手段に使つたり）するものは、向こうの世界で当てはまる言葉になるのだろう。形も完全に同じじゃなし、色も奇抜な色をしている。

でも、ヴァイスさんが乗つてきたのは『馬』と呼ばれている。たぶん、こっちの世界の言葉をしゃべっているけど、元いた世界に同じようなものが存在すると、馴染んだ言葉に自動的に翻訳されるんだろう。

でもつて、それも召喚するときの条件に入つてているんだろう。召喚した相手と意思疎通ができなければ、とてもじゃないけど、魔王を討つてください、なんてお願ひできなもの。

なんて、つらつら余計なことを考へてみると、ディリアさんとヴァイスさんが一人して私を見ていた。

私、なにかした？

「あの……？」

「ああ、すみません、カリンさん」

ちよつととまどつた雰囲気でディリアさんが答える。

……つて、そういうえば、私、ヴァイスさんがどうしてお城に戻つたのか、理由知らないんだけど。

「そついえば、ヴァイスさんはどうしてお城に？」

「それは……」

言いよどむヴァイスさんは、『ディリアさんは助けを求めるよう』
視線を移す。

ディリアさんは一拍おいた後。

「ヴァイス隊長には今までの魔王討伐について調べてもらつたんです」

「はあ……今、じる?」

「ええ、まあ。その……カリンさんがクリスタルを通して何かを視たのでしょうか? あれは前回の勇者が置いていったものだといつていましたし……それで、それらを調べたら、今回の魔王討伐に少しは有益な情報はないかと……」

初耳なんですが、それ。

あ、でも、蒼井くんたちは理由を知っていたみたい。私が何か『視た』といつても驚かないし、逆にそれで と促している。

でも、私が視たのって 魔王討伐のことより、その後のことを教えてくれたようなものだつたからなあ。精靈王云々はあまり必要ないことだろうし。

……つて、私つて何か変なことを言つたから、ディリアさんが調べようとしたんじゃ……うーん、調べられるとマズイこととかあるし。いやいや、あれは城に記憶されるようなものじゃあ……

あれこれ考えると、ヴァイスさんが報告書と思しきものを取り出してディリアさんに渡した。

ディリアさんはそれを受け取り見はじめると、蒼井くんたちが興味津々で覗き込んだ。それを感じたのか、ディリアさんは声に出して読み始める。

私は内心、ひえーっやめてー! という状態。
バレないだろ? けど、やっぱり心臓に悪いよ……

「ショーン暦七百九十九年、魔王の出現 いつにない魔王誕生により、魔族の固体数が倍増、当代勇者を魔王討伐に向けるが、たどり着けずに死亡」

感情を交えず読み上げていくティリアさんと逆に、たどり着けずに途中で勇者が亡くなつたといつところでみんなが動搖する。

この辺りの話は図書館へと行けばおのずと知れる情報なんだけど、みんなは力に慣れる稽古と称して、ほとんどそういう情報を手にすることがなかつただろう。もちろん、それを知つて嫌がられても困るから、周囲もそういう情報排除していたところもある。好き勝手していた私だけが、まあ、あれこれ知つているわけだけど……その辺はすでに知つていた情報だつたし。

「 勇者死亡の報告を受け、すぐにまた勇者選定を行う。が、新たな勇者は魔王討伐を辞退。その後、この事態をどうすべきか協議が始まり、話し合いの後、魔王を討てる存在を呼び出す召喚陣を作ることになった 」

魔王には寿命がある。しかも、人より短い寿命が。

けれど、その寿命を待つていられないほど、魔族の被害があつてそして、魔王を滅ぼすために力を持ったものを呼び出す召喚陣を作ることになった。

確かに、当時の力ある者たちが集まつて、力を込めながら一文字というか記号?を書き込んで……一年近くかけて召喚陣を作り上げたといつていた。

成功するかどうか、現れた人物が引き受けてくれるかどうか、そんなことは考えられないほど切羽詰つていたほど。

そして……

「 召喚陣によつて呼び出されたのは、当時、十代前半の少年。名は

「リン」

冷や汗がたらりと頬を伝つ。

にしても、そういうえばあの時名を聞かれたとき、花梨と答えたけど、呼ばれた衝撃でくらくらしていく、こっちの人には聞こえたのは『りん』のみだった。で、『リン』と呼ばれることになつたんだけど……

十代前半の少年ですか。

そんな風に伝わっていたとは……ちょっと衝撃だわ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8281m/>

二度目の勇者

2011年10月8日22時17分発行